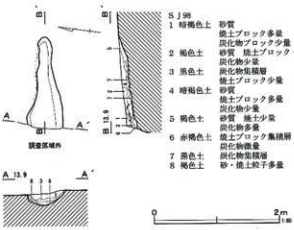
第７表　第98号住居跡出土遺物観察表（第29図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	重量	残存(%)	タイプ	胎土	焼成	色調	出土位置・備考	図版
1	土師器	坏	(14.0)	3.5	－	27.1	5	下北		普通	にぶい橙		



第28図　第98号住居跡

第29図　第98号住居跡出土遺物

平面形は東西にやや長い長方形で、主軸方向はN－9°－Wである。規模は東西軸4.25m、南北軸3.90m、確認面からの深さは0.32mである。

カマドは北壁西寄りに設けられ、方位はN－13°－Wと住居跡本体に対してやや西に振れる。袖部は両側ともに確認されなかった。燃焼部は北壁より内側から、床面より低く掘り窪められるが、煙道部とは段差をもたず境界が不明瞭である。底面被熱箇所や後述する、支脚と思われる土器が壁外に位置することから、壁外で幅狭になる箇所が燃焼部と煙道部を平面的に分けたものと思われる。よって、燃焼部は壁外におよぶ構造であったと考えたい。燃焼部底面では、口縁部および底面を欠いた土師器甕が逆位で出土している。土層観察から察する限り、土師器甕は天井崩落土（５・６層）の形成以前から据えられており、カマド機能時にはすでにこの位置に存在していたものと考えられ、支脚の可能性がある。

以上から計測されたカマドの規模は、燃焼部が奥行き125cm、幅36cm、煙道部は長さ85cm、幅32cmで、全長は210cm、底面傾斜角は５°である。

遺物は、カマド、床面および覆土や掘り方から、土師器坏・甕・小型甕・甑、須恵器高台付埦、ミニチュア土器などが出土している。

カマド燃焼部では、確認面付近から１の土師器坏が出土しているほか、底面では６の土師器甕が逆位で出土している。６は先述した出土状況から、カマド支脚として転用された可能性がある。４は湖西産の須恵器高台付坏で覆土下層から出土している。

時期は、出土遺物から７世紀末から８世紀初頭に位置づけられる。

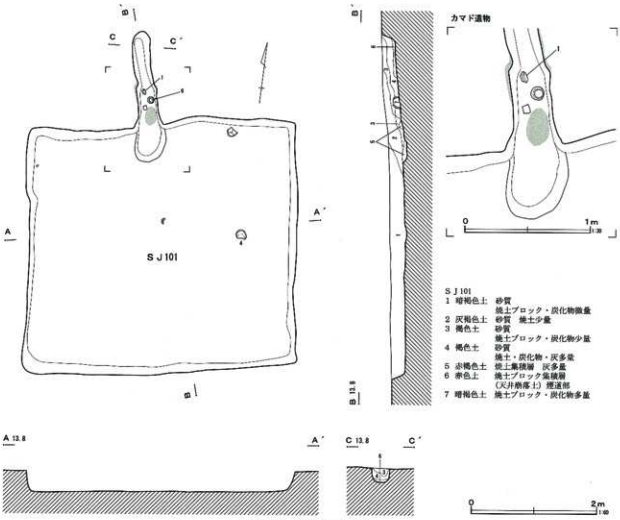
第102号住居跡（第32・33図）

調査区東部、G－７・８グリッドに位置する。第94・105・110・117号住居跡と重複し、新旧関係は、第105・110・117号住居跡よりも古く、第94号住居跡よりも新しい。他遺構との重複が著しく、また出土遺物も時期が乱れており、遺構の新旧判断は困難を極めた。平面形が極端に東西に長く、カマドも見られず不自然であるが、住居跡の範囲は、遺構確認面で観察された灰色シルトの分布を尊重して決定した。

住居跡南東部は調査区域外に及び未検出であるほか、南壁は確認できず、他遺構との重複状況からの推測である。第105号住居は本住居跡の覆土中に掘り込まれている。

平面形は東西に長い長方形で、主軸方向はN－９°－Eである。規模は東西軸5.0m、南北軸は推定で3.5m、確認面からの深さ0.33mである。

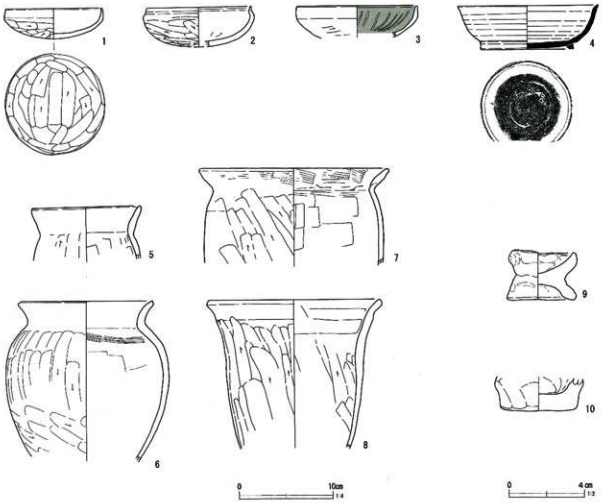
遺物は覆土中から土師器坏・甕、須恵器高台付坏・高坏・壺のほか、砥石が出土している。４は須恵器壺で、１は須恵器高台付坏の底部破片で、削り出



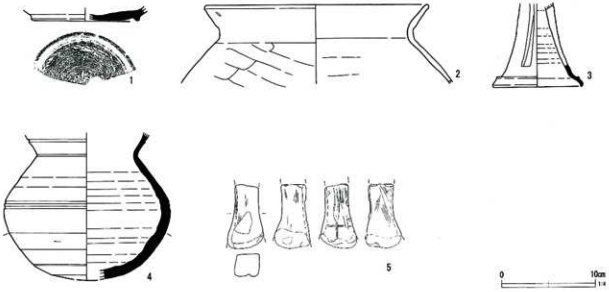
第30図　第101号住居跡

第８表　第101号住居跡出土遺物観察表（第31図）

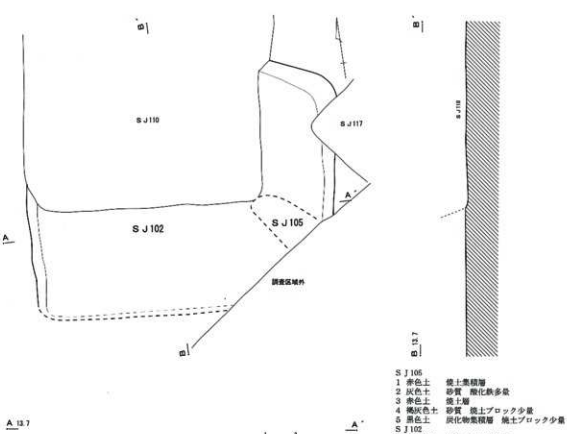
番号	種別	器種	口径	器高	底径	重量	残存(%)	タイプ	胎土	焼成	色調	出土位置・備考	図版
1	土師器	坏	10.2	3.2	－	89.2	90	埼北		普通	橙	カマド燃焼部	
2	土師器	坏	(11.0)	4.2	－	48.3	30	栃南		普通	明褐灰		
3	土師器	坏	(11.8)	3.4	－	23.1	15	佐野	角、針	普通	にぶい黄橙		
4	須恵器	高台付杯	15.0	4.6	10.0	197.7	70	湖西		良好	灰白		161-4
5	土師器	甕	(11.8)	5.8	－	84.5	15	茨西	雲、角、針	普通	にぶい黄橙	掘り方	
6	土師器	甕	14.0	16.9	－	934.8	70	茨西・栃南		普通	橙	被熱　カマド支脚	183-1
7	土師器	甕	(22.4)	10.2	－	99.4	10	栃南	雲、角	普通	浅黄橙		
8	土師器	甑	(18.2)	15.7	－	277.0	10	茨西		普通	明褐	掘り方　外面に大黒斑	
9	土製品	ミニチュア	3.4	2.6	(3.7)	21.3	80			普通	にぶい黄橙		151-5
10	土製品	ミニチュア	－	1.8	4.0	32.5	35			普通	にぶい橙		



第31図　第101号住居跡出土遺物



第32図　第102号住居跡出土遺物



第33図　第102・105号住居跡

第９表　第102号住居跡出土遺物観察表（第32図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	重量	残存(%)	タイプ	胎土	焼成	色調	出土位置・備考	図版
1	須恵器	高台付坏	－	1.6	(11.5)	72.8	5	群東	雲	不良	灰白		
2	土師器	甕	(24.6)	8.4	－	147.1	5	埼北	雲、角、針	普通	にぶい黄橙		
3	須恵器	高坏	－	8.8	9.2	77.9	30	管ノ沢	針	普通	灰	カマド	
4	須恵器	壺	－	15.5	－	543.5	60	湖西		普通	灰		183−2
5	石製品	紙石	長3.7幅3.8厚2.4重99.6								黒褐	砂岩製	235−1

し高台である。

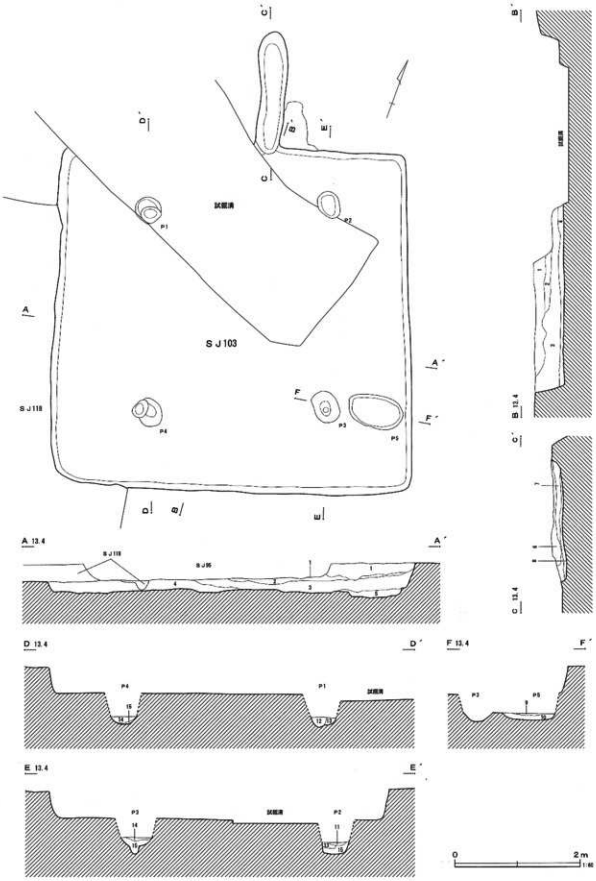
時期は、他遺構との重複が著しく、新旧関係の判断は困難を極めた。灰色シルト土の分布範囲出土遺物から７世紀末から８世紀初頭に位置づけられる。

第103号住居跡（第34図）

調査区中央、H－３・４グリッドに位置する。住居跡北側を試掘溝によって壊されているほか、第95・107・118・127・238号住居跡と重複し、新旧関係は第95・118号住居跡よりも古く、第107・127・238号住居跡よりも新しい。

平面形は方形で、主軸方向はN－20°－Wである。規模は東西軸5.67m、南北軸5.38mで、確認面からの深さ0.34mである。

カマドは北壁中央に設けられる。試掘溝によって壊されていることもあり、各部の詳細は不明であるが、袖部は両側ともに未検出で、燃焼部は壁外におよぶ構造である。燃焼部底面は煙道部へ向かって緩やかに上昇して煙道部へ移行する。煙道部底面は傾

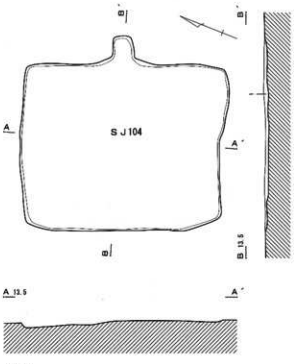


第34図　第103号住居跡

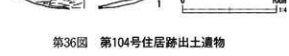
ＳＪ103
1 褐色土　シルト質　焼土ブロック微量
2 黒色土　炭化物集積層　焼土ブロック多量　土器多量
3 褐灰色土　砂質　黄褐色シルト土ブロック多量
炭化物ブロック少量
4 黒褐色土　炭化物集積層　黄灰色砂質土ブロック多量
焼土ブロック少量
5 褐色土　炭化物やや多量
6 橙色土　焼土ブロック集積層　（天井崩落土）　煙道部
7 黒色土　炭化物集積層
8 灰色土　炭集積層
9 灰黒色土　粘土質　炭化物少量
10 黄灰色土　粘土質　粘質土ブロック少量
11 黒色土　炭化物集積層
12 灰黒色土　粘土質　白色粘質土ブロック少量　柱痕跡
13 暗灰色土　粘土質　白色粘質土ブロック微量
14 灰白色土　粘土質　白色粘質土ブロック微量
15 黒色土　粘土質　焼土粒子少量　炭化物多量

斜を変え、水平に近く外側へ延びている。

カマド以外の施設としては、柱穴が4基確認されている。いずれも床面からは確認できず、床面を30～40cmほど掘り下げた高さで検出した。P1は円形で42×38cm、床面からの深さ51cm、P2は楕円形で42×36cm、床面からの深さ53cm、P3は楕円形で50×40cm、床面からの深さ55cm、P4は楕円形で46×40cm、床面からの深さ48cm、P5は楕円形で88×50cm、床面からの深さ41cmである。



第35図　第104号住居跡



第36図　第104号住居跡出土遺物

遺物は、図化し得なかったが、7世紀前半の土師器坏の破片が少量出土している。遺構の重複関係から判断して、本住居跡の帰属時期を示しているものと思われる。

第104号住居跡（第35・36図）

調査区中央部、G－3グリッドに位置する。第176号住居跡と重複し、新旧関係は本住居跡の方が新しい。確認面からの掘り込みが浅く、床面は残っていない。検出されたのは掘り方のみである。

平面形は南北に長い長方形で、南壁はやや歪んでいる。主軸方向はN－70°－Eで、規模は東西軸2.57m、南北軸3.24m、確認面からの深さ0.06mである。

カマドは東壁中央に設けられるが、各部の詳細は不明である。周辺には焼土ブロックが分布していた。

遺物はほとんど出土しておらず、わずかに土師器坏の破片が出土したのみである。図化したのは1点で、時期は8世紀前半と思われる。

第105号住居跡（第33・37図）

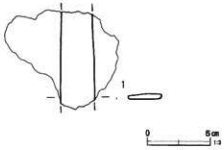
調査区東側、G－8グリッドに位置する。第102・110号住居跡と重複し、新旧関係は本住居跡の方が新しい。検出されたのはカマド煙道部のみで、第102号住居跡の覆土中に掘り込まれていた。遺構確認時点でその存在を確認できず、平面形、規模を捉えることはできなかった。カマド方位の詳細は不明であるが、北西を向いていたものと思われる。住居

第10表　第104号住居跡出土遺物観察表（第36図）

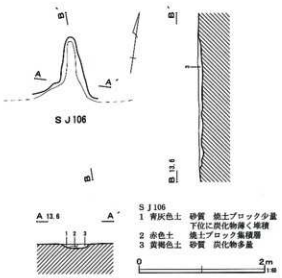
番号	種別	器種	口径	器高	底径	重量	残存(%)	タイプ	胎土	焼成	色調	出土位置・備考	図版
1	土師器	坏	(15.8)	3.4	－	40.8	20	埼北	雲、角	普通	橙		

第11表　第105号住居跡出土遺物観察表（第37図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	重量	残存(%)	タイプ	胎土	焼成	色調	出土位置・備考	図版
1	鉄製品	不明	長(5.2)幅1.8厚0.3重63.2									延板状	237-1



第37図　第105号住居跡出土遺物



第38図　第106号住居跡

跡本体は調査区域外におよんでおり不明である。

煙道部は天井が崩落しており、底面には炭化物が集積する。遺物は、鉄製品が一点出土している。

第106号住居跡（第38・39図）

調査区中央部、F－3・4グリッドに位置する。第193号住居跡と重複し、新旧関係は本住居跡の方が新しい。遺構確認面からの掘り込みが浅く、検出されたのはやや深く掘り込まれた燃焼部底面のみである。カマドは北側に設けられ、方位はN－10°－Wである。掘り方内およびカマド前面には炭化物や焼土ブロックが集積している。

遺物は、覆土から土師器坏・甕、須恵器蓋などが出土している。3は土師器甕の破片で、外面はミガキが入り、胎土に白雲母を含んでいる。

時期は、出土遺物から7世紀第Ⅰ四半期に位置づけられる。

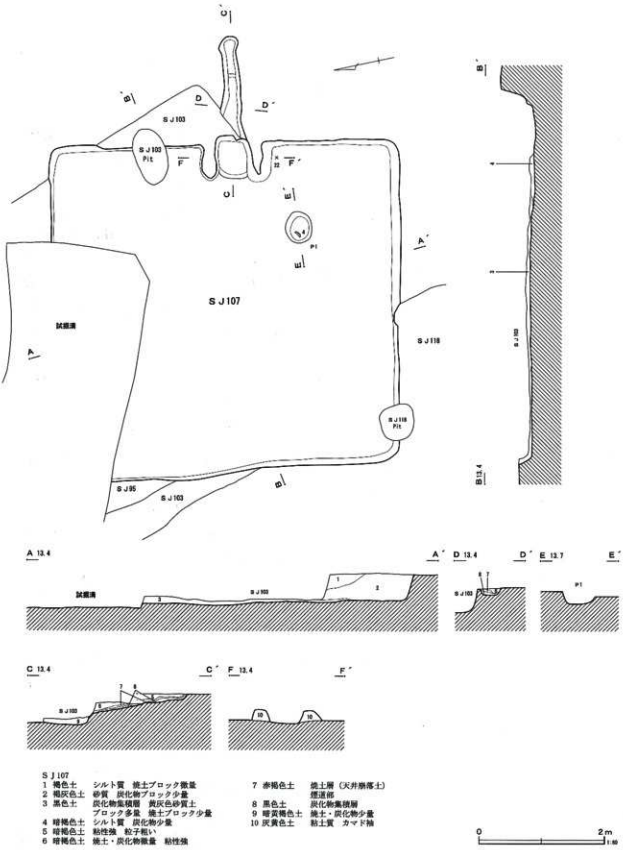
第107号住居跡（第40・41図）

調査区ほぼ中央、H・I－4グリッドに位置する。第95・103・109・118・119・127・173・238号住居跡と重複し、新旧関係は第95・103・118号住居跡よりも古く、第109・127・173・238号住居跡よりも新

第39図　第106号住居跡出土遺物

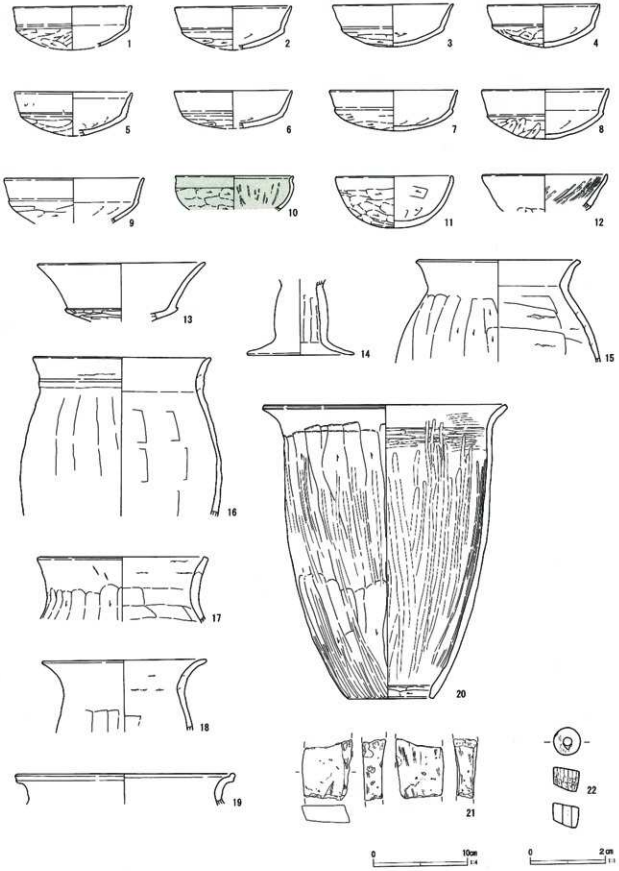
第12表　第106号住居跡出土遺物観察表（第39図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	重量	残存(%)	タイプ	胎土	焼成	色調	出土位置・備考	図版
1	土師器	坏	(14.0)	3.6	－	39.6	20	茨西	雲	普通	橙		
2	須恵器	蓋	(8.1)	2.2	－	11.2	10	湖西		普通	灰		
3	土師器	甕	(16.6)	6.8	－	74.0	5	茨西	雲、角、針	普通	にぶい黄橙		



S J 107
1 褐色土　シルト質　焼土ブロック微量
2 褐灰色土　砂質　炭化物ブロック少量
3 黒色土　炭化物集積層　黄灰色砂質土
ブロック多量　焼土ブロック少量
4 暗褐色土　シルト質　炭化物少量
5 暗褐色土　粘性強　粒子粗い
6 暗褐色土　焼土・炭化物微量　粘性強
7 赤褐色土　焼土層（天井崩落土）
煙道部
8 黒色土　炭化物集積層
9 暗黄褐色土　焼土・炭化物少量
10 灰黄色土　粘土質　カマド袖

第40図　第107号住居跡



第41図　第107号住居跡出土遺物

第13表　第107号住居跡出土遺物観察表（第41図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	重量	残存(%)	タイプ	胎土	焼成	色調	出土位置・備考	図版
1	土師器	坏	(12.6)	4.2	－	40.2	30	埼北		普通	にぶい橙		
2	土師器	坏	(4.5)	12.4	－	140.6	75	群東	針	良好	明赤褐		
3	土師器	坏	(12.8)	4.5	－	117.6	40	群東	針	普通	橙		
4	土師器	坏	(12.0)	4.6	－	96.0	40	群東	針	普通	にぶい赤褐	内外面赤彩か	
5	土師器	坏	(12.4)	4.6	－	74.6	40	群東	針	普通	橙		
6	土師器	坏	(12.5)	4.0	－	54.8	20	群東	針	良好	赤褐		
7	土師器	坏	(13.7)	4.3	－	88.2	35	埼北	針	普通	橙		
8	土師器	坏	13.3	5.2	－	239.7	95	群東	針	良好	明赤褐	内外面赤彩か	161－6
9	土師器	坏	(14.9)	4.8	－	56.7	20	群東		普通	橙		
10	土師器	坏	(12.6)	3.7	－	15.9	15	埼南		普通	赤褐		
11	土師器	塊	12.5	5.4	－	206.5	95	下北	雲、角、針	普通	にぶい褐		161－7
12	土師器	坏	(13.2)	3.9	－	25.9	15	下北	角、針	普通	橙		
13	土師器	高坏	(18.1)	6.2	－	81.3	10	群東	針	普通	橙		
14	土師器	高坏	－	8.0	11.4	197.9	50	栃南		普通	橙		183－3
15	土師器	甕	16.6	10.8	－	302.3	20	茨西		普通	にぶい橙	被熱	
16	土師器	甕	(19.0)	16.6	－	301.6	15	群東	雲、角、針	普通	にぶい黄橙		
17	土師器	甕	(17.4)	7.0	－	174.9	10	茨西		普通	にぶい橙	被熱	
18	土師器	甕	(17.6)	7.6	－	234.2	10	下西	角	普通	橙	被熱	
19	土師器	甕	(21.0)	3.3	－	114.6	5	新治	雲、角	普通	褐灰		
20	土師器	甑	25.6	30.8	9.1	2259.9	90	群西	角、針	普通	橙		202－1
21	石製品	砥石	長6.4幅5.1厚1.8重102.8								灰オリーブ		235－1
22	石製品	臼玉	径0.72孔径0.21厚0.51重0.45										234－1

しい。試掘溝に北西部床面を大きく壊されるほか、第95・118号住居跡によって遺構上部を壊される。

平面形はほぼ正方形で、主軸方向はN－102°－W、規模は東西軸5.11m、南北軸5.49m、確認面からの深さは0.40mである。

カマドは東壁中央に設けられている。煙道部の一部は第95号住居跡によって壊されている。袖部は両側が残存していたが、左袖は上部を壊されていた。壁からの残存規模は、左袖57cm、右袖62cmで、構築土には灰黄色粘質土（10層）が用いられている。燃焼部は壁内に収まり、床面より5cmほど低く掘り窪められる。煙道部とは20cmほどの明瞭な段差をもって接続する。煙道部底面は傾斜角10°で上昇しながら、高低差5cmほどのわずかな段差をもち壁外に160cm延びる。

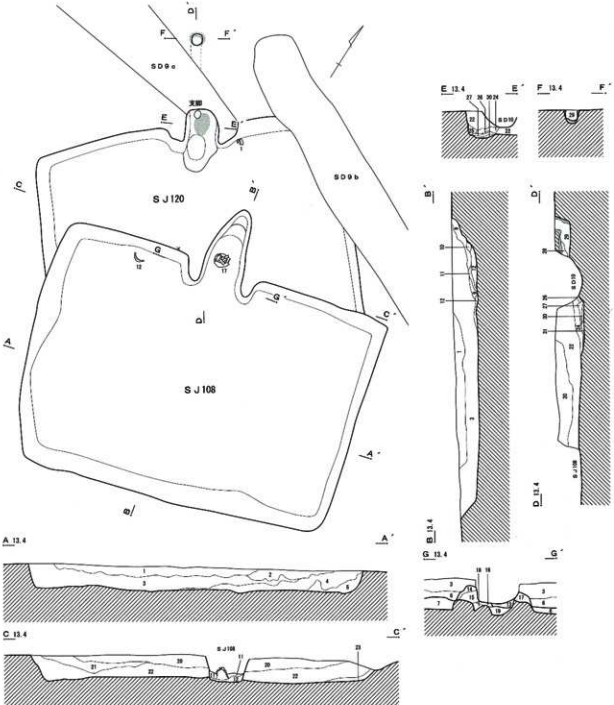
カマド以外の施設では、住居跡南西部にピットが1基検出された。P1は円形で50×42cm、床面からの深さ17cmで、覆土からは4の土師器坏が出土している。

遺物は、カマドや床面、覆土のほか、ピットや掘り方から、土師器坏・埦・高坏・甕・甑、須恵器坏・蓋・甕のほか、臼玉、砥石などが出土している。22は臼玉で、カマド右脇の床面から出土している。時期は出土遺物から、6世紀第Ⅱ四半期に位置づけられる。

第108号住居跡（第42・43図）

調査区ほぼ中央部、H－4・5グリッドに位置する。第109・120・133・247号住居跡、第9c号溝跡と重複し、新旧関係は、第133号住居跡、第9c号溝跡よりも古く、重複する第109・120・247号住居跡よりも新しい。

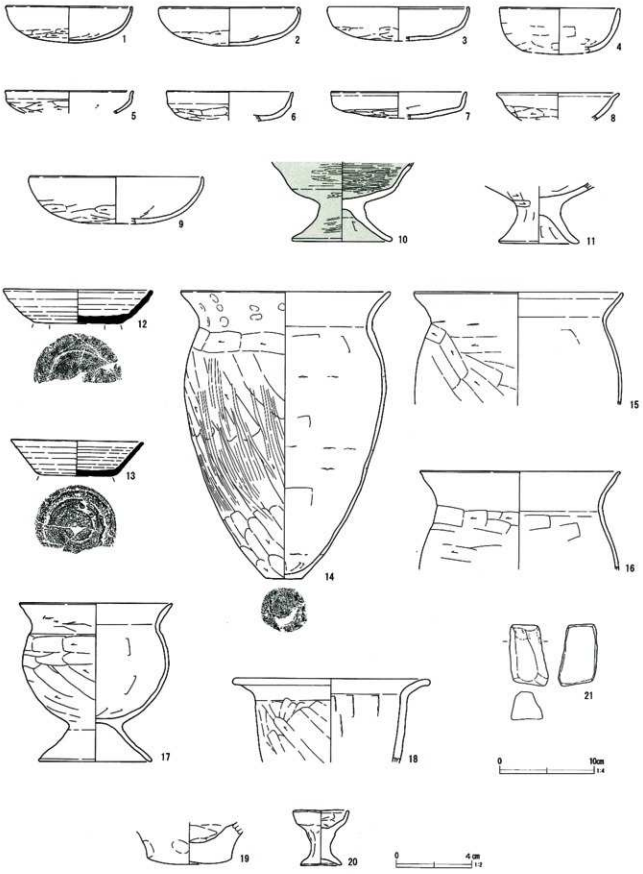
平面形は東西にやや長い長方形で、主軸方向はN－15°－Wである。規模は東西軸5.35m、南北軸3.65m、確認面からの深さ0.35mである。床面は、カマド周辺から中央部にかけて貼り床が貼られ、硬化が顕著であった。



SJ108・SJ120
1 褐炭色土　シルト質　黄褐色シルト土ブロック少量
　　炭化物ブロック少量
3 暗褐色土　シルト質　黄褐色シルト土ブロック多量
　　炭化物ブロック少量
2 暗褐色土　シルト質
4 暗褐色土　シルト質　黄褐色シルト土ブロック混層
　　炭化物多量
5 黒褐色土　炭化物集積層　焼土粒子少量
6 褐色土　砂質　焼土微量　炭化物少量
7 暗褐色土　砂質　炭化物砂子少量（＝SJ109撹り方）
8 褐色土　砂質　暗褐色粘質土ブロック多量
9 暗褐色土　焼土ブロック多量　炭化物少量
10 褐色土　シルト土　炭化物少量
11 炭色土　炭集積層
12 暗炭色土　砂質　黄褐色土ブロック少量
　　焼土粒子多量
13 暗褐色土　砂質　炭化物少量
14 黄褐色土　シルト質（＝左縞）
15 暗褐色土　シルト質　焼土ブロック少量
　　炭化物微量（＝左縞）
16 黒炭色土　炭化物・炭集積層
　　焼土ブロック多量
17 暗褐色土　砂質　（＝右縞）
18 暗褐色土　砂質　黄褐色砂質土ブロック多量
19 暗炭色土　砂質　焼土・炭化物多量
20 暗褐色土　砂質　焼土粒子微量
　　炭化物ブロック少量
21 黒色土　炭化物集積層　暗褐色シルト土多量
　　黄褐色シルト土ブロック微量
　　焼土粒子微量　炭化物多量
22 褐色土　砂質　暗褐色砂質土極く多量
　　黄褐色砂質土多量　炭化物多量
23 黄褐色土　砂質　下位に薄く炭化物堆積
24 黄褐色土　焼土ブロック少量　粘性強い
25 黄褐色土　しまり強い　粘性強い
26 赤褐色土　（＝焼土部天井崩落土）
27 黒炭色土　炭集積層
28 黄褐色土　炭化物微量　粘性強い
29 黄褐色土　炭化物微量　粘性強い
　　しまり強い　下位に薄く炭堆積
30 暗赤褐色土　粘性強い（＝火床面）
31 黄褐色土　焼土粒子少量　炭化物多量
　　粘性強い

0　2m
1:80

第42図　第108・120号住居跡



第43図　第108号住居跡出土遺物

第14表　第108号住居跡出土遺物観察表（第43図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	重量	残存(%)	タイプ	胎土	焼成	色調	出土位置・備考	図版
1	土師器	坏	(13.3)	4.8	－	78.1	45	埼北		普通	橙		
2	土師器	坏	(14.8)	4.1	－	67.4	40	埼北	角、針	普通	にぶい橙		
3	土師器	坏	(14.5)	3.6	－	32.9	20	埼北	針	普通	明褐		
4	土師器	塊	(12.8)	4.8	－	74.2	30	茨西	雲、針	普通	灰黄褐	掘り方	
5	土師器	坏	(13.4)	2.4	－	31.8	20	太田	雲、針	普通	橙		
6	土師器	坏	(13.4)	3.1	－	40.1	20	埼北	雲	普通	灰黄褐		
7	土師器	坏	14.4	2.8	－	99.9	50	埼北		普通	にぶい橙		
8	土師器	坏	(12.8)	2.9	－	20.9	10	柳南	角	普通	明黄褐	掘り方	
9	土師器	坏	(18.8)	5.0	－	83.5	35	佐野	針	普通	橙	内面黒色処理か	
10	土師器	高坏	－	8.4	(10.6)	231.8	40	茨西	針	普通	赤褐		
11	土師器	台付甕	－	6.0	(8.6)	174.9	10	埼北	雲	普通	にぶい黄橙	掘り方	
12	須恵器	坏	(15.7)	3.6	9.2	90.0	35	南比企	雲、針	不良	灰白		
13	須恵器	坏	(14.0)	3.7	7.7	90.3	55	新治	雲	不良	灰		
14	土師器	甕	(22.2)	30.4	3.8	1069.2	70	埼北	雲、角、針	普通	にぶい黄橙		202−2
15	土師器	甕	(22.1)	11.8	－	149.4	10	埼北	針	普通	橙	カマド燃焼部	
16	土師器	甕	(21.3)	10.4	－	121.9	10	埼北	針	普通	橙		
17	土師器	台付甕	16.4	16.7	11.8	414.9	85	埼玉		普通	灰黄褐	外面煤付着	183−4
18	土師器	甑か	(20.0)	8.8	－	123.0	5	茨西	雲、角	普通	橙	掘り方	
19	土製品	ミニチュア	－	2.2	4.5	34.4	35		角	普通	にぶい橙	掘り方	
20	土製品	ミニチュア	(2.9)	2.9	(2.2)	6.5	40			普通	にぶい黄橙		161−8
21	石製品	砥石	長6.3幅3.8厚3.0重97.1								にぶい黄橙	掘り方　凝灰岩製	

カマドは北壁中央に設けられている。袖部は両側が確認されており、断面観察では、袖の崩落と修復を繰り返した様子がうかがえた。平面図で図示したのは廃棄段階でのカマド袖である。

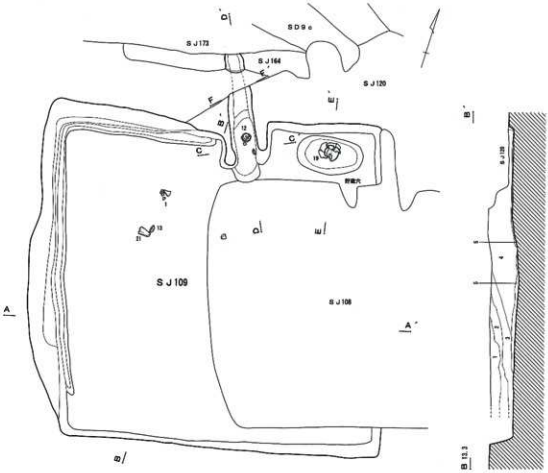
構築当初段階のカマド袖は、両側ともに地山を削り出している。ただし袖上部は確認できず、どの高さまで削り出されていたかは不明である。削り出した高さは、左袖20cm、右袖15cmである。同段階での燃焼部はその後のものに比べて狭く、幅40cmほどで、床面より５cmほど低く掘り窪められている。その後、崩落と修復が繰り返され13・16・18層が堆積し、構築の最終段階は14・15層が左袖、17層が右袖となり、16・13層の上端が燃焼部底面となった。この段階での袖部は、構築土に黄褐色シルト土や暗褐色砂質土が用いられており、壁からの残存規模は左袖45cm、右袖43cmである。同段階での床面は７・８層の上端で、燃焼部底面の掘り込みはほとんど見られない。燃焼部は北壁を70cmほど切り込み、先端で20cmほどの段差を設ける。この段差は平坦面をほとんど持たず、ただちに立ち上がることから、外部へ向かう煙道部とは考え難く、燃焼部底面との標高差は、煙出し穴底面と考えられる。よって、燃焼部と煙道部の底面は段差を設け、わずかな接点で接続していたものと思われる。

遺物は、床面および覆土、掘り方から土師器坏・塊・高坏・甕・台付甕、須恵器坏のほか、ミニチュア土器、製鉄残滓、砥石などが出土している。17の台付甕はカマド燃焼部で出土しており、器面には煤が付着している。13は新治産の須恵器坏で床面から出土している。

時期は出土遺物から、８世紀第Ⅲ四半期に位置づけられる。

第109号住居跡（第44・45図）

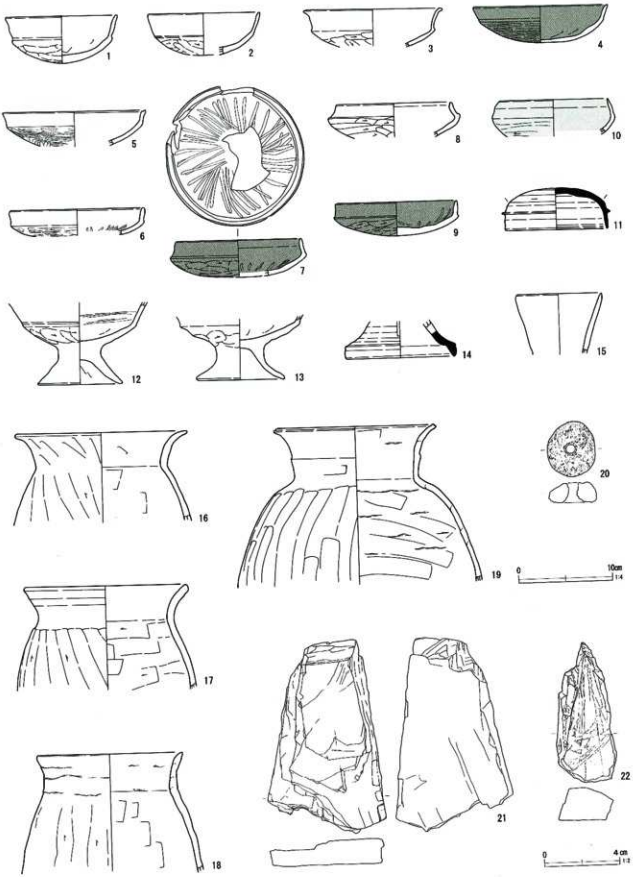
調査区ほぼ中央部、H・I−４・５グリッドに位置する。第107・108・120・164・173・238号住居跡と重複し、新旧関係は、第238号住居跡よりも新しく、その他の住居跡よりも古い。第108号住居跡に東半分の床面を大きく壊されるほか、第120・164・



SJ109
1 黒褐色土　シルト質　黄褐色砂質土ブロック多量
　　焼土ブロック少量　炭化物多量
2 黒色土　炭化物集積層　淡褐色砂質土ブロック多量
　　焼土ブロック多量
3 黒褐色土　シルト質
4 灰褐色土　シルト質　黄褐色砂質土ブロック多量
　　焼土ブロック・炭化物少量
5 黒色土　炭化物集積層　黄褐色砂質土ブロック少量
6 灰色土　砂質　焼土ブロック多量
7 褐色土　焼土少量　炭化物少量　粘性強　粒子細かい
8 黄褐色土　粘土質　粘性極く強　粒子粗い
9 赤褐色土　天井崩落土　被覆層
10 黄褐色土　粘土質　粘性強　粒子粗い
11 赤褐色土　天井崩落土
12 黒色土　炭化物集積層
13 暗灰褐色土　炭化物少量　粘性強　粒子粗い
14 黄灰褐色土　粘土質　カマド袖

0　2m
1:60

第44図　第109号住居跡



第45図　第109号住居跡出土遺物

第15表　第109号住居跡出土遺物観察表（第45図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	重量	残存(%)	タイプ	胎土	焼成	色調	出土位置・備考	図版
1	土師器	坏	(13.2)	5.0	－	123.4	45	群東	針	普通	にぶい黄橙		
2	土師器	坏	(12.0)	4.4	－	62.7	35	群東	針	普通	橙		
3	土師器	坏	(14.2)	4.0	－	84.8	20	埼北	針	普通	橙		
4	土師器	坏	14.1	3.9	－	141.4	70	埼玉・群馬	針	普通	黒		
5	土師器	坏	(15.0)	3.6	－	43.0	20	佐野	雲、針	良好	橙		
6	土師器	坏	(14.0)	2.8	－	37.9	15	栃南	雲、針	普通	褐灰	内面黒色処理か	
7	土師器	坏	13.2	3.9	－	204.4	80	佐野		普通	黒灰		
8	土師器	坏	(12.0)	3.6	－	36.5	25	埼北		良好	赤褐		
9	土師器	坏	12.8	3.6	－	173.9	60	佐野	雲、針	良好	黒灰		161－9
10	土師器	坏	(11.4)	3.8	－	23.4	20	比企	雲、針	良好	赤		161－10
11	須恵器	壷	(10.7)	4.3	－	72.6	30	猿投		普通	灰白		
12	土師器	高坏	－	8.7	9.0	392.1	80	茨西		良好	灰黄褐	内外面赤彩か　カマド支脚	
13	土師器	高坏	－	6.8	9.4	271.7	60	茨城	針	良好	橙		
14	須恵器	高坏	－	3.9	(11.4)	31.9	10	栃南	雲	普通	にぶい黄橙		
15	土師器	坩	(9.0)	6.4	－	87.3	10	埼北	雲、針	普通	黄橙		
16	土師器	甕	18.6	9.6	－	423.0	15	群東	角	良好	にぶい橙		
17	土師器	甕	17.2	11.2	－	597.2	35	茨西		普通	明赤褐	外面黒斑	
18	土師器	甕	(15.6)	12.5	－	484.7	20	茨城	角、針	普通	橙		
19	土師器	壺	17.0	16.7	－	1044.7	45	佐野		普通	灰黄	貯蔵穴	
20	石製品	有孔軽石	孔径0.9×1.0長5.8幅5.1厚2.1重21.7								灰白	軽石製	
21	石製品	不明	長20.3幅12.5厚2.6重1394.1									チャート製	
22	石製品	不明	長14.7幅5.7厚3.4重375.0								灰オリーブ	チャート製	

173号住居跡にカマドを壊される。

平面形は正方形に近く、主軸方向はN－17°－Wである。規模は東西軸5.16m、南北軸5.08m、確認面からの深さ0.37mである。

カマドは北壁中央に設けられ、方位はN－25°－Wで住居跡本体に対してやや西に振られる。前述のように、他遺構の掘削を受け遺存状況は著しく悪い。第120号住居跡には袖部から煙道部の上部を削平され、第164・173号住居跡には煙道部先端を完全に壊されている。

袖部は両側が確認され、壁からの残存規模は左袖53cm、右袖63cm、床面からの残存高は、両袖ともに20cmである。燃焼部は壁外へわずかにおよんでおり、底面は床面より5cmほど低く掘り窪められる。底面には炭化物が集積し、この上から土師器高坏（12）が伏せた状態で出土した。高坏は天井崩落土である11層に完全にパックされており、カマド機能時には燃焼部内に存したことから支脚として転用されたものと考えたい。

煙道部や煙出し穴は、他遺構の掘削を受けながらも、崩落せずに残存した箇所を断面で観察できた。煙道部は幅25cm、高さ25cmで、底面はほぼ水平に壁外へ延びる。煙出し穴は先端部が失われているが手前は残っており、おおむね垂直に掘り込まれている。煙出し穴の位置から推測すれば、削平の程度はわずかであったと思われる。

カマド以外の施設としては、貯蔵穴、壁溝が確認されている。貯蔵穴は住居跡北東コーナーに位置する。東西に長い長円形で、長軸104cm、短軸59cm、床面からの深さ21cmである。底面付近で11の土師器甕が出土している。

壁溝は、住居跡西壁からカマド左袖まで巡る。床面からの深さは10cmで、西側は幅5～15cmほどの平坦面を経て壁が立ち上がる。

遺物は、床面や貯蔵穴、覆土から出土しており、内容としては、土師器坏・坩・高坏・甕・壺、須恵

器坏・高坏・蓋、有孔軽石、緑泥片岩などが見れた。床面や覆土下層からは1の土師器坏、11の須恵器蓋や22の緑泥片岩などが出土しているが、出土遺物の大半は住居跡覆土上層の黒色土（2層）から出土した。ここから出土した土器は、2・3・4・7・9の土師器坏や、15の土師器坩、16や18の土師器甕などである。

時期は出土遺物より、6世紀第Ⅲ四半期に位置づけられる。

第110号住居跡（第46・47図）

調査区東部、G－7・8グリッドに位置する。第102・105号住居跡と重複し、新旧関係は第105号住居跡よりも古く、第102号住居跡より新しい。

平面形は正方形で主軸方向は$N-10^{\circ}-E$である。規模は東西軸4.00m、確認面からの深さ0.43mである。

カマドは北壁中央に設けられ、方位は$N-4^{\circ}-E$で住居跡本体に対してやや西に振れている。袖部は両側が確認され、構築土には黄灰色粘質土（7層）が用いられている。壁からの残存規模は、左袖76cm、右袖60cmで、床面からの残存高は、左右ともに25cmほどである。燃焼部は壁内に収まり、底面は床面と同じかわずかに高い位置にある。煙道部とは5～10cmほどの低い段差をもって接続する。煙道部底面は10°の傾斜で外側へ60cm延び、再び15cmほどの段差を設ける。段差部分は煙出し穴と思われ、底面は浅い擂鉢状となる。

遺物は、カマド、床面および覆土から土師器坏・甕、須恵器甕・大甕・壺などのほか、台石、馬歯が出土している。カマド前面から住居跡中央部にかけての床面付近では、6の須恵器大甕に伴い、馬歯や台石が出土している。3はロクロ土師器で8世紀後半に位置づけられるが混入と思われる。

出土遺物は、全体的に時期の乱れがあり、混入と思われる土器もある。住居跡の時期は、他遺構との重複関係から、7世紀第Ⅲ～Ⅳ四半期と思われる。

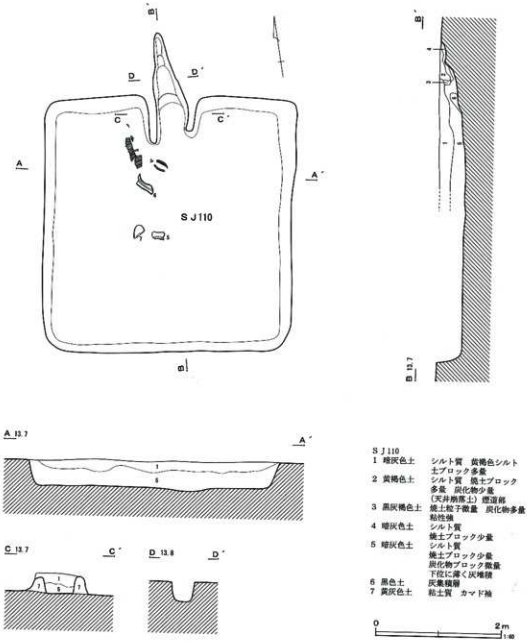
第111号住居跡（第48・49・50・51図）

調査区北側、D－3・4グリッドに位置し、流路跡第二次堆積層に掘り込まれ、周辺地山はしまりのない褐色粗流砂である。第158号住居跡、第28・35号土坑、第8号溝跡と重複し、新旧関係は、土坑と溝跡より古く、第158号住居跡よりも新しい。

平面形は東西に長い長方形で、主軸方向は$N-18^{\circ}-W$である。規模は東西軸5.12m、南北軸4.03mであり、確認面からの深さは最深部で92cmと非常に深い。地山が粗砂層であるため、住居跡壁面は各所で崩落が進み、立ち上がりは緩やかである。

カマドは北壁中央に設けられ、方位は$N-13^{\circ}-W$で住居跡本体に対してやや西に振れている。袖部は遺存状況が非常に良く、しまりの強い黄褐色粘質土（36層）で構築された両カマド袖の先端に補強材として据えられた土師器甕が検出された。左袖は甕（19）を逆位に据えていたが、手前側が崩落しておりカマド前面に分布していた。右袖は甕（20）を半截し、手前を逆位に、奥は正位に据えていた。組み合わされた手前と奥の土器内部には袖構築土が詰まっていた。補強材は袖部の延長上に配され、袖構築土により固定される北側以外の器面は露出している。焚口幅は50cm、補強材の先端部まで含めた燃焼部の規模は、奥行き66cm、幅50cmである。底面は床面よりも5～10cmほど低く掘り窪められるが、明瞭な掘り込み範囲は確認できない。17層は燃焼部の天井で袖部と同質の黄褐色粘質土である。両袖部とは接触しており、崩落しているのか、遺存しているのかの判断は難しいが、遺存したものと考えた時、燃焼部空間は高さ10cmしか確保されず、燃焼させるのに充分な空間とは考え難い。ここでは崩落した天井と判断したい。

燃焼部では、ほぼ完形の土器2個体を確認した。22の胴部下半は12の土器に入り込み、煙道部側に倒れこむようにして出土した。22は検出当初、甑と甕のセットと思われたが、底部を欠いて甑とした土師器甕であった。また、両土器の下位、燃焼部左寄りの位置では、土師器甕の底部が逆位で出土しており、



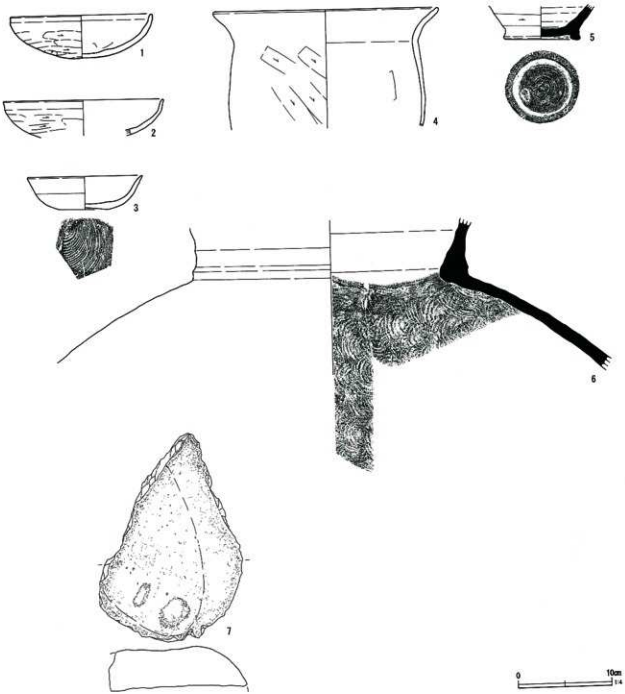
第46図　第110号住居跡

支脚に転用されたものと思われる。

煙道部および煙出し穴の残存状況も極めてよく、崩落せずに完全な形で現れた。煙道部は、燃焼部から15～20cmほどの高低差あるスロープ状の段差をもって接続し、底面は凹凸を繰り返しながら5°の傾斜角で緩やかに上昇し、壁外へ127cm延びる。天井や壁は非常に良く被熱しており、第49図C－C′の位置では幅35cm、高さ25cmの円環状の被熱箇所が、また第48図B－B′では、幅7～8cm平均で赤変した天井部（11層）がほぼ直角に煙出し穴へ接続する。

煙出し穴は、確認面において直径25cmの円環に被熱していたが、断面観察では、奥が崩落していた。確認面での検出状況と煙道部底面の段差から推した煙道部を第49図B－B′で示した。規模は、長さ110cm、確認面から底面までの高さ60cmである。

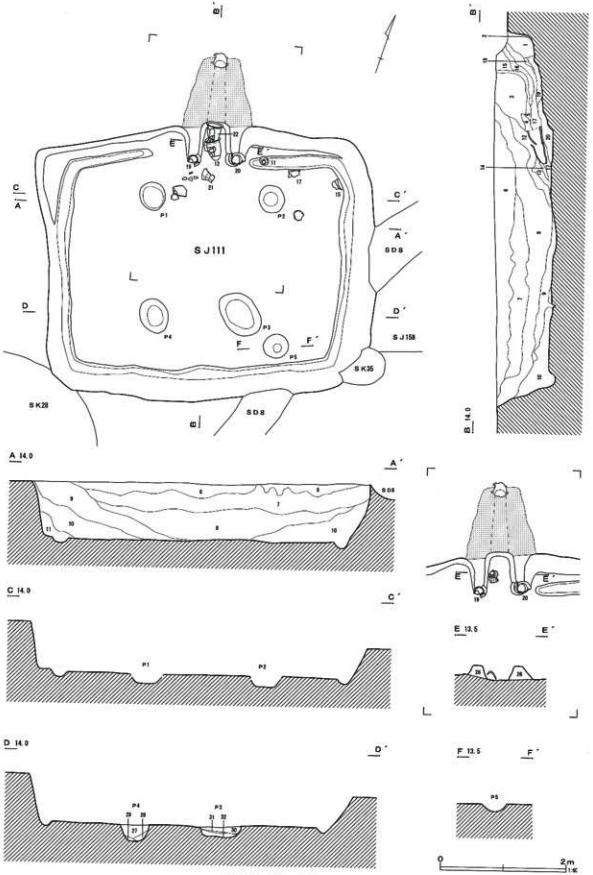
このほか、本住居跡ではカマド掘り方を確認した。平面形は、南北方向に長い台形状で、北側が短辺、南側が長辺となり住居跡北壁と接する。この範囲を



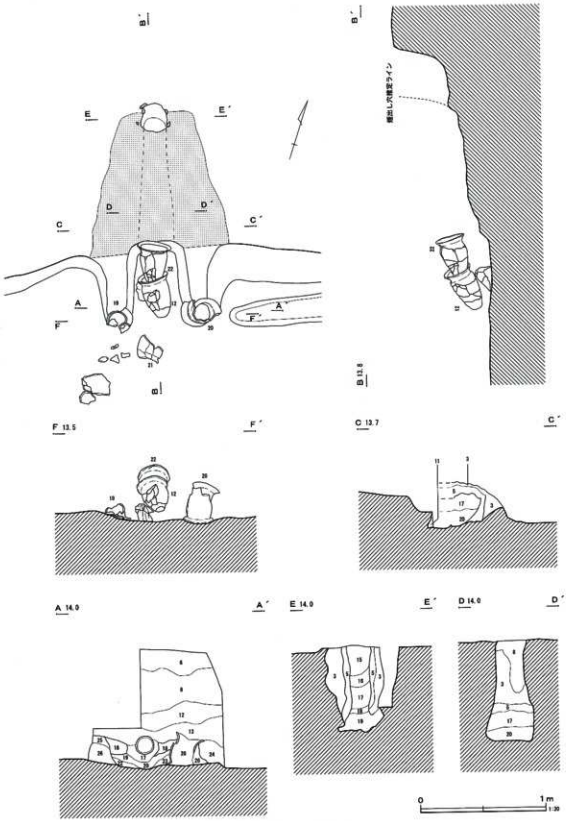
第47図　第110号住居跡出土遺物

第16表　第110号住居跡出土遺物観察表（第47図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	重量	残存(%)	タイプ	胎土	焼成	色調	出土位置・備考	図版
1	土師器	坏	14.9	4.5	－	150.4	55	埼北	角	普通	橙	カマド　被熱	162－1
2	土師器	坏	(16.8)	3.8	－	43.0	15	埼北	針	普通	橙		
3	ロクロ土師器	坏	(12.2)	3.5	(5.2)	71.8	20	下東		普通	にぶい橙	カマド	
4	土師器	甕	(23.5)	12.5	－	307.1	25	埼北		普通	橙	カマド　被熱	
5	須恵器	壺	－	3.5	7.7	179.8	20	東海		普通	灰白	内面火ぶくれ	
6	須恵器	大甕	－	16.3	－	710.5	5			良好	灰	降灰付着	
7	石製品	台石	長21.4幅14.7厚8.5重2087.4								灰	ホルンフェルス製	236－6



第48図　第111号住居跡



第49図　第111号住居跡カマド

SJ111		
1	明褐色土	粗粒砂　地山類似の層
2	黄褐色土	粘土質　焼土・炭化物・灰多量
3	黄褐色土	粘土質
4	黄褐色土	黄褐色粘質土ブロック多量　焼土粒子少量
5	赤褐色土	粘土層（天井崩落土）煙道部
6	黒色土	炭化物粒子層　粘土質 黄褐色粘質土少量　粘性強　粒子細かい
7	黄褐色土	粘土質　粒子粗い砂質土
8	褐色土	砂質　粒子粗い
9	黄褐色土	粘性強　しまり強　粒子細かい
10	褐色土	粘性強
11	黄褐色土	粘土質　しまり強
12	褐色土	砂質　黄褐色粘質土ブロック多量 炭化物少量
13	暗褐色土	砂質　炭化物多量　焼土粒子少量
14	褐色土	砂質　黄褐色粘質土ブロック多量 焼土ブロック・炭化物少量
15	明褐色土	粘土質　粘質土ブロック・焼土ブロック多量
16	暗褐色土	砂質　粘質土ブロック・焼土ブロック多量
17	暗黄褐色土	砂質　黄褐色粘質土ブロック多量 焼土ブロック・炭化物少量
18	黄褐色土	粘土層　焼土ブロック多量（天井崩落土）
19	黒褐色土	砂質　粘質土ブロック・焼土ブロックやや多量 炭化物やや少量
20	暗褐色土	粘土質
21	灰色土	炭集積層
22	黄褐色土	粘土層　下位に薄く灰堆積
23	灰褐色土	砂質
24	褐色土	砂質　黄褐色粘質土ブロック少量　炭化物少量
25	黄褐色土	粘土質（一左袖部）
26	黄褐色土	粘土層（一左袖部）
27	明褐色土	粘土質　焼土粒子・炭化物少量
28	暗褐色土	砂質　焼土・炭化物多量
29	黄褐色土	炭化物微量　粘性極く強い
30	暗褐色土	砂質　炭化物多量
31	黒色土	炭化物集積層
32	明褐色土	粘質土・炭化物微量

土坑状に掘り、カマド袖構築土と同質土（8層）を詰め込み、そこへ煙道部、煙出し穴を掘り込んでいる。掘り方の規模は、南北軸120cm、東西軸は北側で60cm、北壁に接する位置で115cmである。掘り方はほぼ垂直に掘り込まれ、確認面からの深さ60cm、底面はおおむね平坦である。煙出し穴や煙道部天井は、掘り方内に収まるが、煙道部底面は掘り方底面を10～25cmほど掘り込み、地山である褐色粗粒砂層に設けられる。20層は明褐色粗粒砂層で地山に酷似した土層であったが、下層に炭化物や灰、焼土ブロックを多量に含む黄褐色粘質土（21層）が形成されていたことから、掘り方はこの範囲までおよんでいたことがわかる。カマド構築当初の掘り方埋土がしまりの強い黄褐色粘質土であることから、20・21層はカマドの損壊を受け、これを修復した際に用いられた土層であることがわかる。

カマド以外の施設としては、柱穴、ピット、壁溝を確認した。壁溝はほぼ全周巡り、カマドの手前で両側ともに途切れる。幅は15～25cmで、床面からの深さは10cmである。

柱穴は4基確認された。いずれも床面からの深さが20cm前後でごく浅い。P3としたものは他の3基と平面位置がずれている。P1－P2間、P1－P4間の距離はともに195cmであるが、P1－P2間は200cmとやや長く、P3－P4間は135cmと短い。P3・P4は床面で、P1・P2は床面から5cmほど掘り下げた高さで確認した。P1は円形で43×40cm、床面からの深さ20cm、P2は円形で42×40cm、床面からの深さ17cm、P3は楕円形で75×55cm、床面からの深さ17cm、P4は楕円形で57×45cm、床面からの深さ25cmである。

このほかにP3の南東でP5を確認した。平面形は円形で40×37cm、確認面からの深さ12cmである。

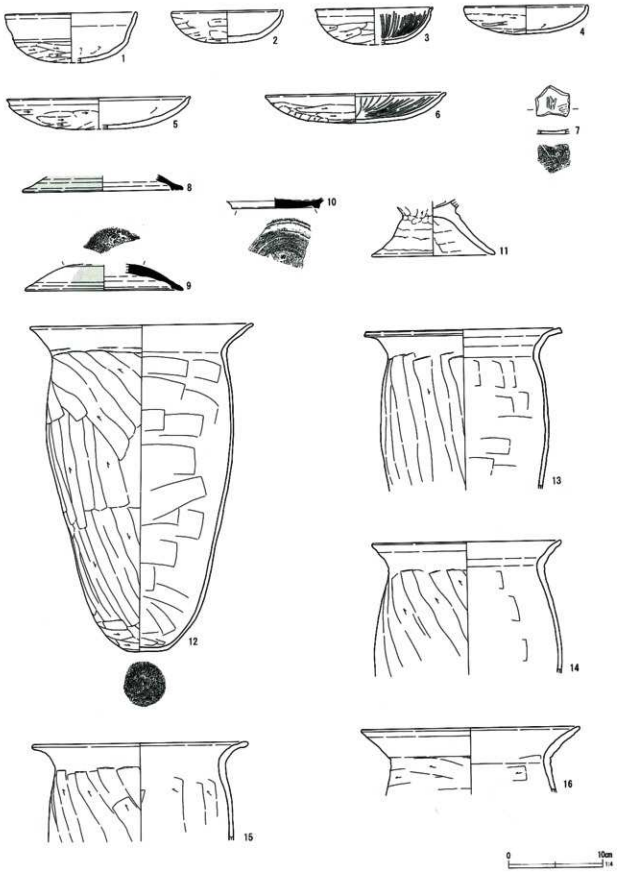
遺物はカマド燃焼部およびカマド付近の床面から多く出土したほか、覆土上層の炭化物層（1層）からも多く出土している。内容としては、土師器坏・高坏・甕・台付甕、須恵器坏・甕・蓋などで、土師器甕の出土量が10個体を超える。19は左袖補強材、20は右袖補強材である。12と22はカマド燃焼部で組み合わさって出土した。5・6は扁平な土師器坏で、6は内面に放射状暗文が見られる。

時期は出土遺物から、7世紀末から8世紀第Ⅰ四半期に位置づけられる。

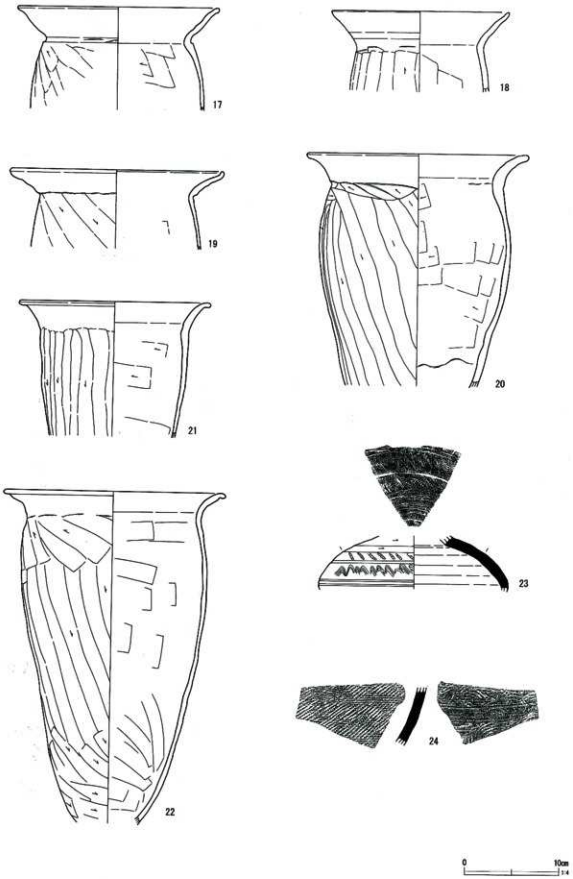
第112号住居跡（第52・53・54・55図）

調査区北、D・E－3グリッドに位置し、流路跡第二次堆積層中に掘り込まれる。周辺地山は褐色粗粒砂である。第157号住居跡、第28号土坑と重複し、新旧関係はいずれの遺構よりも古い。南壁は第157号住居跡北壁と接し、覆土中に同住居跡の煙道部煙道部が掘り込まれている。第28号土坑は南東コーナーの上部を壊すが、コーナー床面は残っている。

平面形は南北にやや長い長方形で、主軸方向はN－25°－Wである。規模は東西軸5.53m、南北軸5.95m、確認面からの深さ0.73mである。しまりの



第50図　第111号住居跡出土遺物（1）



第51図　第111号住居跡出土遺物（2）

第17表　第111号住居跡出土遺物観察表（第50・51図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	重量	残存(%)	タイプ	胎土	焼成	色調	出土位置・備考	図版
1	土師器	坏	(13.8)	5.3	－	102.2	40	群東	針	普通	にぶい赤褐		162－2
2	土師器	坏	11.8	3.4	－	109.6	60	埼北	角、針	普通	にぶい橙		162－3
3	土師器	坏	(12.3)	3.9	－	28.6	10	埼北	雲	良好	橙		
4	土師器	坏	(13.0)	3.0	－	59.8	20	埼北	雲、針	普通	橙		
5	土師器	坏	(19.2)	3.3	－	143.0	35	埼北	雲、角、針	普通	にぶい黄橙	内外面黒色処理か	162－4
6	土師器	坏	18.9	3.1	－	189.9	50	埼北	雲、針	普通	にぶい黄橙	カマド	
7	土師器	坏	－	－	－	7.0	5	栃南		普通	橙	木葉痕　内面黒色処理か	
8	須恵器	蓋	(17.0)	1.6	－	14.3	5			普通	灰		
9	須恵器	蓋	(16.6)	2.8	－	73.0	25	東海		良好	灰白		
10	須恵器	壺か	－	1.2	(9.2)	33.9	5	湖西		普通	灰白		
11	土師器	台付甕	－	5.9	12.8	278.7	15	茨西	雲、針	良好	明赤褐		162－5
12	土師器	甕	23.4	34.2	4.4	1253.0	95	埼北		普通	橙	カマド燃焼部	202－3
13	土師器	甕	20.7	17.0	－	719.7	40	埼北		普通	橙		
14	土師器	甕	(20.0)	14.0	－	620.3	30	埼北	角、針	普通	灰黄褐	P4	
15	土師器	甕	(22.6)	10.4	－	392.1	20	埼北	雲、角、針	普通	灰黄褐		
16	土師器	甕	(11.5)	7.0	－	287.5	10	群東	針	普通	にぶい橙		
17	土師器	甕	21.0	10.3	－	344.1	25	群東	雲、針	普通	橙	胴部外面に黒斑	
18	土師器	甕	(23.6)	8.6	－	240.0	15	茨西	雲、角	普通	にぶい褐	P4	
19	土師器	甕	(22.4)	8.3	－	422.1	15	茨西・千葉	雲、針	普通	橙	カマド左袖構築材	
20	土師器	甕	22.8	24.6	－	1328.6	70	佐野		普通	浅黄橙	カマド右袖構築材	
21	土師器	甕	(19.4)	14.3	－	192.3	10	群東	角、針	普通	にぶい褐	カマド　被熱	
22	土師器	甕	23.0	34.9	－	1414.1	90	埼北	角、針	普通	橙	カマド燃焼部	202－4
23	須恵器	蓋	(19.8)	5.6	－	93.2	20	在地	軽	良好	灰		
24	須恵器	甕	－	3.3	－	94.7	5	湖西か		普通	黄灰	P4	

弱い砂層中に掘り込まれているため、東西の壁は崩落が進行し、立ち上がりは傾斜がつく。覆土には地山と近似する粒粗砂層が厚く堆積している。

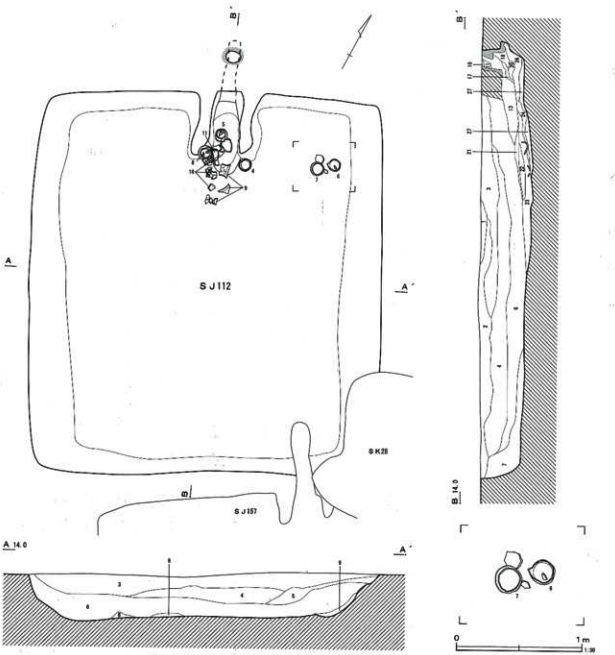
カマドは北壁中央に設けられる。袖部は両側が確認され、両袖先端では補強材として用いられた土師器甕（４・８）が逆位で出土した。甕は両側ともに口縁部から頸部ないしは胴部上半までしか残存していない。補強材まで含めた壁からの残存規模は、左袖110cm、右袖110cmで、焚口幅は45cmである。

燃焼部は壁内に収まり、底面は床面より５cmほど低く掘りくぼめられ、煙道部へ向かって5°の角度で上昇する。左袖寄りの位置では、土師器甕（８）が逆位で出土している。煙道部とは緩やかな段差を設けており、煙道部底面はほぼ水平に、壁外へ80cm延び、煙出しに接続する。天井は被熱部分が崩落していたが、それ以外は比較的よく残っていた。煙出しは、確認面において内径20cmの円環状被熱部として検出される。確認面からほぼ垂直に35cm掘りこまれ、煙道部へと接続する。掘り込み周縁は非常に良く被熱し赤変している。

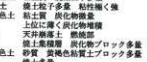
煙道部と煙出しの接続部では、底面から35cmの高さにおいて、煙出しを35cmほど貫いている。貫通位置が底面ではなく、煙出し中位にあること、また貫通先の天井も被熱赤変していたことという２点から、カマドが機能している期間に、外部から、あるいは壁や天井の崩落などにより土砂が埋まった。この段階で煙道が掘り直され、その後機能したことが理解される。

遺物は、カマド燃焼部や住居跡床面、覆土中から、土師器坏・甕・小型甕、須恵器坏・甕・蓋などのほか、鉄製品、鉄滓、種子、粘土塊などが出土している。

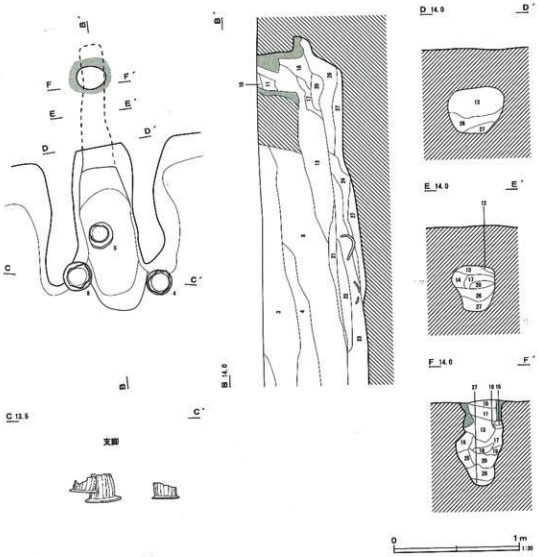
８や４はそれぞれ、左袖、右袖の補強材として、また５は支脚として用いられている。このほか、燃



S J112
1 黄褐色土　粒子細かい
2 暗黄褐色土　粒子粗い
3 褐色土　砂質　黄褐色土ブロック少量
　焼土粒子・炭化物少量　粘性やや強
4 暗褐色土　砂質　黄褐色粘質土ブロック多量
　炭化物少量
5 黒褐色土　黄褐色土ブロック多量　炭化物多量
　粘性強
6 暗黄褐色土　焼土粒・炭化物少量　粘性強
7 褐色土　砂少量　炭化物多量　焼土粒子微量
8 黒色土　炭化物多量　粘性強
9 黄褐色土　粒子粗い　粘性強
10 黄褐色土　粘土質　粒子細かい
11 明赤褐色土　粘土質
12 赤色土　天井崩落土　煙道部
13 黄褐色土　粘土質　炭化物・焼土ブロック多量
14 赤色土　天井崩落土　煙道部
15 褐色土　砂質
16 明赤褐色土　粘土質
17 赤色土　天井崩落土　煙道部
18 黄褐色土　粘土質
　赤色粘質土ブロック少量
　炭化物微量
19 暗灰色土　炭集積層
20 黄褐色土　粘土質
21 明黄褐色土　粘土質　焼土粒子多量
22 黄褐色土　焼土粒子多量　粘性極く強
23 明黄褐色土　粘土質　炭化物微量
　上位に厚く炭化物堆積
24 赤色土　天井崩落土　燃焼部
25 褐色土　焼土集積層　炭化物ブロック多量
26 暗赤褐色土　砂質　黄褐色粘質土ブロック多量
　焼土多量
27 暗灰色土　炭集積層



第52図　第112号住居跡



第53図　第112号住居跡カマド

焼部からカマド前面にかけては、9・10・11などの土師器甕が破片の状態で出土した。住居跡北東部では床面から6・7の土師器甕が逆位で出土した。

時期は、出土遺物から7世紀第Ⅳ四半期に位置づけられる。

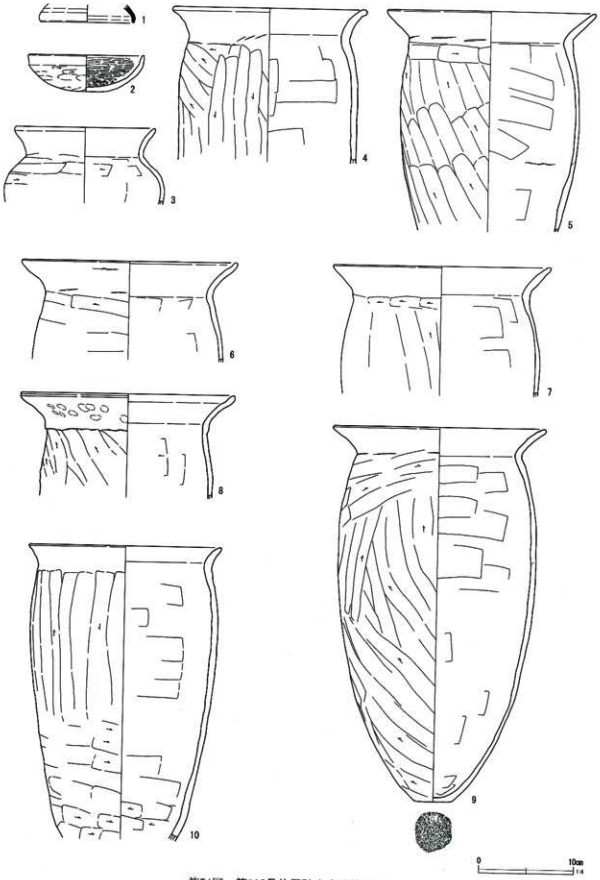
第113号住居跡（第56・57・58図）

調査区北、F・G－6グリッドに位置する。第93・115・136・161・198号住居跡、第26号土坑と重複し、新旧関係はいずれの遺構よりも古い。

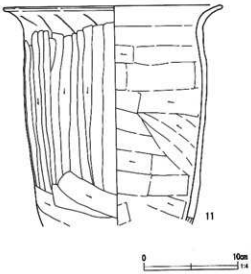
平面形は南北にやや長い長方形で、主軸方向はN－0°である。規模は東西軸5.82m、南北軸6.65mで、確認面からの深さ0.31mである。

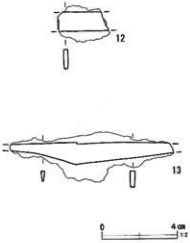
カマドは北壁ほぼ中央に設けられる。袖部は両側が確認され、構築土には灰褐色粘質土（24層）が用いられていた。壁からの残存規模は左袖52cm、右袖61cmである。燃焼部は、北壁で10cmほど立ち上がり、傾斜を経て、煙道部へと至る。燃焼部は壁をわずかに切り込んでおり、煙道部との比高差は25cmである。煙道部底面は外側へ向かって5°の傾斜角で上昇し、壁外へ85cm延びる。

カマド以外の施設としては、柱穴が4基検出された。いずれも柱穴は床面で検出できず、15～20cmほど掘り下げた高さで確認した。P1は円形で44×41cm、床面からの深さ40cm、P2は円形で30×27cm、床面からの深さ44cm、P3は円形で43×43cm、床面からの深さ29cm、P4は円形で60×57cm、床面から



第54図　第112号住居跡出土遺物（1）





第55図　第112号住居跡出土遺物（2）

第18表　第112号住居跡出土遺物観察表（第54・55図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	重量	残存(%)	タイプ	胎土	焼成	色調	出土位置・備考	図版
1	須恵器	壷	(9.8)	1.9	－	8.0	15	湖西		良好	灰		
2	土師器	坏	(12.0)	3.8	－	47.5	20	栃南・茨西	針	良好	にぶい橙	内外面黒色処理か	
3	土師器	甕	14.6	8.0	－	203.1	25	埼北	針	普通	橙		
4	土師器	甕	22.0	16.3	－	810.4	35	茨西	雲、針	良好	橙	カマド右袖構築材	
5	土師器	甕	22.0	23.1	－	1233.7	55	下総		普通	橙	カマド燃焼部	
6	土師器	甕	11.4	10.5	－	442.4	15	埼北	角	普通	にぶい黄橙		
7	土師器	甕	22.6	13.6	－	614.7	25	下北	角、針	普通	橙		
8	土師器	甕	(22.5)	10.9	－	247.1	15	下北		普通	橙	カマド左袖構築材	
9	土師器	甕	22.4	39.4	4.0	1483.0	75	埼北	雲、角	普通	にぶい黄橙	カマド燃焼部～前面	203－1
10	土師器	甕	(20.0)	30.9	－	1273.7	45	栃南		普通	橙	カマド燃焼部～前面	203－2
11	土師器	甕	22.8	23.1	－	1467.5	70	栃南		普通	浅黄橙	カマド燃焼部	
12	鉄製品	不明	長(2.8)幅1.0厚0.2重5.1									延板状	237－2
13	鉄製品	刀子	長(8.7)刃長(3.5)刃幅1.1背幅0.2重20.2										237－2

の深さ38cmである。

遺物は、カマド、床面および覆土や掘り方から、土師器坏・埦・甕・小型甕、須恵器甕などのほか、臼玉、砥石、鉄滓、貝巣穴痕泥岩などが出土している。4の土師器坏、6・10の土師器甕はカマド燃焼部の覆土から出土している。

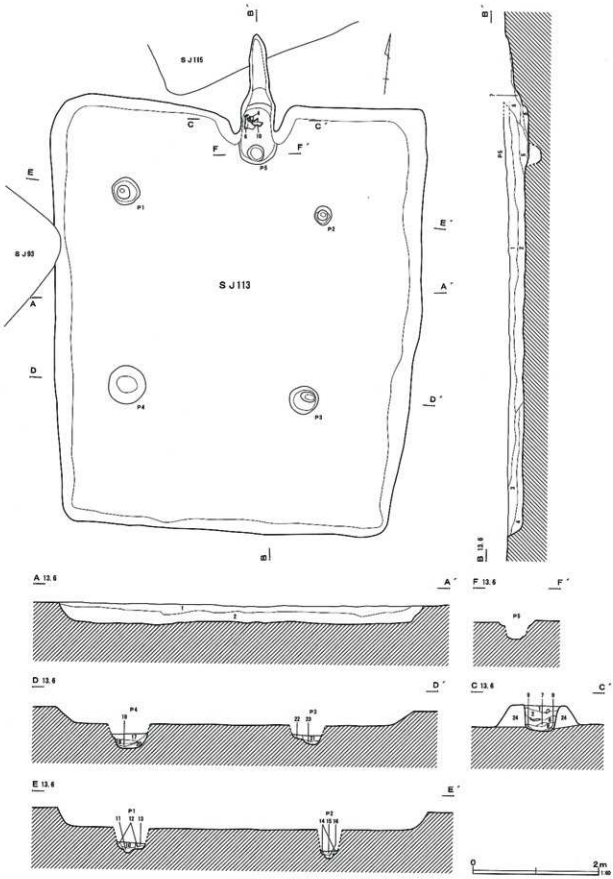
住居跡の時期は、出土遺物より6世紀第Ⅱ四半期に位置づけられる。

第114号住居跡（第59・60図）

調査区北東部、F－6グリッドに位置する。第115・136号住居跡と重複し、新旧関係は本住居跡の方が新しい。

平面形は東西に長い長方形で、主軸方向はN－176°－Wである。規模は東西軸で3.17m、南北軸2.58m、確認面からの深さ0.38mである。

カマドは南壁中央に位置する。方位はN－160°－Eであり、住居跡本体に対して斜に設けられている。袖部は両側で確認され、構築土には黄褐色土（8層）が用いられている。壁からの残存規模は左袖53cm、右袖39cmで、左袖部の内側は特によく被熱し赤変している。燃焼部はほぼ壁内に収まり、底面は床面より10cmほど低く掘り窪められ浅い土壙状となる。底面には炭化物が集積し、天井崩落土と思われる焼土層（5層）が堆積する。規模は、奥行き80cm、幅43



第56図　第113号住居跡

S J 113
1 灰褐色土　粒子粗い
2 褐色土　炭化物多量　粘性強　下位に薄く灰堆積
3 灰褐色土　炭化物多量　粘性強　粒子粗い
4 暗灰褐色土　炭化物少量　粘性弱
5 暗灰褐色土　焼土粒子多量　炭化物少量　粘性強
6 褐色土　焼土粒子多量　炭化物少量
7 褐色土　灰少量　粘性やや強　粒子粗い
8 暗灰色土　灰集積層
9 灰褐色土　粘性やや強　粒子細かい
10 暗褐色土　炭化物少量
11 明褐色土
12 暗褐色土　砂質
13 暗褐色土　炭化物少量
14 暗褐色土　炭化物少量
15 明褐色土
16 暗褐色土　14層に比べて炭化物少量
17 暗褐色土　焼土・炭化物多量
18 暗褐色土　炭化物少量
19 黒色土　炭化物集積層
20 明褐色土
21 暗褐色土　炭化物少量
22 明褐色土　粘性強
23 暗褐色土　炭化物多量
24 灰褐色土　粘土質　カマド袖

cmで、煙道部とは高低差20cm以上の急傾斜をもって移行する。煙道部底面はほぼ水平に壁外へ延び、規模は、長さ45cm、幅25cmである。

出土遺物は、覆土中から土師器甕、坏の破片が少数出土している。図化し得たのは2点であり、時期は7世紀第Ⅱ四半期に位置づけられる。しかしながら、重複関係から見ると、本住居跡に切られている第115号住居跡は7世紀末～8世紀第Ⅰ四半期であることから、本住居の時期はこれより下り、1・2は流れ込みと判断される。

第115号住居跡（第61・62図）

調査区北東部、F－6グリッドに位置する。第113・114・136・161号住居跡と重複し、新旧関係は第114号住居跡よりも古く、第113・136・161号住居跡よりも新しい。住居跡本体は第114号住居跡に大きく壊されているが、カマドは残りが良かった。

平面形は南北に長い長方形で、規模は東西軸4.10m、南北軸4.70mで、確認面からの深さ0.40mである。

カマドは西壁中央に設けられる。袖部は両側が確認され、左右ともに土師器甕や甑を倒立させて並べ、袖の芯材としていた。

左袖は土師器甕と甑の3個体を直立させて整然と並べていた。最も手前の土器は甑（9）で、奥の2個体は土師器甕（5・8）である。いずれも残存率が非常に高く、完形、半完形の土器が用いられている。一方、右袖も土師器甕、甑3個体を倒立させて並べていた。左袖同様、手前の土器は大型甑（10）で、奥の土器2個体は土師器甕（6）であった。手前2個体は残存率の高い個体であったが、最奥の土師器甕は口縁部と底部を欠損している。土器は直立するというよりは手前や奥に傾きやや雑然と並ぶ。

構築土にはしまりの強い黄褐色粘質土が用いられる。袖構築土と芯材の出土状況および燃焼部内の灰堆積状況から推測する機能時のカマドの様子は、芯材の外側を構築土で塗り固め土器を完全に被覆し、内側および前面は土器が露出したという状態である。

燃焼部は北壁をわずかに切り込んでおり、底面は床面より10cmほど低く掘り窪められている。燃焼部中央には、土師器甕の胴部下半が伏せられ、支脚として転用されていた。煙道部は、15～20cmほど高低差のある段差をもって燃焼部と接続している。底面は20cmの幅で、外側へほぼ水平に115cm延びる。確認面からの深さは7cmである。

遺物は、袖構築材や支脚として土師器甕・甑が出土したほかは、床面や覆土から土師器坏・甕などが出土している。カマド右手の住居跡北西では床面から4・7が出土している。

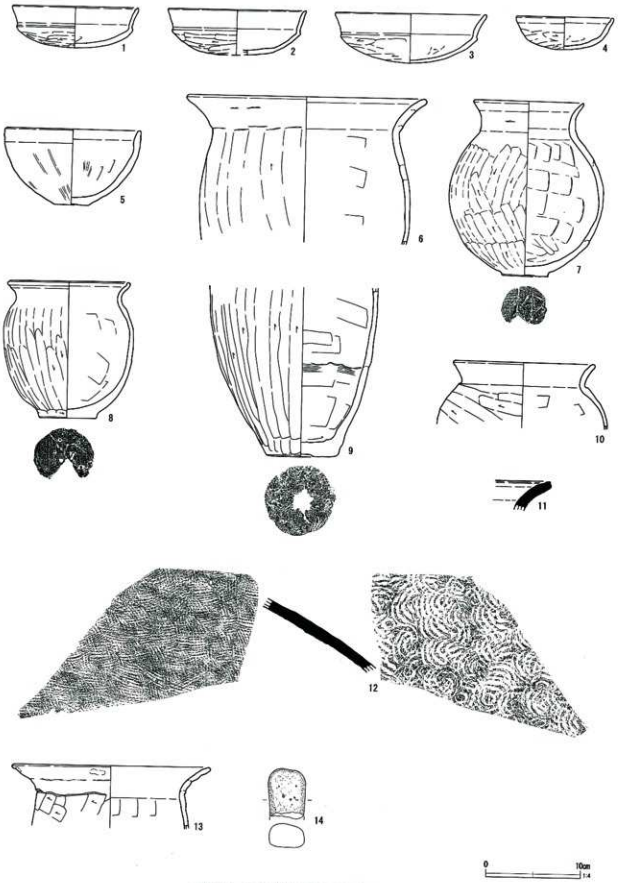
時期は7世紀末から8世紀第Ⅰ四半期である。

第116号住居跡（第63・64図）

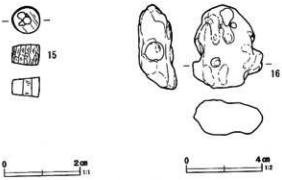
調査区北東部、H－7グリッドに位置する。第251・252・256・260号住居跡、第15号溝跡と重複し、新旧関係は第251号住居跡よりも新しく、その他の住居跡よりも古い。

住居跡南東部の半分が調査区域外に及んでいるため平面形は不明である。第260号住居跡に北西コーナーを含む住居跡西側の床面を壊される。規模は残存している南北軸で6.08m、確認面からの深さ0.16mである。

カマドおよびその他の施設は確認されなかった。



第57図　第113号住居跡出土遺物（1）



第58図　第113号住居跡出土遺物（2）

遺物は、床面から1や2が出土したほかは、覆土中から3・5などの土器が出土している。後者は9世紀代に入る土器であり、混入と思われる。

時期は、床面出土遺物から、6世紀第Ⅰ四半期と思われる。

第117号住居跡（第65・66図）

調査区東部、G－8グリッドに位置する。第102・129・215号住居跡、第19号土坑と重複し、新旧関係は第19号土坑よりも古く、いずれの住居跡よりも新しい。住居跡の大半は調査区域外に及んでいるため、平面形は不明である。主軸方向はN－30°－Wで、規模は残存している南北軸で4.23m、確認面からの深さ0.15mである。

カマドは北壁東寄りに設けられ、西側は第19号土坑に壊されている。方位はN－33°－Wである。カマド右半分は第12号土坑に壊されている。残存した左袖には灰色粘質土（7層）が用いられており、壁からの残存規模は78cmである。燃焼部はほぼ壁内に収まり、床面より5～10cmほど低く掘り窪められている。煙道部の規模は短く幅も狭い。壁外には33cm延びる。

遺物は、カマドや覆土から、土師器坏・甕が出土している。1・2はカマドから出土している。

時期は、8世紀第Ⅲ四半期に位置づけられる。

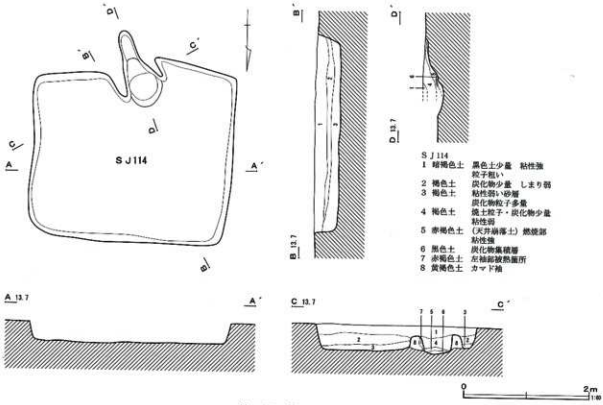
第118号住居跡（第67・68図）

調査区中央部南寄り、H・I－3・4グリッドに位置する。北東コーナーは試掘溝により、また南西コーナーは攪乱により遺構上部をわずかに壊されている。第95・103・107・119・125・127・199・200・214・229・238号住居跡、第34号土坑と重複し、新旧関係は、第95・125号住居跡よりも古く、その他の住居跡よりも新しい。第34号土坑との新旧関係は不明である。

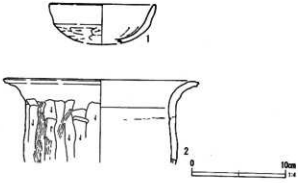
平面形は正方形で、規模は東西軸6.17m、南北軸6.10m、確認面からの深さ0.30mである。

第19表　第113号住居跡出土遺物観察表（第57・58図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	重量	残存(%)	タイプ	胎土	焼成	色調	出土位置・備考	図版
1	土師器	坏	13.2	4.3	－	116.7	55	群東	針	良好	橙		162－6
2	土師器	坏	(14.5)	4.8	－	104.2	20	群東	針	良好	橙	黒斑	
3	土師器	坏	16.4	5.2	－	207.0	70	埼玉		普通	にぶい橙	胎土は細い	162－7
4	土師器	坏	10.2	3.4	－	88.0	80	栃南	針	普通	にぶい黄橙	カマド燃焼部	162－8
5	土師器	坑	(14.1)	8.0	(3.6)	161.4	35	茨西	針	普通	にぶい黄橙	内外面赤彩か	
6	土師器	甕	(24.9)	15.3	－	537.5	20	埼北	雲	普通	にぶい黄	カマド燃焼部	
7	土師器	甕	11.5	18.4	5.0	496.8	40	茨西	雲	普通	橙		203－3
8	土師器	甕	(12.4)	14.1	6.1	552.0	80	常陸		普通	にぶい橙		183－5
9	土師器	甕	－	17.9	7.4	1006.9	35	茨西	雲、針	普通	浅黄		
10	土師器	甕	(14.4)	6.8	－	243.4	10	佐野		普通	にぶい黄橙	カマド燃焼部	
11	須恵器	甕	－	3.2	－	36.2	5			普通	灰		
12	須恵器	甕	－	7.5	－	510.6	5	在地か	針	普通	灰黄		
13	土師器	甕	(20.8)	6.6	－	302.9	20	埼北	角	良好	橙		
14	石製品	編物石か	長5.1幅4.0厚2.6重85.5								灰オリーブ	掘り方　砂岩製	
15	石製品	白玉	径0.70孔径0.19厚0.47重0.41									覆土中層	234－1
16	鉄製品		長4.3幅3.6厚1.8重17.4								橙	13孔、被熱	238－1



第59図　第114号住居跡



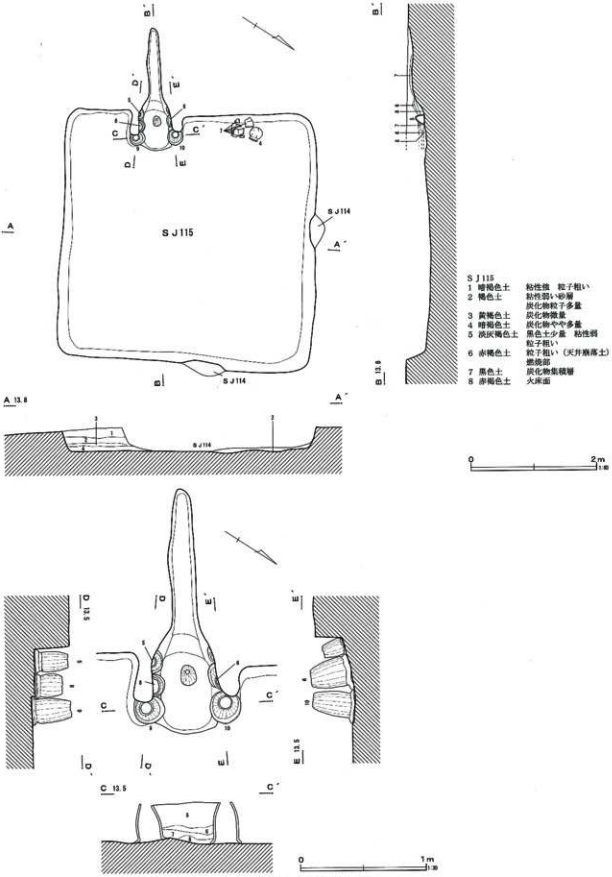
第60図　第114号住居跡出土遺物

カマドは北壁西寄りに設けられる。袖部は両側が確認され、構築土には黄褐色粘質土ブロックを多く含む褐色砂質土が用いられている。壁からの残存規模は左袖70cm、右袖64cmである。燃焼部底面は床面より10cmほど低く掘り窪められ、炭化物・灰が厚く集積している。手前側では被熱箇所が見られる。規模は奥行き118cm、幅44cmである。煙道部とは10cm弱の低い段差をもって接続する。煙道部と煙出し穴は、その接続部分が崩落するものの、天井被熱部が残存し（9層）、確認面では赤変硬化した焼土層の帯が煙道幅で観察された。底面は5°の傾斜角で外側へ向かって上昇し、煙出しに移行する。煙出し穴底面は煙道部よりわずかに低く掘り窪められる。

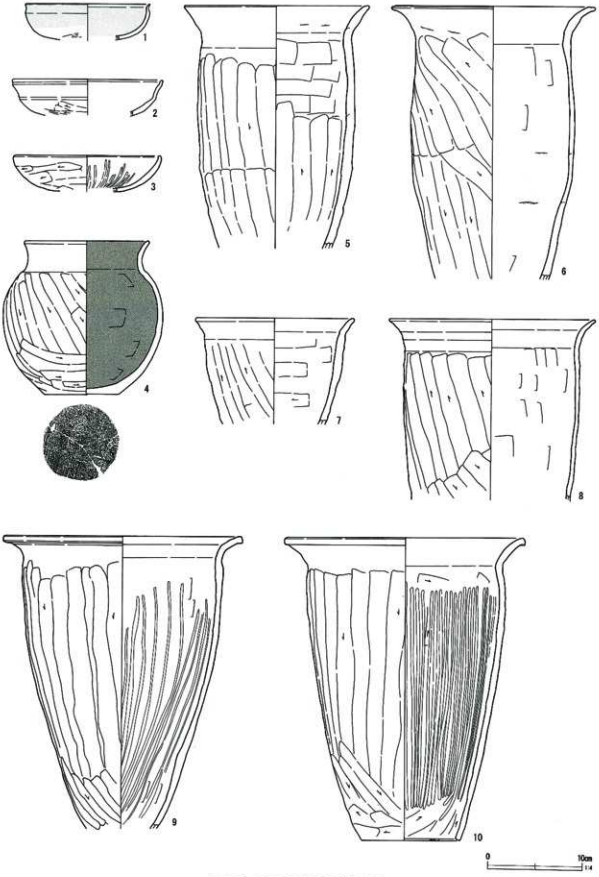
カマド以外の施設としては、柱穴、壁溝を検出した。柱穴は4基確認され、平面形および規模は、P1は楕円形で48×43cm、床面からの深さ30cm、P2は円形で57×51cm、床面からの深さ31cm、P3は楕円形で63×57cm、床面からの深さ40cm、P4は楕円形で70×61cm、床面からの深さ40cmである。柱穴間の距離は、東西方向のP1－2は300cm、P3－4は290

第20表　第114号住居跡出土遺物観察表（第60図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	重量	残存(%)	タイプ	胎土	焼成	色調	出土位置・備考	図版
1	土師器	坏	(11.2)	4.1	－	66.0	35	佐野		普通	橙		
2	土師器	甕	(20.8)	8.8	－	160.1	10	茨西	雲、角	良好	橙		



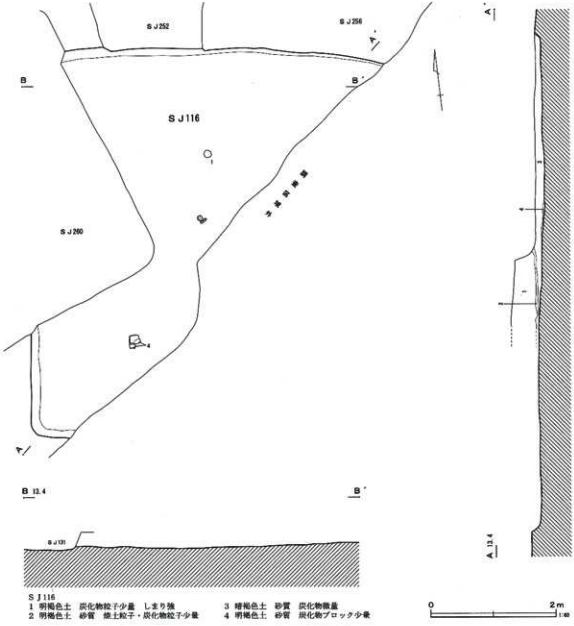
第61図　第115号住居跡



第62図　第115号住居跡出土遺物

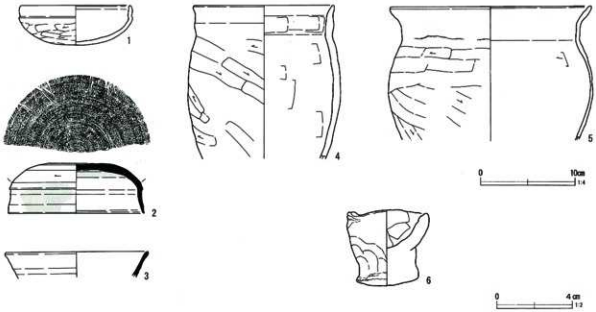
第21表　第115号住居跡出土遺物観察表（第62図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	重量	残存(%)	タイプ	胎土	焼成	色調	出土位置・備考	図版
1	土師器	坏	(13.0)	3.8	－	30.5	20	比企	雲、角、針	良好	赤	掘り方	
2	土師器	坏	(15.0)	3.8	－	27.4	15	栃南	雲、針	普通	にぶい褐		
3	土師器	坏	(15.2)	3.8	－	38.8	10	栃南	角	普通	灰黄	内外面黒色処理か	
4	土師器	甕	12.9	16.2	8.1	825.4	80	茨西		普通	浅黄橙		183－6
5	土師器	甕	19.8	25.7	－	2022.0	75	茨西	角、針	普通	橙	カマド左袖構築材	203－4
6	土師器	甕	21.6	28.6	－	1191.8	50	群東	雲、角、針	普通	明黄褐	カマド右袖構築材	204－1
7	土師器	甑	(16.6)	11.2	－	587.2	45	茨西	針	普通	褐灰	内外面に大黒斑	
8	土師器	甕	21.4	19.1	－	865.3	50	埼北	角	普通	にぶい黄橙	カマド左袖構築材	
9	土師器	甑	25.0	30.8	－	1613.5	65	栃南		普通	にぶい黄橙	カマド左袖構築材	204－2
10	土師器	甑	25.0	31.8	10.6	1639.8	75	栃南	角、針	普通	にぶい橙	カマド右袖構築材	204－3



SJ116
1 明褐色土　炭化物粒子少量　しまり強
2 明褐色土　砂質　焼土粒子・炭化物粒子少量
3 暗褐色土　砂質　炭化物微量
4 明褐色土　砂質　炭化物ブロック少量

第63図　第116号住居跡



第64図　第116号住居跡出土遺物

第22表　第116号住居跡出土遺物観察表（第64図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	重量	残存(%)	タイプ	胎土	焼成	色調	出土位置・備考	図版
1	土師器	坏	11.6	4.2	－	127.2	80	佐野	針	普通	にぶい褐		162-9
2	須恵器	蓋	(14.3)	5.3	－	164.1	45	皆ノ沢か		普通	灰白	底部にヘラ記号か	162-10
3	須恵器	坏	(15.0)	2.7	－	10.9	5	新治	針	不良	灰		
4	土師器	甕	(17.0)	16.2	－	355.5	20	茨西		普通	灰黄		184-1
5	土師器	甕	(21.0)	14.2	－	229.7	20	下総	雲、角	普通	にぶい黄橙		
6	土製品	ミニチュア	4.2	3.8	3.3	55.2	95		雲、角	普通	明褐灰		163-1

cm、南北方向P2－3は275cm、P4－1は260cmである。

壁溝は幅15～30cm、深さ20cmで、北東コーナーを除いて全周する。南壁中央では不整合が見られる。

遺物は、覆土や壁溝、掘り方から出土しており、床面からはほとんど出土していない。内容としては、土師器坏・甕・台付甕、須恵器坏・蓋・甕、貝巣穴痕泥岩などが出土している。6は7世紀前半頃の土器で混入と思われる。

住居跡の時期は、出土遺物から8世紀前半に位置づけられる。

第119号住居跡（第69・70図）

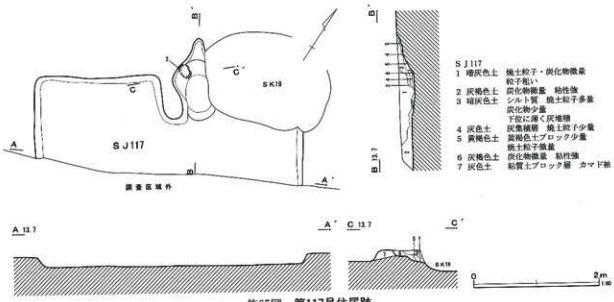
調査区南側、H・I－4グリッドに位置する。第96・107・118・221・229・238号住居跡、第34号土坑と重複し、新旧関係は、第96・107・118号住居跡、第34号土坑よりも古く、第221・229・238号住居跡よりも新しい。第107・118号住居跡には住居跡北側床面を壊されている。

平面形は不明だが、主軸方向はN－20°－Wと推測される。規模は残存している東西軸4.62m、確認面からの深さ0.52mである。

カマドおよびその他の施設は確認されていない。

遺物は、覆土中から土師器坏、須恵器坏・甕・短頸壺などが出土しており、時期は7世紀第Ⅰ四半期である。しかしながら、重複関係にある第221号住居跡のカマドを削平しており、その新旧関係が明らかなことから時期は、7世紀第Ⅱ・Ⅲ四半期とした同住居跡に後続するものと思われる。従って1～3の土器は住居跡に帰属しないものと理解される。

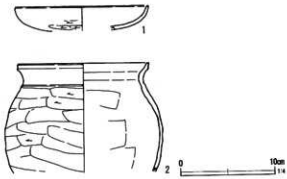
時期は、7世紀第Ⅰ四半期に位置づけられる。



第65図　第117号住居跡

第23表　第117号住居跡出土遺物観察表（第66図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	重量	残存(%)	タイプ	胎土	焼成	色調	出土位置・備考	図版
1	土師器	坏	(11.8)	2.6	－	18.5	15	埼南	角	普通	明黄褐	カマド燃焼部	
2	土師器	甕	13.8	11.5	－	181.0	25	下総	針	普通	褐		



第66図　第117号住居跡出土遺物

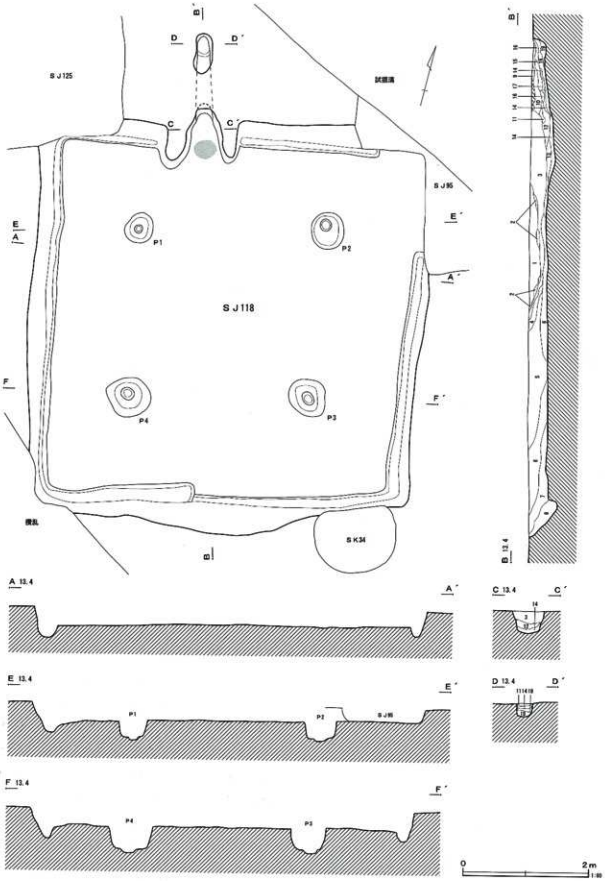
第120号住居跡（第42・71図）

調査区ほぼ中央部、H－4・5グリッドに位置する。第108・109・164・173号住居跡、第9b・9c号溝跡と重複し、新旧関係は、第108号住居跡、第9b・9c号溝跡よりも古く、第109・164号住居跡よりも新しい。カマド煙道部の一部と住居跡北側コーナーを壊されているほか、第108号住居跡には南側半分の床面を壊されている。

平面形は不明で、規模は残存する東西軸で4.88m、確認面からの深さは0.35mである。

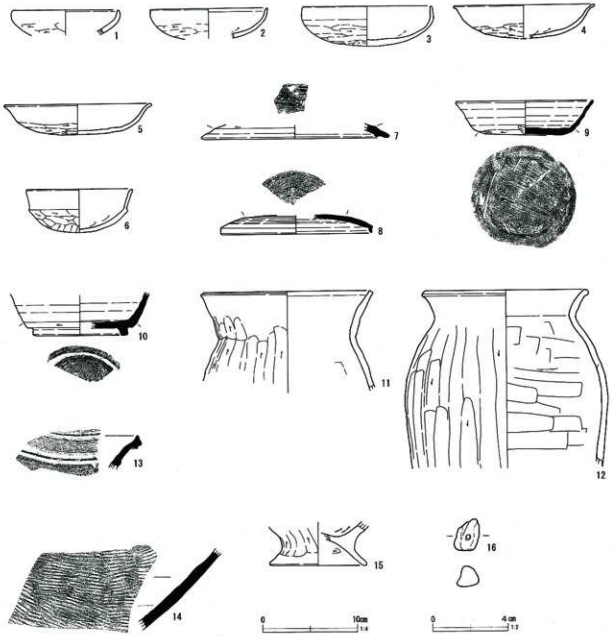
カマドは北東壁の右寄り設けられており、方位はN－31°－Wで住居跡本体よりもやや東に振れている。前述のように、煙道部の一部と右袖上部を第9c号溝跡によって壊されていたが、煙道部先端と煙出し穴は残存していた。袖部は両側が確認され、構築土には黄褐色粘質土ブロックを多く含む褐色砂質土（22層）が用いられていた。壁からの残存規模は、左袖43cm、右袖42cmである。

燃焼部は北東壁を切り込んでいるが、どの程度切り込んでいるかは不明である。底面は床面より5～10cmほど低く掘り窪められ、灰が厚く集積する。燃焼部の奥では被熱箇所が見られ、この範囲の先に支脚が据えられていた。支脚は柱状の土塊を底面に貼り付けたものであり、底面同様よく被熱している。燃焼部と煙道部は、明瞭な段差をもって接続しており、煙道部底面は、残存部では傾斜を持たずほぼ水平に外側へ延びる。天井は崩落せずに残存しており、地山と被熱部が確認された。煙出しは確認面におい



第67図　第118号住居跡

SJ118
1 褐色土　砂質　焦褐色土ブロック少量
2 黒色土　炭化物集積層
3 暗褐色土　褐色土ブロック少量
4 青灰色土　炭化物集積層　黄灰色砂質土ブロック多量
5 褐灰色土　シルト質　黄褐色シルト土ブロック少量
6 青灰色土　砂質　下位に貼り床形成
7 灰色土　灰色粘土多量　酸化マンガン多量
8 黄灰色土　粘土質
9 暗灰色土　砂質
10 暗灰色土　砂質　焼土ブロック多量　炭化物少量
11 赤色土　焼土ブロック集積層（天井崩落土）焼焼部
12 暗灰色土　砂質　焼土ブロック・炭化物多量
13 黄褐色土　シルト質　焼土ブロック極く多量
14 暗灰色土　炭化物・灰集積層
15 明灰色土　砂質　炭化物微量
16 暗灰色土　焼土ブロック多量　灰層が中間に薄く堆積
17 明灰色土　焼土粒子微量　炭化物少量
18 黄灰色土　砂質　焼土ブロック少量　炭化物微量
19 暗灰色土　砂質



第68図　第118号住居跡出土遺物

第24表　第118号住居跡出土遺物観察表（第68図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	重量	残存(%)	タイプ	胎土	焼成	色調	出土位置・備考	図版
1	土師器	坏	(11.0)	2.7	－	18.4	5	埼北	雲、角	普通	明黄褐		
2	土師器	坏	(12.4)	3.2	－	35.2	25	埼北	針	普通	にぶい橙	溝	
3	土師器	坏	13.6	4.2	－	147.5	75	埼北	角、針	普通	橙		163-2
4	土師器	坏	(14.8)	3.6	－	59.7	30	埼北	角	普通	橙	掘り方	
5	土師器	坏	(15.4)	3.2	－	103.9	35	埼北		普通	にぶい橙		
6	土師器	坏	(11.0)	4.7	－	62.0	40	埼北	針	普通	橙		163-3
7	須恵器	蓋	20.0	1.6	－	9.4	5	管ノ沢		普通	灰白		
8	須恵器	蓋	(15.8)	1.9	－	43.5	25	在地		普通	灰		
9	須恵器	坏	14.3	3.6	8.1	161.1	70	新治		普通	灰白		
10	須恵器	高台付坏	－	4.3	(8.9)	98.0	20			普通	灰		
11	土師器	甕	(18.2)	10.7	－	313.9	10	茨西	針	普通	にぶい橙	被熱	
12	土師器	甕	(17.0)	18.7	－	639.5	25	茨西	雲、角、針	普通	にぶい橙		
13	須恵器	甕	－	3.8	－	38.6	5			良好	灰		
14	須恵器	甕	－	8.3	－	174.0	5	東海		普通	黄灰		
15	土師器	台付甕	－	4.6	(9.8)	98.9	5	茨西	雲、角、針	普通	にぶい黄橙		
16	縄文土器		長1.6幅1.2厚1.1重1.3								灰白	2孔、被熱	238-2

て内径18cmの円環として確認された。煙道部天井同様、煙出し穴も周辺が非常によく被熱し、赤変硬化していた。削平された部分も含めれば、煙道部規模は長さ117cmである。

遺物は、覆土から土師器坏、須恵器甕、紡錘車などが出土している。1の時期は5世紀第Ⅲ四半期であるが、遺構の重複関係からは、6世紀第Ⅳ四半期から8世紀第Ⅰ四半期に位置づけられる。

第121号住居跡（第72図）

調査区東側、H－6・7グリッドに位置する。第131・146号住居跡と重複し、新旧関係は両住居跡よりも古い。両住居跡に西側を壊されるほか、住居跡の大半が調査区域外におよんでいるため、平面形および規模は不明である。確認面からの深さは0.28mである。床面は残存した全面で、暗黄褐色粘質土による貼り床が検出され、覆土には炭化物を多量に含む暗褐色土が堆積している。

出土遺物はほとんどなく、住居跡の時期決定もできないが、遺構の重複関係から7世紀末よりも古いものと思われる。

第122号住居跡（第73・74図）

調査区東側、H・I－6グリッドに位置する。第132・146・249号住居跡と重複し、新旧関係は第146号住居跡よりも古く、第132・249号住居跡よりも新しい。第146号住居跡は本住居跡の北側に位置し、カマド先端部を壊している。

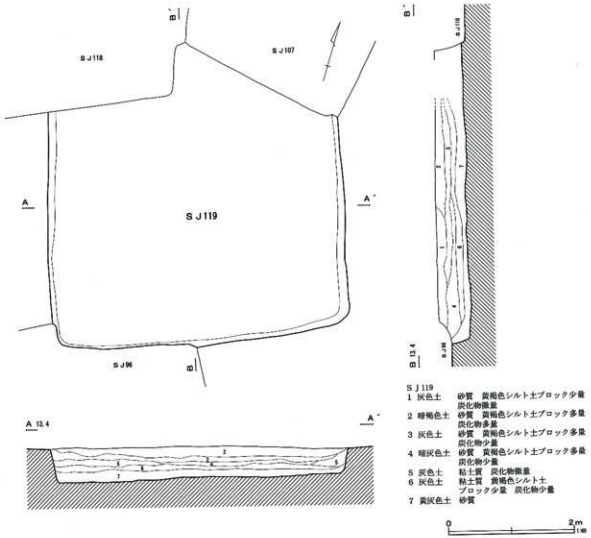
平面形は不明で、主軸方向はN－25°－W、確認面からの深さ0.45mである。床面には黄褐色粘質土で貼り床が貼られ、覆土は炭化物集積層と粘質土の堆積を繰り返している。

カマドは北壁に位置し、方位はN－10°－Wで、住居跡本体に対して東に振れている。袖部は両側が確認され、構築土にはしまりの強い黄褐色粘質土(18層)が用いられている。壁からの残存規模は左袖40cm、右袖37cm。床面からの残存高は左袖42cm、右袖47cmと比較的残りが良い。燃焼部と煙道部の境界には段差が見られず、区別は判然としない。燃焼部底面は、最深部で床面よりも20cmほど低く、焼土（16層）や炭化物（17層）が集積している。

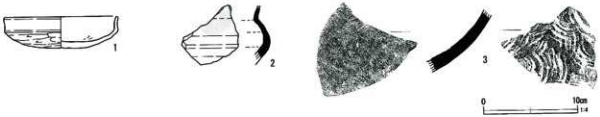
遺物は、覆土から土師器坏・甕などが出土しており、住居跡の時期は、これらの遺物から6世紀第Ⅰ四半期に位置づけられる。

第123号住居跡（第75図）

調査区南側、I－5グリッドに位置する。第124号住居跡、第11号溝跡と重複し、新旧関係は第11号溝跡よりも古く、第124号住居跡よりも新しい。住居



第69図　第119号住居跡



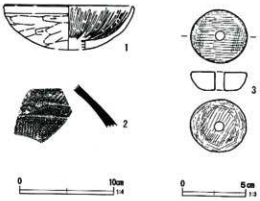
第70図　第119号住居跡出土遺物

第25表　第119号住居跡出土遺物観察表（第70図）

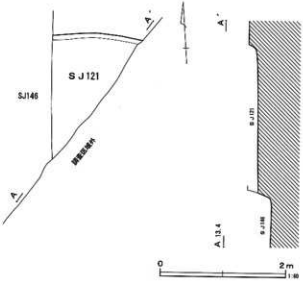
番号	種別	器種	口径	器高	底径	重量	残存(%)	タイプ	胎土	焼成	色調	出土位置・備考	図版
1	土師器	坏	(12.0)	3.3	－	102.4	60	埼北	雲、針	普通	橙		163-4
2	須恵器	鉢か	－	6.3	－	28.9	10	管ノ沢		普通	灰		
3	須恵器	甕	－	6.5	－	194.2	5		針	普通	灰		

第26表　第120号住居跡出土遺物観察表（第71図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	重量	残存(%)	タイプ	胎土	焼成	色調	出土位置・備考	図版
1	土師器	坏	(13.6)	4.6	－	116.4	40	茨西		普通	明赤褐	内外面赤彩か	163-5
2	須恵器	甕	－	4.4	－	36.0	5			普通	灰		
3	石製品	紡錘車	径4.4孔径0.7厚1.5重43.5										236-1



第71図　第120号住居跡出土遺物



第72図　第121号住居跡

跡大半は調査区域外におよんでいるため、平面形および規模は不明である。確認面からの深さは0.28mである。

出土遺物はなく、時期は不明であるが、他遺構との重複関係からは、5世紀第Ⅳ四半期以降であろう。

第124号住居跡（第75・76図）

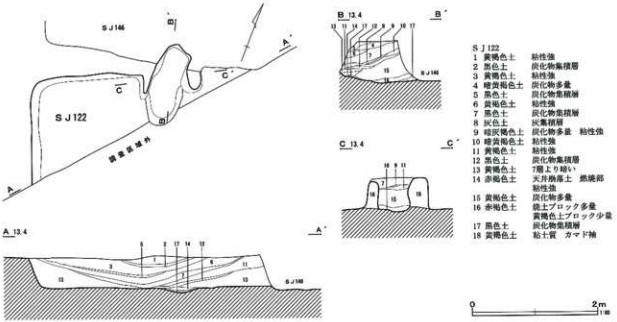
調査区南側、I・J－5グリッドに位置する。第123号住居跡と重複し、新旧関係は本住居跡のほうが古い。同住居跡に北東コーナーを壊されるが、床面は残っている。住居跡南側の大半は調査区域外におよんでいるため平面形は不明である。規模は残存する東西軸で3.65m、確認面からの深さ0.35m、主軸方向はN－12°－Wである。

カマドは北壁中央に設けられる。袖部は両側が確認され、構築土には黄灰色粘質土（16層）が用いられていた。壁からの残存規模は、左袖65cm、右袖71cmで内側は非常に良く焼けていた。

燃焼部は壁内に収まり、底面は床面よりも5cmほど低く掘り窪められている。規模は奥行き120cm、幅50cmで、煙道部とは10～15cmの明瞭な段差をもって接続する。燃焼部内、北壁に近い位置では土師器高坏の脚部（2）が出土した。出土レベルは底面から10cmほど浮いていたが、土器は焼土ブロックの集積した土柱（15層）上で出土し、この土柱自体がよく被熱し、赤変硬化していた。以上からこの土柱は支脚で、高坏は支脚上に置かれたものと判断される。カマド機能時に高坏が存在していたのか、置かれたものかは判断できない。

煙道部は、燃焼部よりも幅狭で、壁外へ向かって10°の傾斜角で上昇しながら130cm延び、煙出し穴に接続する。天井は崩落しており、被熱し赤変硬化した焼土層（5層）が確認されている。煙出し穴は直径30cmほどの楕円形で、底面は煙道部より5cmほど高い。

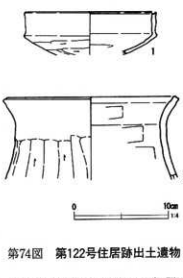
カマド以外の施設としては、カマド右寄りの位置でピットを1基確認した。P1は平面形がほぼ円形で、規模は37×32cm、床面からの深さ9cmである。胴部下半を欠いた土師器甕が底面に据え置かれたように出土しており、検出時点では口縁部から胴部上半が床面から突き出ていた。



第73図　第122号住居跡

第27表　第122号住居跡出土遺物観察表（第74図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	重量	残存(%)	タイプ	胎土	焼成	色調	出土位置・備考	図版
1	土師器	坏	(14.0)	4.6	—	55.6	20	埼北	針	良好	にぶい橙		
2	土師器	甕	(18.6)	9.1	—	181.7	10	茨西	針	普通	にぶい橙	外面煤付着	



第74図　第122号住居跡出土遺物

遺物は、カマドや床面などから土師器高坏・甕、石製品、貝巣穴痕泥岩などが出土している。1・2は高坏でともにはカマド設置壁右側で出土している。2は高坏脚部で、支脚上で出土した。4は土師器甕で、P1底面に据えられていた。また覆土中からは貝巣穴痕泥岩が2点出土している。

時期は、出土遺物から5世紀第Ⅳ四半期に位置づけられる。

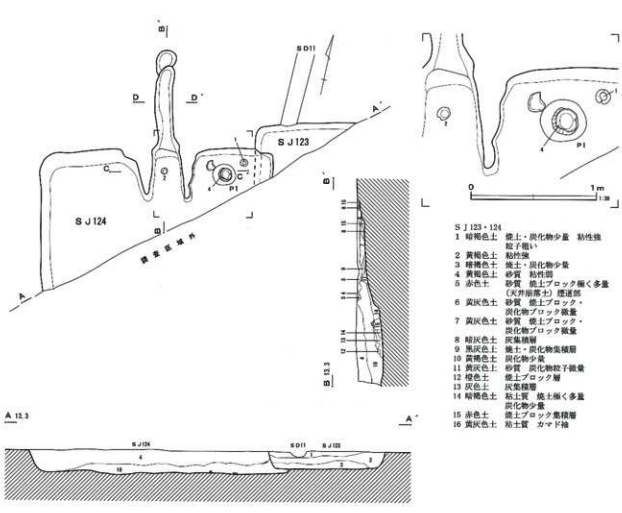
第125号住居跡（第77・78図）

調査区中央部やや西寄り、H－3グリッドに位置する。第118・169・214号住居跡、第32号井戸跡、第10号溝跡と重複し、新旧関係は、第32号井戸跡、第10号溝跡よりも古く、第118・169・214号住居跡よりも新しい。第14号溝跡と第32号井戸跡には床面を壊されている。

平面形は正方形で、主軸方向はN－15°－Wである。規模は東西、南北軸ともに3.60m、確認面からの深さ0.40mである。

カマドは北壁東寄りに設けられ、袖部は両側が確認され、構築土には黄白色粘質土（16層）が用いられていた。壁からの残存規模は左袖50cm、右袖53cmで、両側ともに確認面まで立ち上がり、床面からの高さは38cmである。

燃焼部底面は床面より5cmほど低く掘り窪められる。掘り込みの範囲は燃焼部前面から右袖前面にま



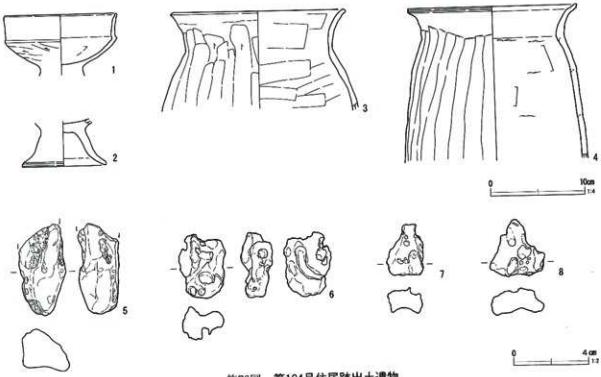
第75図　第123・124号住居跡

でおよんでおり歪である。燃焼部の天井は2・6層と思われ、崩落し下位には灰が集積している。煙道部とは明瞭な段差をもたず、わずかに上昇して移行する。

煙道部は天井が残っており、断面観察では地山およびその被熱部を確認した。底面は5°の角度でわずかに上昇し、壁外へ43cmのところで垂直に立ち上がり、煙出しへ接続する。煙出し穴の遺存状況も非常に良く、確認面では内径27cmの円環状被熱が確認された。掘り込みは垂直ではなく、住居跡本体側に45°の角度で掘り込まれる。煙道部の側面および天井は、非常によく被熱し赤変している。

カマド以外の施設としては、壁溝、ピットが確認されている。壁溝はカマドの西側から東壁中央部まで幅8～18cm、深さ4cmで掘られている。

ピットは4基確認されている。P1～3は南北方向に一列に並ぶが、柱穴か否かは不明である。平面形および規模は、P1は楕円形で43×32cm、床面からの深さ7cm、P2は円形で38×31cm、床面からの深さ14cm、P3は円形で42×35cm、床面からの深さ10cm、P4は長円形で63×40cm、床面からの深さは9cmである。



第76図　第124号住居跡出土遺物

第28表　第124号住居跡出土遺物観察表（第76図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	重量	残存(%)	タイプ	胎土	焼成	色調	出土位置・備考	図版
1	土師器	高坏	11.9	6.5	－	159.9	45	群東		普通	橙		
2	土師器	高坏	－	4.8	8.9	143.7	20	埼北	針	良好	橙	カマド支脚上	
3	土師器	甕	18.6	10.4	－	378.7	15	栃南	針	普通	橙	カマド	
4	土師器	甕	(18.0)	16.3	－	947.5	40	下北	雲	普通	にぶい黄橙	P1	181-2
5	石製品	不明	長(4.6)幅2.4厚2.0重28.8								灰白	チャート製	
6	須恵器底部		長3.3幅2.4厚1.6重5.9								にぶい橙	12孔、被熱	238-2
7	須恵器底部		長2.6幅1.4厚1.1重2.8								にぶい橙	6孔、被熱	238-2
8	須恵器底部		長2.9幅2.8厚1.1重4.0								にぶい橙	14孔、被熱	238-2

遺物はカマドや床面、覆土から土師器坏・甕、台付甕、須恵器坏のほか、獣骨が出土している。1は覆土下層から、2・4はカマド燃焼部から出土している。7・8は6世紀代にさかのぼる土師器坏で、他の出土遺物に比べ相対的に古い。また燃焼部内の左寄りの位置で焼けた獣骨を確認した。

住居跡の時期は、カマド出土遺物から、9世紀第Ⅰ四半期に位置づけられよう。

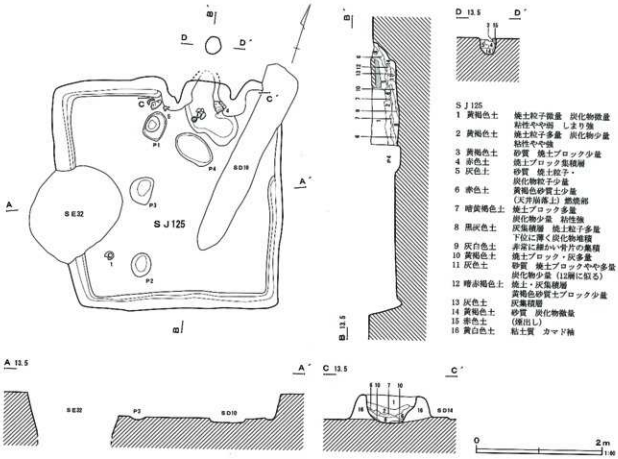
第126号住居跡（第79・80図）

調査区南東側、I－6グリッドに位置する。第132号住居跡と重複し、新旧関係は本住居跡のほうが新しい。大半が調査区域外に及んでおり平面形および規模は不明である。主軸方向はN－25°－Wで、確認面からの深さは0.20mである。

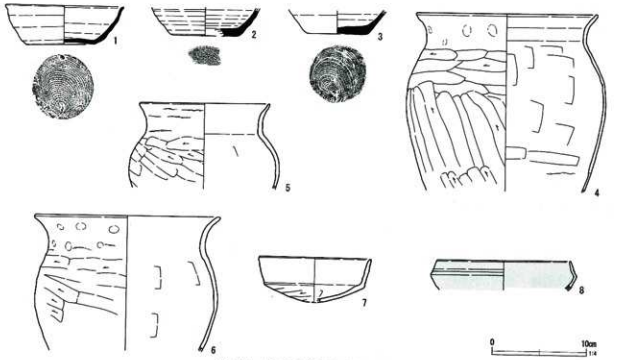
カマドは北壁に設けられ、袖部は両側が確認されている。構築土には黄褐色粘質土（12層）が用いられ、壁からの残存規模は左袖28cm、右袖41cmである。燃焼部底面は床面よりも5cmほど低く掘り窪められ、灰が厚く集積する。底面は外側へ向かってわずかに上昇し、煙道部へは明瞭な境のないまま移行する。わずかな傾斜角の変換点を煙道部との境界とするなら、燃焼部は壁を切り込む構造であったと言える。

燃焼部および煙道部には炭化物が厚く集積する。煙道部はほぼ水平に壁外へ147cm延びる

遺物は、カマドおよび覆土から出土している。1～3の土師器坏は、いずれもカマド燃焼部から出土



第77図　第125号住居跡



第78図　第125号住居跡出土遺物

第29表　第125号住居跡出土遺物観察表（第78図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	重量	残存(%)	タイプ	胎土	焼成	色調	出土位置・備考	図版
1	須恵器	坏	12.4	4.1	7.1	129.6	90	南比企	針	普通	灰		163−6
2	須恵器	坏	−	4.0	(7.4)	27.4	10	南比企	雲	普通	灰	カマド燃焼部	
3	須恵器	坏	−	2.5	6.0	85.2	55	金山か	雲、針	普通	灰		
4	土師器	甕	(19.3)	18.2	−	297.0	20	埼北	雲、角、針	普通	橙	カマド燃焼部	
5	土師器	甕	13.6	9.0	−	141.0	25	埼北	針	良好	橙	煤付着	
6	土師器	甕	(19.4)	14.3	−	223.3	10	埼北	針	普通	橙		
7	土師器	坏	(12.0)	4.7	−	28.4	10	埼北		普通	橙	褐り方	
8	土師器	坏	(14.1)	3.0	−	15.4	10	埼南		良好	赤	カマド	

している。時期は８世紀第Ⅲ四半期と思われる。

第127号住居跡（第81・82図）

調査区中央部、H−３・４グリッドに位置する。第95・103・107・118号住居跡と重複し、新旧関係はいずれの住居跡よりも古い。住居跡上部は第118号住居跡に、また住居跡東半は第95・107号住居跡により床面まで大きく壊されており、平面形は不明である。主軸方向はN−110°−Wで、規模は南北軸3.63m、確認面からの深さ0.12mである。

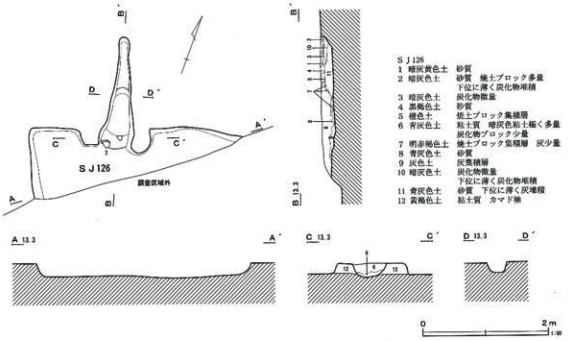
カマドは西壁中央に設けられている。袖部は両側が確認され、構築土には灰褐色粘質土（10層）が用いられた。壁からの残存規模は左袖43cm、右袖37cmである。燃焼部は東壁を25cmほど切り込んでおり、底面は床面とほぼ同じ高さにあり、灰が厚く堆積する。燃焼部底面では、土師器坏（１）が伏せた状態で出土した。天井崩落土（７層）の下層で出土している。煙道部は削平され、完全に失われている。

遺物は、カマド燃焼部で１の土師器坏が伏せた状態で出土したほか、床面から２の土師器坏が出土している。この他、覆土中より土師器甕や貝巣穴痕泥岩が出土している。

時期は、出土遺物より、５世紀第Ⅳ四半期に位置づけられる。

第129号住居跡（第83・84図）

調査区東側、F・G−８グリッドに位置する。第117・145・148・215号住居跡、第19号土坑と重複し、

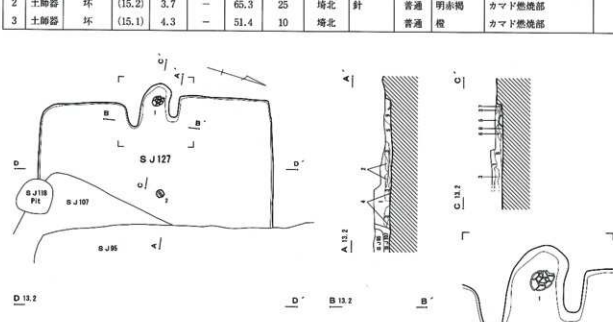


第79図　第126号住居跡

第80図　第126号住居跡出土遺物

第30表　第126号住居跡出土遺物観察表（第80図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	重量	残存(%)	タイプ	胎土	焼成	色調	出土位置・備考	図版
1	土師器	坏	13.0	3.4	－	97.7	40	埼北	角	普通	橙	カマド燃焼部　内外面黒色処理か	
2	土師器	坏	(15.2)	3.7	－	65.3	25	埼北	針	普通	明赤褐	カマド燃焼部	
3	土師器	坏	(15.1)	4.3	－	51.4	10	埼北		普通	橙	カマド燃焼部	



第81図　第127号住居跡

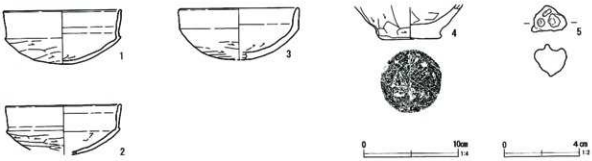
新旧関係は第117号住居跡、第19号土坑よりも古く、第145・148・215号住居跡よりも新しい。住居跡南半が調査区域外に及ぶため、平面形は不明である。

主軸方向はN－0°で、規模は残存する東西軸で4.23m、確認面からの深さ0.3mである。

カマドは北壁東寄りに設けられ、袖部は両側が確認された。壁からの残存規模は左袖45cm、右袖50cmで、構築土には灰褐色粘質土（19層）が用いられている。燃焼部は壁外におよぶ構造で、底面は底面より5～10cmほど掘り窪められ、煙道部とは境界をもたずに移行する。燃焼部では、北壁と一致するラインで幅20cm、深さ10cmほどの溝を確認した。覆土には炭化物や焼土ブロックを含む灰褐色粘質土が堆積している。カマド外にはこの溝を確認できなかったが、北壁に一致するラインで検出していることから、壁溝があったのかもしれない。

煙道部底面は外側に向かって水平に延びる。燃焼部から煙道部先端までの距離は147cmである。

遺物は、床面および覆土から、土師器坏・甕・鉢、ミニチュア土器などが出土している。4はミニチュ



第82図　第127号住居跡出土遺物

第31表　第127号住居跡出土遺物観察表（第82図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	重量	残存(%)	タイプ	胎土	焼成	色調	出土位置・備考	図版
1	土師器	坏	(12.6)	5.6	－	150.1	95	群東	針	普通	橙	カマド燃焼部	163－7
2	土師器	坏	12.3	5.2	－	171.7	95	群東		良好	明赤褐	外面黒斑	163－8
3	土師器	坏	12.7	3.0	－	199.9	80	茨西	角	良好	橙		
4	土師器	甕	－	3.6	6.0	187.4	10	茨西		普通	にぶい橙	木葉痕	
5	須恵器		長1.3幅1.7厚1.5重1.7								灰白	4孔、被熱	238－2

ア土器で口径3.8cm、現存高3.8cmで、口縁部には外面から穿孔した穴が開いている。

出土遺物から、時期は6世紀第Ⅲ四半期に位置づけられるだろう。

第130号住居跡（第85・86図）

調査区中央部、G・H－3・4グリッドに位置する。第176号住居跡、第9a号溝跡と重複し、新旧関係は第9a号溝跡よりも古く、第176号住居跡よりも新しい。北西から南東へ向かって第9a号溝跡が走り、北西コーナーや床面を大きく壊しているほか、南西部の遺構上部は試掘溝により削平を受ける。

平面形は不整方形で、規模は東西軸5.2m、南北軸4.94m、確認面からの深さ0.38mである。床面はカマド周辺に貼り床が貼られている。

カマドは北壁東寄りに設けられ、袖部は両側が確認された。両袖の先端部には補強材として土師器甕が逆位で据えられていた。右袖は1個体（9）、左袖は2個体の甕（7・8）を連接して用いており、黄褐色粘質土の袖構築土（16層）によって固定されていた。7の土器は、検出状態では胴部下半を欠損していたが、燃焼部内に胴部下半の破片が散乱していたことから、補強材には完形の土器が用いられたと推測され、8・9の土器も本来完形で、胴部下半は削平されてしまったものと考えられる。補強材まで含めた壁からの残存規模は、左袖92cm、右袖75cmである。

燃焼部は壁内に収まり、底面は床面よりわずかに低く掘り窪められ、灰が厚く集積する。規模は奥行き80cm、幅53cmで、煙道部とは15～20cmほどの明瞭な段差をもって接続する。煙道部底面は水平もしくは外側へ向かってわずかに下降し、壁外に135cm延びる。幅は25cmほどで、確認面からの深さは8cmである。

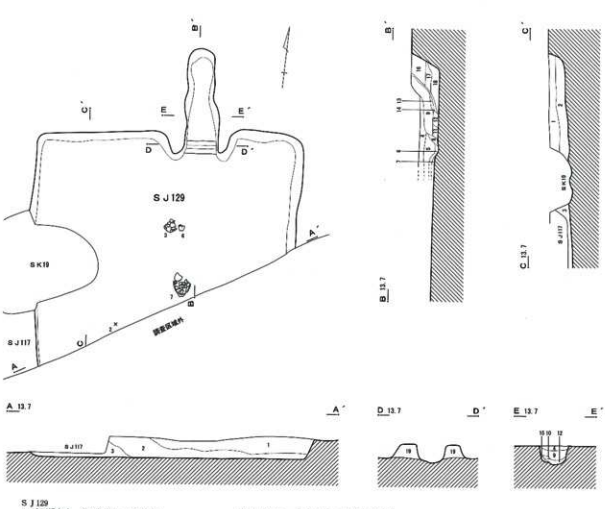
遺物は、袖補強材として土師器甕が出土したほか、燃焼部内で土師器坏・甕が出土している。7・8は左袖補強材、9は右袖補強材である。このほか、住居跡中央の覆土下層では馬歯が出土した。

出土遺物から、時期は7世紀第Ⅳ四半期に位置づけられる。

第131号住居跡（第87・88図）

調査区南東側、H－6グリッドに位置する。第121・139・146・249・260号住居跡と重複し、新旧関係はいずれの住居跡よりも新しい。

平面形は東西に長い長方形で、主軸方向はN－15°



第83図　第129号住居跡

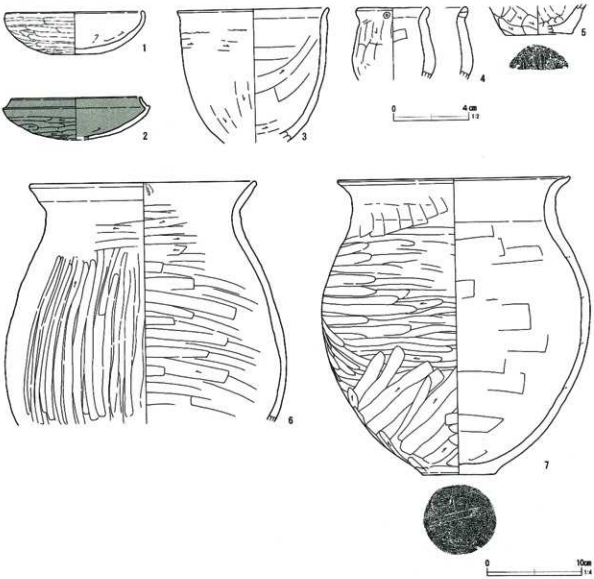
－Wである。規模は長軸4.30m、短軸3.33m、確認面からの深さ0.22mである。

カマドは北壁中央に設けられ、方位はN－13°－Wである。袖部は両側とも確認されていない。燃焼部は北壁を110cm切り込んでおり壁外におよぶ。底面は床面よりも5～10cmほど低く掘り窪め、煙道部とは10cmほどの段差を設ける。

燃焼部では土師器甕（1）と須恵器坏（2）が出土した。土師器甕は、燃焼部底面に掘り込まれた46×36cmの円形ピットに、伏せた状態で胴部上半まで埋められており、機能時は燃焼部底面から胴部下半が30cmほど突き出た状態であった。出土状況から支脚と判断される。この土師器甕の上には、須恵器坏の破片が伏せられていた。

煙道部より先は、短い幅で段差を繰り返して立ち上がる。壁外へ延びるカマド全長は135cmである。

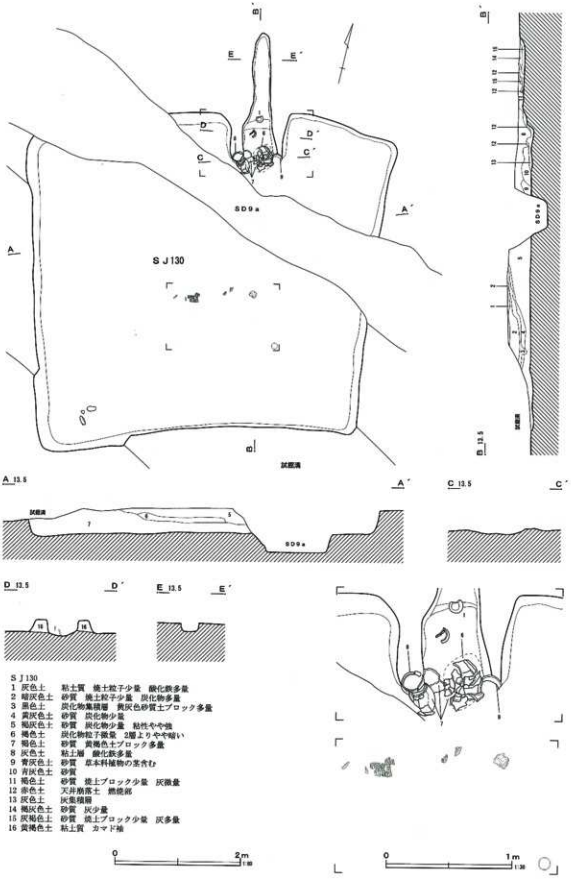
カマド以外の施設としては、柱穴が4基確認されている。柱穴は床面から確認することができず、20～30cmほど掘り下げた高さで確認した。平面形および規模は、P1が円形で20×17cm、床面からの深さ39cm、P2は楕円形で21×18cm、床面からの深さ40cm、P3は楕円形で32×29cm、床面からの深さ37cm、



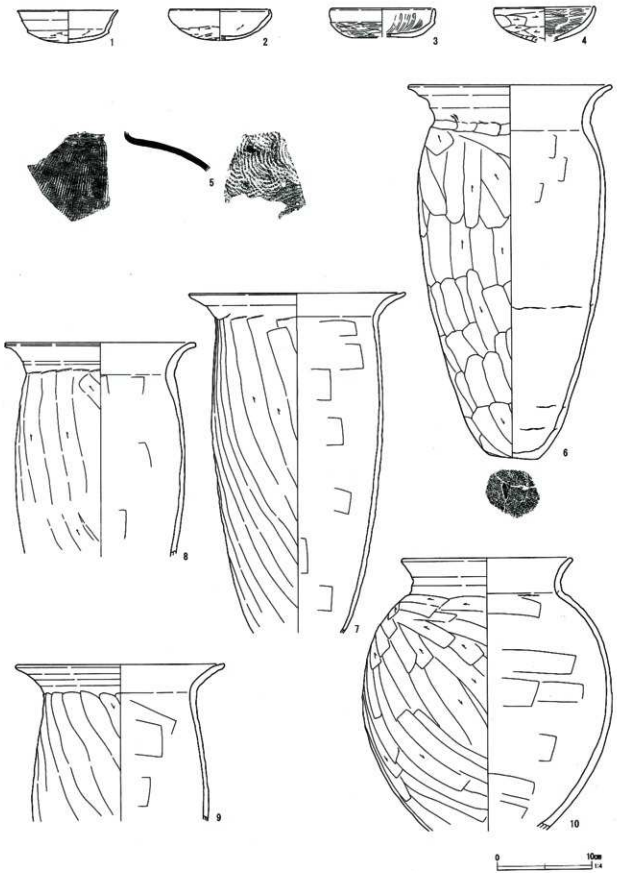
第84図　第129号住居跡出土遺物

第32表　第129号住居跡出土遺物観察表（第84図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	重量	残存(%)	タイプ	胎土	焼成	色調	出土位置・備考	図版
1	土師器	坏	14.6	4.5	－	142.2	35	栃南	針	普通	にぶい黄橙	内外面黒斑	
2	土師器	坏	(13.9)	4.4	－	101.5	30	埼北	針	良好	黒褐		
3	土師器	甕か	(16.2)	14.0	－	287.9	40	茨西	針	普通	橙		
4	土製品	ミニチュア	(3.8)	3.8	－	14.2	20	茨西	角	普通	明黄褐	穿孔(0.2×0.4)あり	
5	土師器	甕	－	3.1	7.0	62.9	5	栃南	角	普通	にぶい赤褐	木葉痕	
6	土師器	甕	(23.7)	25.3	－	823.8	20	茨西		普通	にぶい橙		
7	土師器	甕	(24.6)	31.0	7.8	2962.4	75	常陸～下総	角、針	普通	にぶい黄橙		204-4



第85図　第130号住居跡



第86図　第130号住居跡出土遺物

第33表　第130号住居跡出土遺物観察表（第86図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	重量	残存(%)	タイプ	胎土	焼成	色調	出土位置・備考	図版
1	土師器	坏	(10.6)	3.5	－	64.1	75	埼玉	角	普通	黄橙	カマド燃焼部	
2	土師器	坏	10.6	3.3	－	50.4	45	埼北	針	普通	橙		
3	土師器	坏	(10.8)	3.2	－	39.7	20	栃南	雲、角	良好	にぶい黄橙		
4	土師器	坏	(10.7)	3.6	－	28.3	10	佐野	雲	普通	にぶい褐		
5	須恵器	甕	－	4.3	－	63.9	5			普通	にぶい黄橙		
6	土師器	甕	21.2	39.4	5.3	1857.2	90	佐野	角	普通	淡赤橙	カマド燃焼部	205－1
7	土師器	甕	(23.0)	35.6	－	1110.8	80	埼玉	雲、角	普通	橙	カマド左袖構築材	205－2
8	土師器	甕	19.8	22.4	－	1197.1	50	埼北	雲	普通	橙	カマド左袖構築材	
9	土師器	甕	22.2	16.6	－	661.3	20	埼北	雲、角	普通	橙	カマド右袖構築材	
10	土師器	甕	(17.3)	28.7	－	1240.5	50	埼北		普通	橙		205－3

P４は円形で31×28cm、床面からの深さ35cmである。柱穴間の距離は、南北方向に比べて東西方向に長く、住居跡平面形と一致する。東西方向Ｐ１－２は230cm、Ｐ３－４は285cm、南北方向Ｐ２－３は155cm、Ｐ４－１は180cmである。

遺物は燃焼部で出土した土師器甕、須恵器坏のほか、覆土から須恵器坏が出土した。３は支脚転用甕で、頸部はコの字状、最大径は胴部上半にあり、底部へ向かってすぼまる器形である。

時期は出土遺物から、９世紀第Ⅱ四半期に位置づけられる。

第132号住居跡（第89・90図）

調査区南東側、Ｈ・Ｉ－６グリッドに位置する。第122・126・147・151・249・273号住居跡と重複し、新旧関係は、第122・126・147号住居跡よりも古く、その他の住居跡よりも新しい。住居跡の大半は調査区域外におよんでおり、平面形は不明である。規模は残存する南北軸で5.96m、確認面からの深さは0.38mである。

遺物は覆土中より土師器坏が出土した。時期は出土遺物から５世紀第Ⅳ四半期に位置づけられる。

第133号住居跡（第91・92・93図）

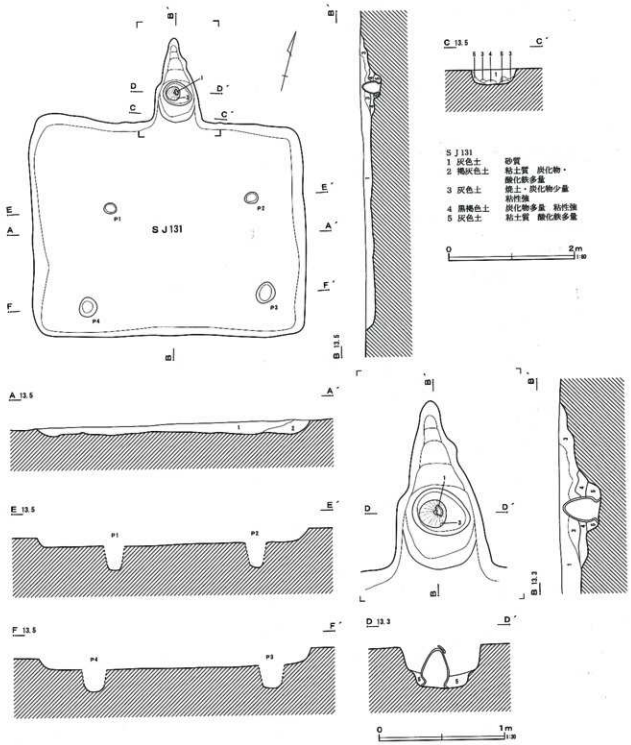
調査区南東側、Ｈ・Ｉ－５グリッドに位置する。第97・108・134・138・147・151・230・247号住居跡、第12号溝跡と重複し、新旧関係は、第97・108・134・138・147号住居跡、第12号溝跡よりも古く、第151・230・247号住居跡よりも新しい。第138号住居跡に南側の床面を壊されているほか、遺構上部の各所を他遺構による掘削を受ける。

平面形はほぼ正方形で、主軸方向はＮ－20°－Ｗである。規模は東西軸7.06m、南北軸6.90m、確認面からの深さ0.40mである。床面は、縁辺を除くほぼ全面において貼り床が確認された。

カマドは北壁中央に設けられる。煙道部先端は第108号住居跡によって壊されている。袖部は両側が確認され、構築土には灰褐色粘質土（36層）が用いられる。壁からの残存規模は左袖62cm、右袖65cmである。燃焼部はほぼ壁内に収まり、底面は床面よりも10cmほど低く掘り窪められる。燃焼部は、断面観察によれば、構築当初の底面とカマド廃棄段階の底面が存在している。燃焼部中央では土師器甑（８）が伏せて出土した。断面観察では、甑は構築当初の底面に置かれている。その後堆積が進み、火床面が９層上面にあった時も据え続けられている。甑の周囲の底面上には燃焼部の天井崩落土と思われる焼土ブロックや灰が集積し、土器をパックしていることから、この土器はカマド機能時からこの位置にあり、流れ込んだものではないことは明白である。よってここでは支脚と捉えておきたい。

燃焼部と煙道部は20cmほどの明瞭な段差をもって接続する。煙道部底面は凹凸をもちながら、水平、もしくは外側に向かってわずかに下降し、壁外に87cm延びたところで第108号住居跡に切られる。

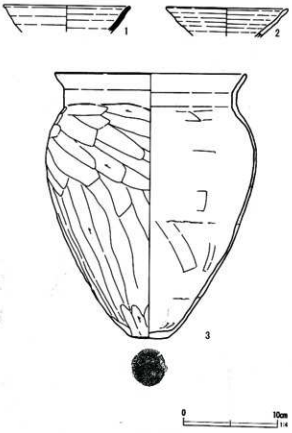
カマド以外の施設としては、ピットが９基検出さ



第87図　第131号住居跡

第34表　第131号住居跡出土遺物観察表（第88図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	重量	残存(%)	タイプ	胎土	焼成	色調	出土位置・備考	図版
1	須恵器	坏	13.4	2.9	－	24.3	10	太田か		普通	灰	カマド支脚上	
2	ﾛｸﾛﾋﾟﾝｷﾞ	坏	12.9	3.1	－	19.0	15	新治	雲	良好	橙		
3	土師器	甕	20.1	27.9	3.8	1013.5	95	群東	雲、針	普通	にぶい橙	カマド支脚	205-4



第88図　第131号住居跡出土遺物

れた。P1～4はカマド左側の床面で検出されている。いずれも焼土ブロック・灰層を含んでいることから、カマドの灰ピットであったと考えられる。P1はP2と重複し、新旧関係はP1の方が新しい。平面形および規模は、P1は円形で55×52cm、床面からの深さ12cm、P2は35×20cm、床面からの深さ10cm、P3は円形で35×33cm、床面からの深さ8cm、P4は円形で37×36cm、床面からの深さ6cmである。

P5～9は住居跡南東で検出されている。覆土には灰褐色砂質土が多く見られる。P8はP9と重複しており、新旧関係はP8の方が新しい。平面形および規模は、P5は円形で41×38cm、床面からの深さ12cm、P6は円形で41×39cm、床面からの深さ16cm、P8は円形で63×56cm、床面からの深さ18cm、P9は円形で30×27cm、床面からの深さ11cmである。

遺物は、カマド燃焼部のほか、カマド左手の床面でややまとまって出土している。出土遺物の内容としては、土師器坏・甕・甑・鉢などのほか、臼玉や鉄製品が見られた。3・4の土師器坏、6・7の土師器甕のほか、12の鉄滓、13の鉄製品はカマド燃焼部から出土している。また、10の臼玉は住居跡東側の床面から出土している。このほか、床面からやや浮上した高さで炭化材やまとまった焼土ブロックが検出されている。

時期は、出土遺物から5世紀第Ⅳ四半期に位置づけられよう。

第134号住居跡（第94・95図）

調査区南東、I－5グリッドに位置する。第97・133・138・230号住居跡、第12号溝跡と重複し、新旧関係は第133・230号住居跡よりも新しく、その他の住居跡よりも古い。

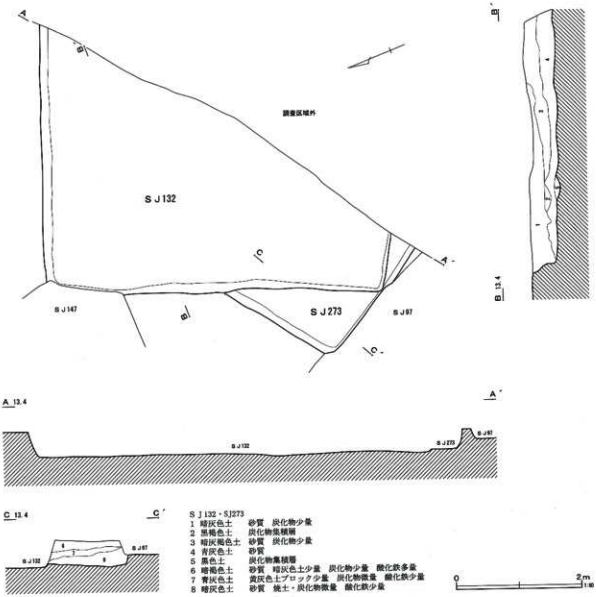
平面形は不整方形で、規模は東西軸5.90m、南北軸5.65m、確認面からの深さ0.35mである。また主軸方向はN－23°－Wである。

カマドおよび、その他の施設は確認されなかった。

出土遺物は、土師器坏、甕の破片が少量出土しているが、図化したのは1点である。時期は6世紀前半と思われる。

第135号住居跡（第96・97・98・99・100図）

調査区東部、E－7、F－6・7グリッドに位置し、流路跡堆積層に掘りこまれる。住居跡北東コーナーが調査区域外におよんでおり、第161号住居跡、第31号土坑、第29号井戸跡と重複する。新旧関係は、第31号土坑、第29号井戸跡よりも古い。第161号住



第89図　第132・273号住居跡

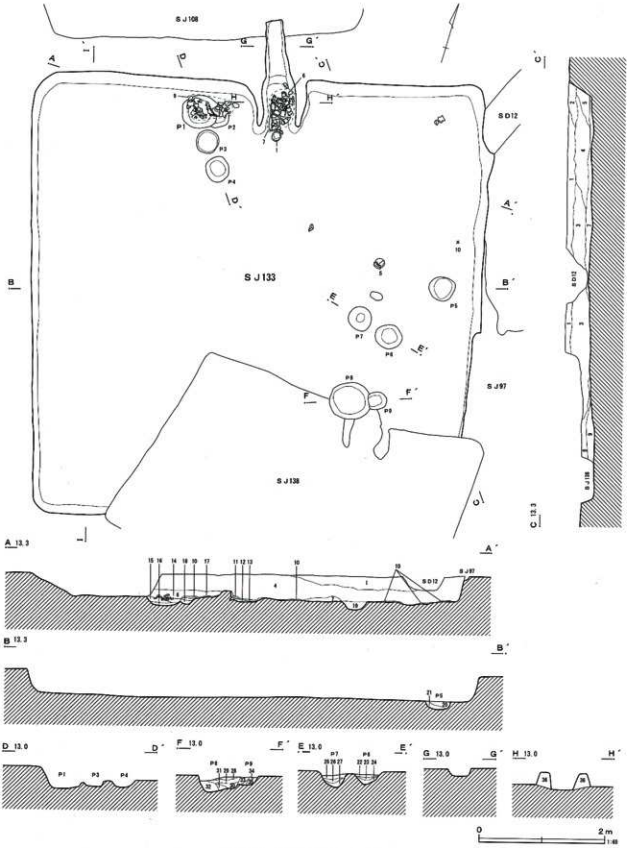
第35表　第132号住居跡出土遺物観察表（第90図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	重量	残存(%)	タイプ	胎土	焼成	色調	出土位置・備考	図版
1	土師器	坏	11.8	4.9	—	124.3	75	埼玉～群馬	針	良好	にぶい橙		

第90図　第132号住居跡出土遺物

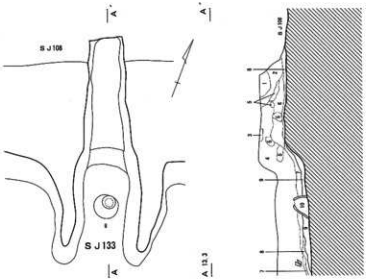
居跡との新旧関係は不明である。

平面形はほぼ正方形で、主軸方向はN－12°－Wである。規模は東西軸7.25m、南北軸7.10m、確認面から床面までの深さは0.40mある。床面は、貼り床や硬化面などは確認されなかったが、流路跡堆積層であるしまりの強い黄褐色粘質土層中に造られていたこととから、非常に固くしまった印象であった。同土層には、確認面から30cmほど掘り込んだ高さで到達し、床面はこの土層を10～15cmほど掘り込んで造り出されている。覆土には周辺地山である褐色粗粒砂層が厚く堆積している。また、途中には炭



第91図　第133号住居跡（1）

S J 133
1 暗褐色土　黄褐色土ブロック・黄灰色ブロック多量　炭化物粒子少量
2 暗褐色土　砂質　炭化物粒子少量
3 黄褐色土　砂質　暗褐色砂質土ブロック微量　炭化物粒子微量
4 暗褐色土　黄褐色土極く多量
5 暗褐色土　砂質　黄褐色砂質土ブロック多量　焼土ブロック微量　炭化物粒子多量
6 褐色土　褐色土・黄褐色土ブロック多量　下位に薄く炭化物堆積
7 灰褐色土　黄褐色土ブロック極く多量　下位に薄く炭化物堆積
8 暗灰色土　砂質　炭化物ブロック・焼土ブロック少量
　　下位に厚く炭化物堆積
9 灰褐色土　砂質　炭化物粒子・黄褐色砂質ブロック少量
10 黒灰色土　炭化物集積層
11 橙色土　焼土ブロック集積層
12 黒灰色土　炭集積層
13 赤色土　火床面
14 赤色土　焼土ブロック集積層
15 灰色土　砂質　焼土ブロック多量
16 黒灰色土　炭集積層
17 黄灰色土　砂質　下位に薄く炭化物堆積
18 黒色土　炭化物集積層　黄灰色砂質土ブロック多量　焼土ブロック多量
19 暗灰色土　黄褐色土ブロック多量　炭化物微量
20 暗褐色土　炭化物少量
21 明褐色土　しまりやや強
22 明褐色土
23 暗灰褐色土　砂質　炭化物少量
24 明灰褐色土　砂質　炭化物微量
25 明褐色土　炭化物微量
26 暗灰褐色土　砂質　炭化物少量
27 暗灰褐色土
28 暗灰褐色土　炭化物少量　しまり強
29 暗灰褐色土　砂質　炭化物粒子多量
30 暗灰褐色土　砂質　炭化物粒子多量
31 明灰褐色土　炭化物粒子多量
32 暗灰褐色土　炭化物少量　しまり強
33 青灰褐色土　砂質　炭化物粒子少量
34 青灰褐色土　炭化物粒子多量
35 暗灰褐色土　炭化物微量　しまり強
36 灰褐色土　粘土質　カマド袖



S J 133カマド
1 暗褐色土　炭化物少量
2 暗黄褐色土　黄褐色土ブロック少量
3 赤色土　煙道部天井
4 褐灰色土　焼土ブロック少量
　　炭化物少量
5 赤色土　天井崩落土　煙道部
6 暗灰色土　焼土粒子多量
7 橙色土　焼土ブロック集積層
　　（天井崩落土）　燃焼部
8 黒灰色土　炭集積層
9 赤色土　火床面
10 暗褐色土

第92図　第133号住居跡（2）

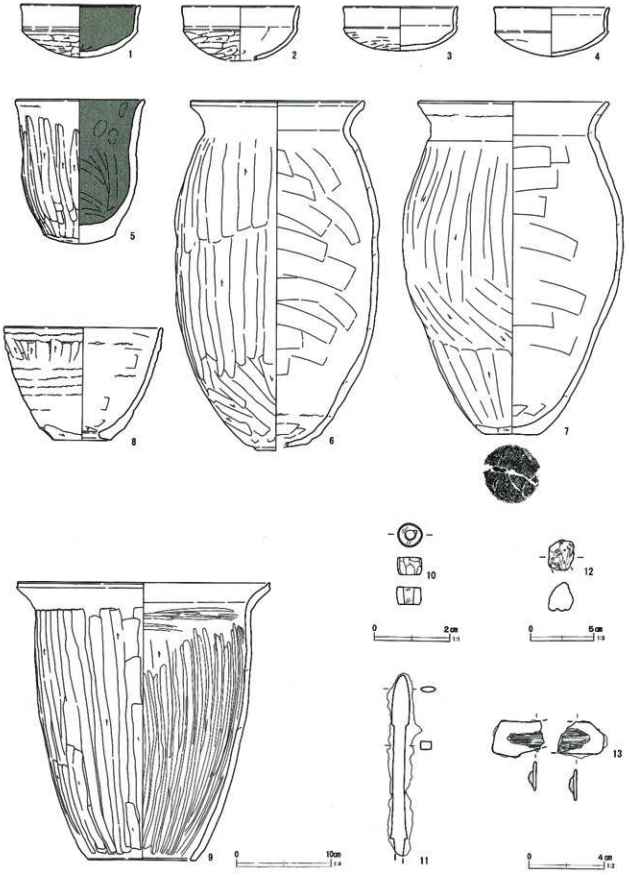
化物や土器の集積も見られなかったことから、覆土は比較的短期間で埋まったようである。

このほか本住居跡では、噴砂と地滑りの痕跡を確認した。噴砂と地滑りは、住居跡北側、北西コーナーから東壁に向かって、東西方向に併走している。地滑りは住居跡床面において、15cmほどの段差ができ、北側に向かって落ち込んでいる。

カマドは北壁やや東寄りに設けられ、方位はN－4°－Wである。煙道部は後述するカマド掘り方中に掘削され、先端部は調査区域外におよんでいる。

袖部は両側が確認され、構築土にはしまりの強い黄褐色粘質土（40層）が用いられている。袖の残存状況は良好で、壁際は確認面付近まで立ち上がり、内面は上部まで被熱し赤変している。残存高は最高所で50cm、壁からの残存規模は左袖60cm、右袖68cmである。右袖の先端には土師器甕（16）を逆位に据えており補強していた。胴部下半は欠損している。

燃焼部は壁内に収まり、壁際には壁溝が巡り、構



第93図　第133号住居跡出土遺物

第36表　第133号住居跡出土遺物観察表（第93図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	重量	残存(%)	タイプ	胎土	焼成	色調	出土位置・備考	図版
1	土師器	坏	12.6	5.6	－	188.6	80	群東		普通	橙	カマド前面	163－9
2	土師器	坏	(12.2)	5.7	－	70.0	40	群東		良好	橙		
3	土師器	坏	12.0	4.7	－	146.5	90	群東	針	普通	橙	カマド燃焼部　被熱	163－10
4	土師器	坏	12.0	5.2	－	130.4	70	群東		普通	橙	カマド燃焼部　被熱	
5	土師器	鉢	(13.4)	15.2	7.5	573.2	45	茨西	雲	普通	橙		184－3
6	土師器	甕	18.0	37.0	5.6	2085.7	65	群東	角	普通	灰褐	カマド燃焼部	206－1
7	土師器	甕	(19.6)	35.1	5.4	2157.5	80	栃南	雲、角、針	普通	にぶい赤褐	外面に煤付着	206－2
8	土師器	甑	(16.6)	11.9	6.2	489.9	55	茨西		普通	橙	カマド支脚　黒斑	184－4
9	土師器	甑	(26.6)	29.3	(11.3)	1588.9	35	群東	針	普通	明赤褐		206－3
10	石製品	臼玉	径0.62孔径0.22厚0.42重0.26										234－1
11	鉄製品	鎌	長(9.5)幅(0.9)厚(0.3)重14.1									長星三角形鎌　開茎被　両丸造か	237－1
12	鉄滓		長(2.4)幅1.9厚2.2重4.9									カマド燃焼部	
13	鉄製品	不明	長(6.0)幅1.9厚0.1重6.7									カマド燃焼部　板状	237－1

内には焼土ブロックを含む土を堆積する。底面は床面よりもわずかに低く掘り窪められ、規模は、奥行き56cm、幅は手前60cm、奥35cmである。

煙道部は燃焼部から20cmほどの明瞭な段差を設けて接続し、壁外へ142cm延びる。天井は調査区側溝まで残存しており、断面では後述するカマド掘り方埋土（9層）とその被熱部（10層）が確認された。煙道部はF－F′の位置において、幅22cm、高さ23cmの被熱円環として観察された。底面には炭化物が厚く集積し、覆土には焼土ブロックや炭化物ブロックを多量に含む砂質土が堆積している。

また、本住居跡ではカマド掘り方を確認している。南側は住居跡北壁に接し、北側は調査区側溝に壊されているため正確な平面形は不明であるが、南北方向に長い長方形ないしは長円形であったと思われる。規模は、東西軸1.20m、南北軸1.65m、深さ0.30mで、住居跡と接する南側を除くと立ち上がりは、外側に向かって広がり、底面は摺鉢状となる。南側では、掘り方底面と煙道部底面との高さが一致するが、北側では、掘り方の立ち上がりが煙道部底面の傾斜よりも緩いため、両者の高低差は開いていく。

掘り方埋土には多量の灰褐色粘質土ブロック、少量の焼土・炭化物ブロックを含むよくしまった灰褐色砂質土（9・37層）が用いられており、袖構築土（31・33層）とは異質である。

土層観察から見たカマド構築順序は、まず掘り方を掘削し、次にこれを埋め、その後カマド袖を造りつけたと復元される。

カマド以外の施設としては、柱穴、壁溝を確認した。柱穴は4基検出されたが、床面から確認することができず、15～20cm掘り下げた高さで検出した。P1は楕円形で61×60cm、床面からの深さ41cm、P2は円形で60×52cm、床面からの深さ37cm、P3は円形で50×49cm、床面からの深さ31cm、P4は円形で41×40cm、床面からの深さ38cmである。

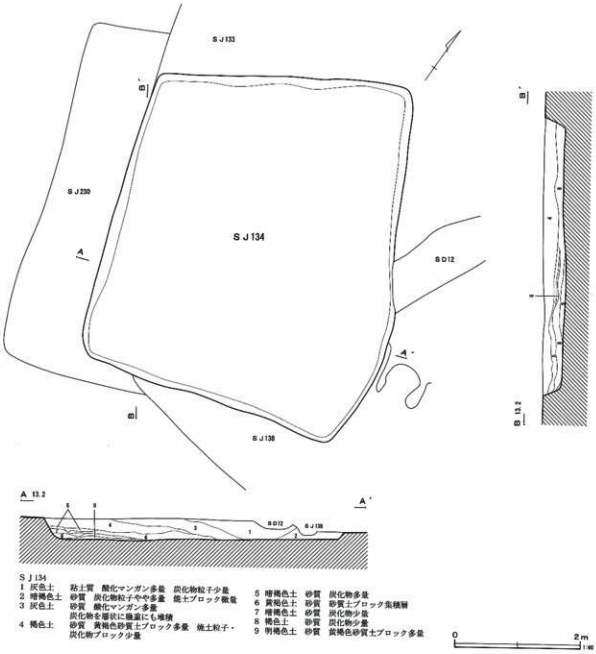
壁溝は北壁、東壁、西壁の一部で確認した。規模は、幅15cm、床面からの深さ10～15cmである。カマド燃焼部にも壁溝が巡っていることから、カマドに先行して掘られていることがわかる。

遺物は、カマド近辺でやや多く見られたほか、床面、覆土でも散見された。16は右袖カマド補強材で、17はカマド燃焼部内出土、2・5の土師器坏はカマド両脇で出土している。また15は須恵器高坏で、床面から出土している。このほか、床面や覆土から土玉、鉄製品、貝巣穴痕泥岩などが出土した。

出土遺物より時期は、7世紀第Ⅲ四半期に位置づけられる。

第136号住居跡（第101図）

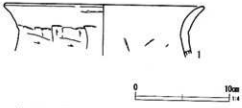
調査区北東部、F－6グリッドに位置する。第113・114・115・161号住居跡と重複し、新旧関係は、



第94図　第134号住居跡

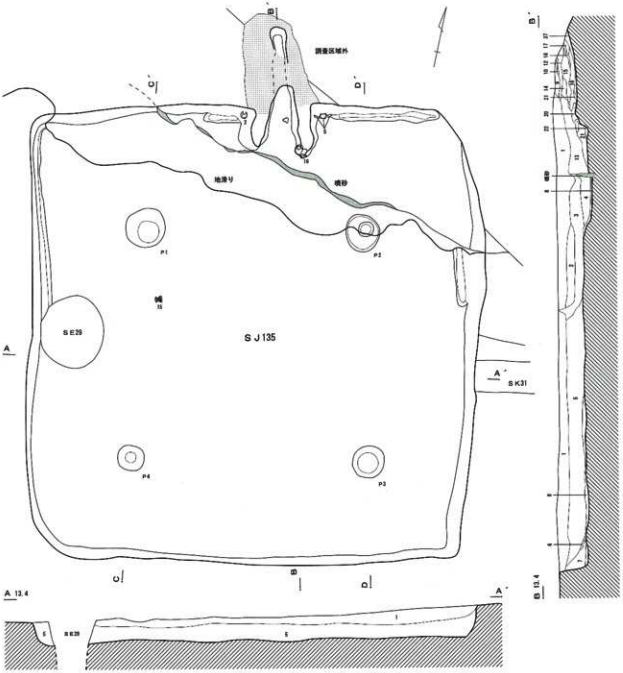
第37表　第134号住居跡出土遺物観察表（第95図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	重量	残存(%)	タイプ	胎土	焼成	色調	出土位置・備考	図版
1	土師器	甕	(21.0)	5.4	―	57.0	5	炭西	雲、角	普通	にぶい黄橙		



第95図　第134号住居跡出土遺物

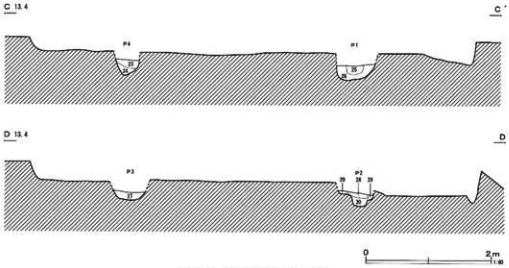
第114・115号住居跡よりも古く、第113・161号住居跡よりも新しい。第115号住居跡と北壁・西壁ラインがおおむね一致することから、検出当初は同住居跡の掘り方と思われたが、北壁東寄りの位置で、炭化物や焼土ブロック集積が壁の外側へ張り出して検出されたことから、カマドとして扱い、独立した住



SJ135
1 灰褐色土　砂質　黄褐色粘質土ブロック少量　炭化物ブロック少量
2 灰色土　砂質　黄褐色粘質土ブロック極く多量
3 黄灰色土　焼土質
4 褐色土　粘土質
5 褐色土　砂質　黄褐色粘質土ブロック多量　炭化物ブロック少量
6 黄褐色土　粘土質　ブロック状に堆積
7 灰色土　砂質　焼土ブロック多量　炭化物ブロック少量
8 黄灰色土　砂質
9 暗褐色土　砂質　炭化物粒子少量
10 赤色土　焼道祖火井
11 暗灰色土　灰集積層
12 暗褐色土　砂質土と焼土の混層
13 灰色土　砂質
14 灰褐色土　砂質土・焼土ブロック多量
15 灰褐色土　砂質土・焼土ブロック少量　炭化物ブロック少量
16 黒色土　炭化物集積層　焼土ブロック多量
17 灰褐色土　砂質　焼土ブロック・炭化物ブロック少量
18 黒色土　炭化物集積層　焼土ブロック多量
19 赤色土　崩落土　煙道部
20 褐色土　焼土粒子少量
21 黒色土　炭化物集積層
22 褐色土　砂質　焼土ブロック少量　焼土粒子多量
32 暗褐色土　砂質
24 暗褐色土　炭化物少量　粘性強
25 明褐色土　炭化物微量
26 暗褐色土　炭化物少量
27 青灰褐色土　粘性強
28 暗褐色土　炭化物多量　粘性強
29 暗褐色土　黄褐色粘質土ブロック少量　炭化物微量
30 暗褐色土　砂質　炭化物少量
31 明褐色土　粘土質　砂質土・焼土ブロック少量
32 灰褐色土　砂質　焼土粒子少量
33 明褐色土　粘土質　炭化物ブロック少量
34 赤色土　焼土集積層
35 灰褐色土　砂質土・焼土ブロック・炭化物粒子少量
36 灰褐色土　砂質
37 暗褐色土　砂質土・炭化物粒子少量
38 灰褐色土　砂質　焼土粒子少量
39 暗褐色土　砂質
40 黄褐色　粘質土ブロック層　カマド袖

0　2m
1:40

第96図　第135号住居跡（1）



第97図　第135号住居跡（2）

居跡と判断した。南東コーナーは第113号住居跡に壊されているほか、遺構上部の各所を他住居に壊されている。

平面形は方形で、東西壁のラインは歪んでいる。主軸方向はN－27°－Wで、規模は東西軸4.85m、南北軸3.9m、確認面からの深さ0.15mである。

カマドは北壁東寄りに設けられている。遺存状況は極めて悪く、壁から奥行き50cm、幅30cmほど張り出した浅い掘り込みに、炭化物や焼土ブロックが集積していたのみである。

遺物は出土していないが、他遺構との重複関係から、時期は7世紀第Ⅰ四半期遺構と思われる。

第138号住居跡（第102・103図）

調査区南東側、I－5グリッドに位置する。第97・133・134・151・230号住居跡、第11・12号溝跡と重複し、新旧関係は第97号住居跡、第11・12号溝跡よりも古く、第133・134・151・230号住居跡よりも新しい。遺構の各所を他遺構に壊されるほか、南東コーナーは調査区域外および未検出である。

平面形は長方形で、規模は長軸4.82m、短軸3.2m、確認面からの深さ0.38mである。

カマドは北壁東寄りに設けられ、主軸方向はN－6°－Eである。上部を第97号住居跡によって壊されており、煙道部は、7°の傾斜で上昇していく底面の一部を検出したのみである。袖部は両側が確認され、壁からの残存長は左袖74cm、右袖53cm、残存高は左袖14cm、右袖7cmで、構築土には灰褐色粘質土（7層）が用いられる。

燃焼部は壁内に収まり、底面は床面よりわずかに掘り窪められるが明確な掘り込みは見られない。燃焼部中央には、土柱状の支脚が底面に貼り付けられ、周囲には炭化物が厚く集積する。煙道部はわずかに検出されたが、規模および形状は不明である。底面は外側へ向かって上昇していたと思われ、燃焼部底面とは10cmほどの明瞭な段差が設けられていた。

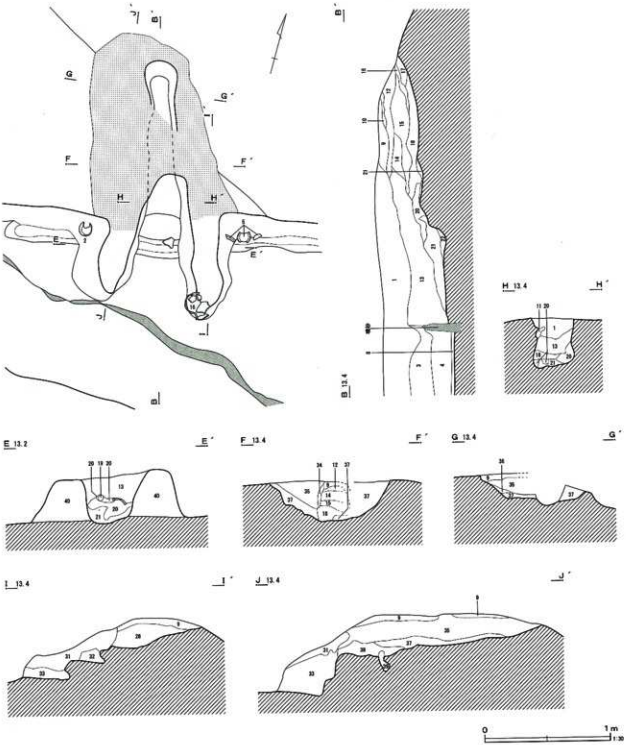
遺物は、カマド燃焼部や床面、覆土から、土師器坏や甕の破片が少量出土した。時期は出土遺物から、6世紀第Ⅲ四半期に位置づけられる。

第139号住居跡（第104～108図）

調査区東側やや北東寄り、G・H－6グリッドに位置する。第131・146・198・201・260号住居跡と重複し、新旧関係は第131・260号住居跡よりも古く、第146・198・201号住居跡よりも新しい。中央部が攪乱により壊されるほか、住居跡東側コーナーは第260号住居跡により失われている。

平面形は長方形で、主軸方向はN－41°－Eである。規模は長軸5.01m、短軸4.39m、確認面からの深さ0.49mである。

カマドは北壁やや西寄りに設けられ、方位はN－42°－Eである。袖部は両側が確認され、先端部に

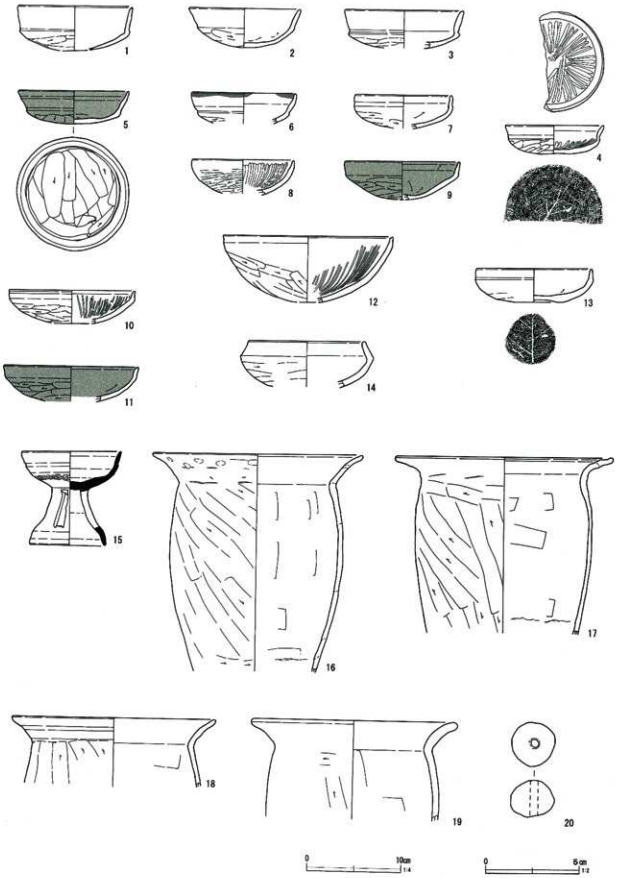


第98図　第135号住居跡カマド

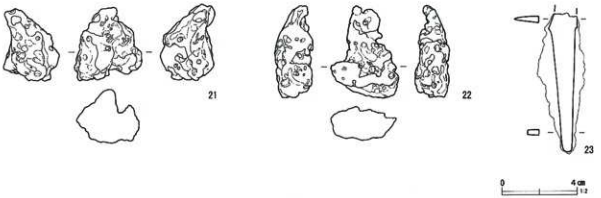
は補強材とした土師器甕（26・27）が伏せた状態で設置されていた。左右の補強材はともに胴部下半を欠いており、残存率は60～70%である。壁から補強材先端までの残存規模は、左袖40cm、右袖40cmで、構築土には灰褐色粘質土が用いられている。

燃焼部は壁をわずかに切り込み、底面は床面よりやや低く掘り窪められるが、明瞭な掘り込みは見られない。煙道部とは5～10cmのわずかな段差をもって接続し、煙道部底面は凹凸を繰り返しながら8°の傾斜で壁外へ145cm延びている。

遺物は、カマド袖部補強材（26・27）や支脚転用土器として見られたほかは、燃焼部からカマド前面



第99図　第135号住居跡出土遺物（1）



第100図　第135号住居跡出土遺物（2）

第38表　第135号住居跡出土遺物観察表（第99・100図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	重量	残存(%)	タイプ	胎土	焼成	色調	出土位置・備考	図版
1	土師器	坏	12.0	4.6	－	65.0	40	埼北		普通	橙	掘り方	
2	土師器	坏	11.6	4.2	－	101.7	80	埼北	角	普通	橙	カマド左脇	164－1
3	土師器	坏	(12.6)	4.0	－	51.9	10	埼北	針	良好	橙		
4	土師器	坏	10.4	3.0	－	65.0	50	太田～佐野		良好	赤褐	内外面赤彩か　底部に黒付着　木葉痕	
5	土師器	坏	11.6	3.5	－	123.9	95	埼北	針	良好	黒	カマド右脇	164－2
6	土師器	坏	(11.1)	3.3	－	48.8	30	栃南		普通	灰白	漆付着	
7	土師器	坏	(10.0)	3.5	－	26.7	15	佐野	角、針	普通	橙		
8	土師器	坏	(10.8)	3.6	－	26.2	15	茨西		普通	橙	内外面赤彩か	
9	土師器	坏	(12.0)	4.0	－	50.4	20	佐野	針	普通	黒		
10	土師器	坏	(13.4)	3.5	－	58.9	25	埼北	針	良好	橙		
11	土師器	坏	14.2	3.7	－	111.7	65	埼玉	針	普通	黒	掘り方	
12	土師器	埦	(18.0)	7.0	－	152.2	20	埼北	角、針	普通	橙		
13	土師器	坏	(12.0)	3.4	－	100.0	35	茨西	雲	普通	にぶい橙	木葉痕	
14	土師器	坏	(12.0)	4.9	－	56.5	15	埼北	針	普通	橙		
15	須恵器	高坏	10.3	9.9	7.9	264.4	95	太田		良好	暗灰	床面　三方透し	184－5
16	土師器	甕	(22.3)	22.9	－	544.8	20	埼玉	雲	普通	橙	カマド右袖構築材	
17	土師器	甕	23.0	18.6	－	437.2	25	埼北	角	普通	橙	カマド燃焼部	
18	土師器	甕	(21.7)	7.3	－	141.3	10	埼北		普通	橙		
19	土師器	甕	(21.2)	10.5	－	283.4	10	茨西		良好	赤褐		
20	土製品	土玉	径2.3孔径0.4厚1.9重9.7残95						雲	普通	褐灰		233－2
21	鉄製品		長3.7幅3.5厚2.8重13.0								灰白	51孔、被熱	238－1
22	鉄製品		長4.6幅3.4厚1.6重11.3								にぶい黄橙	55孔、被熱	238－1
23	鉄製品	刀子	長(7.3)茎長6.5刃幅1.4背幅0.3重31.0										237－1

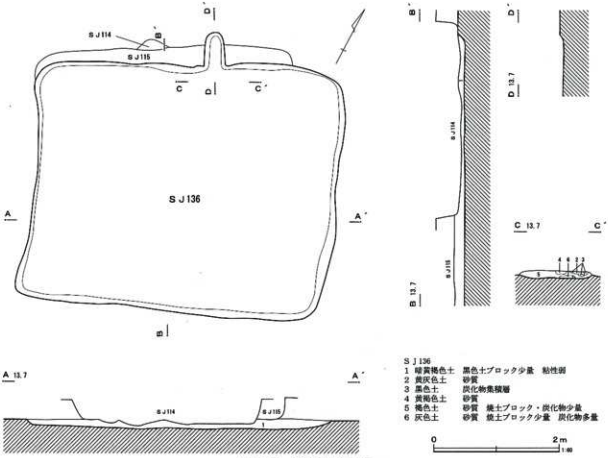
にかけて特にまとまって出土している。この位置からは5・10の土師器坏、20・24・28の土師器甕が出土している。

このほか、覆土下層からは3・11の土師器坏が、また、掘り方からは4の土師器坏、17の土師器高坏、18の甕、22・25の土師器甕、29の須恵器甕が出土した。土器以外の遺物としては、砥石、貝巣穴痕泥岩などが出土している。

住居跡の時期は、出土遺物から7世紀第Ⅱ～Ⅲ四半期に位置づけられる。

第141号住居跡（第109～112図）

調査区北東側、E－5・6グリッドに位置し、流路跡第二次堆積層に掘り込まれている。第155号住居跡と重複し、新旧関係は本住居跡の方が新しい。



第101図　第136号住居跡

平面形は南北にやや長い長方形で、規模は東西軸4.61m、南北軸5.29m、確認面からの深さ0.48mである。床面は灰褐色砂質土中に造られ、貼り床はカマド前面に厚く貼られ、炭化物が薄く堆積する。

カマドは北壁西寄りに位置し、方位はN－12°－Wであり、住居跡本体に対し西に振れている。袖部は両側が確認され、ともに先端部に土師器甕（17・18）を倒立させ補強材としていた。補強材の出土位置は、カマド煙道を中心としたとき、右袖が手前、左袖がやや奥まった位置にある。両補強材は胴部下半が失われており、残存率60～70％である。ともに袖部の延長上ではなく、やや内側に位置しており、結果として焚口幅は燃焼部の幅よりやや狭くなる。

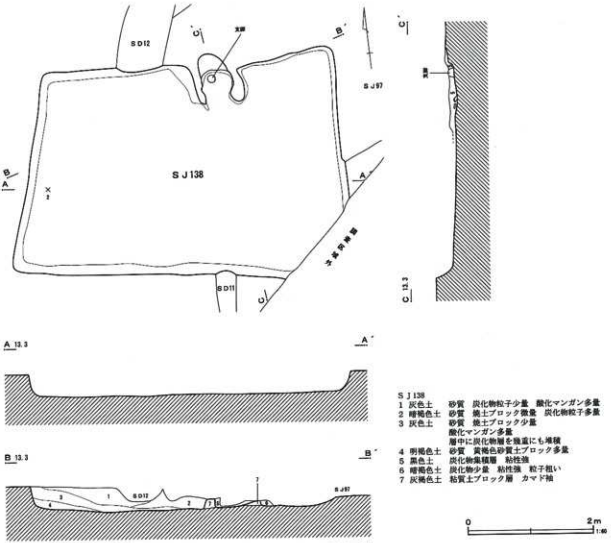
構築土にはしまりの強い黄褐色粘質土が用いられ、壁際では、確認面付近まで立ち上がっている。床面からの残底高は、最高所で40cm、補強材を含めた壁からの残存規模は、左袖40cm、右袖36cmである。

燃焼部は北壁をやや切り込んでおり、底面は床面より5～10cmほど低く掘り窪められる。規模は奥行き60cm、幅52cmで、焚口幅は44cmである。煙道部とは20cmの明瞭な段差をもって接続する。

煙道部および煙出しは、後述するカマド掘り方内にあり、非常に残りが良かった。煙道部は天井が崩落せず完全に残っており、入り口付近（第110図C－C′）で幅26cm、高さ32cmの円形に確認された煙道は、掘り方内で直径20cmほどの筒状となり煙出し穴よりやや奥まで掘り込まれる。掘り込みの長さは106cmである。

煙出し穴は確認面において、内径15cmの円環状被熱部として検出されている。天井（40層）は非常によく被熱し硬化赤変している。

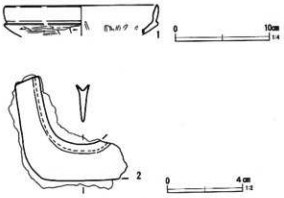
また、本住居跡ではカマド掘り方を確認している。掘り方の規模および平面形は、東西軸1.00m、南北軸1.65mの隅丸長方形で、北壁に接する南側を除く



第102図　第138号住居跡

第39表　第138号住居跡出土遺物観察表（第103図）

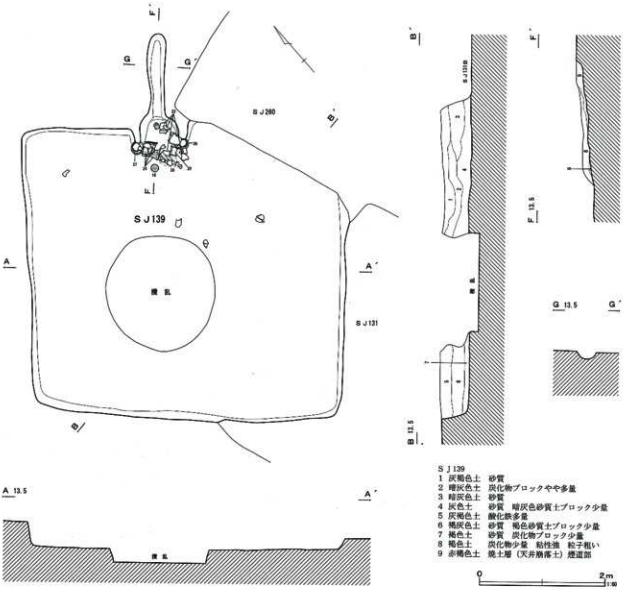
番号	種別	器種	口径	器高	底径	重量	残存(%)	タイプ	胎土	焼成	色調	出土位置・備考	図版
1	土師器	坏	(16.2)	3.2	―	24.7	10	箱西～静馬		普通	黒褐	カマド燃焼部	237-1
2	鉄製品	鍬(鋤)先	長5.5幅(5.9)刃幅1.9重47.6										



第103図　第138号住居跡出土遺物

三方は、ほぼ垂直に0.35mほど掘り込まれる。底面は若干の凹凸を見せながらもほとんど傾斜を持たずフラットに近い。底面は煙道部底面とと同じかわずかに低い位置にある。掘り方埋土は袖構築土と似たしまりの強い黄褐色粘質土で埋められるが、断面観察からは、両者は一体として造られたのではなく、まず掘り方を掘り、土を詰め込んだ後、袖を構築するという順序が復元される。

カマド以外の施設としては、壁溝、柱穴、ピットが確認されている。

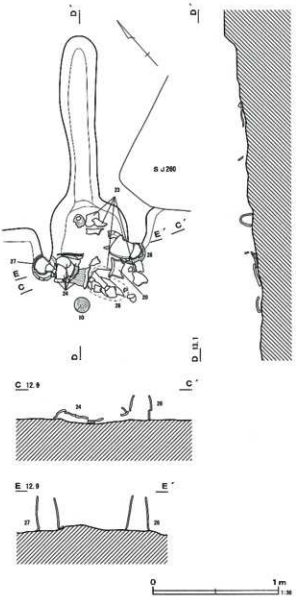


第104図　第139号住居跡

壁溝は住居跡全周で確認された。北西、南東コーナーにおいては、壁のラインに一致して巡るが、南西コーナー、北東コーナーでは周溝は壁のラインに一致しない。南西コーナーはほぼ直角に曲がる壁に対し、20cmほど内側をショートカットするように巡り、これより外側は床面と同じ高さのテラス状となる。北東コーナーも壁の内側をややショートカットするように巡っている。周溝の規模は、幅10～15cm、床面からの深さ10cmである。左袖部の下層からも壁溝が確認されたことから、カマド袖構築以前に掘られたことがわかる。

柱穴はP1～4である。それぞれの平面形および規模は、P1は楕円形で35×33cm、床面からの深さ20cm、P2は円形で31×29cm、床面からの深さ22cm、P3は円形で32×32cm、床面からの深さ27cm、P4は楕円形で36×36cm、床面からの深さ32cmである。

柱穴以外のピットは、主に住居跡北側で5基確認された。P7とP8は重複関係を見せ、新旧関係はP7の方が新しい。P7とP8は床面では確認することができず、貼り床下から検出されている。P6とP9はともに底面に柱の当たった痕跡が見られることから、柱穴であった可能性が高いが、本住居跡とも、重複する第155号住居跡ともプランが一致しない。それぞれの平面形および規模は、P5は円形で



第105図　第139号住居跡カマド

54×58㎝、床面からの深さ20㎝、P6は円形で47×50㎝、床面からの深さ25㎝、P7は不整形で158×127㎝、床面からの深さ33㎝、P8は平面形不明で61×33㎝、床面からの深さ22㎝、P9は円形で56×52㎝、床面からの深さ21㎝である。

遺物は、両袖の補強材として土師器甕が出土しているほか、カマド燃焼部、床面や掘り方などから出土している。内容としては、土師器坏・甕、須恵器甕などのほか、鉄製品、貝巣穴痕泥岩などが見られた。

17・18はそれぞれ、左袖と右袖の補強材である。13の土師器坏、33の鉄製品は住居跡南西の床面で出土している。

6・17・18はカマドから出土している。

出土遺物から、時期は7世紀第Ⅳ四半期である。

第142号住居跡（第113図）

調査区東部、F－8・9グリッドに位置する。第145・217・263号住居跡と重複し、新旧関係はいずれの住居跡よりも新しい。遺構の大部分が調査区域外におよんでおり、平面形および規模は不明である。確認面からの深さ0.55mで、覆土には黄褐色粘質土ブロックを含む砂質土が堆積している。

出土遺物はなく、時期は不明であるが、他遺構との重複関係からは7世紀第Ⅰ四半期以降と思われる。

第143号住居跡（第114・115図）

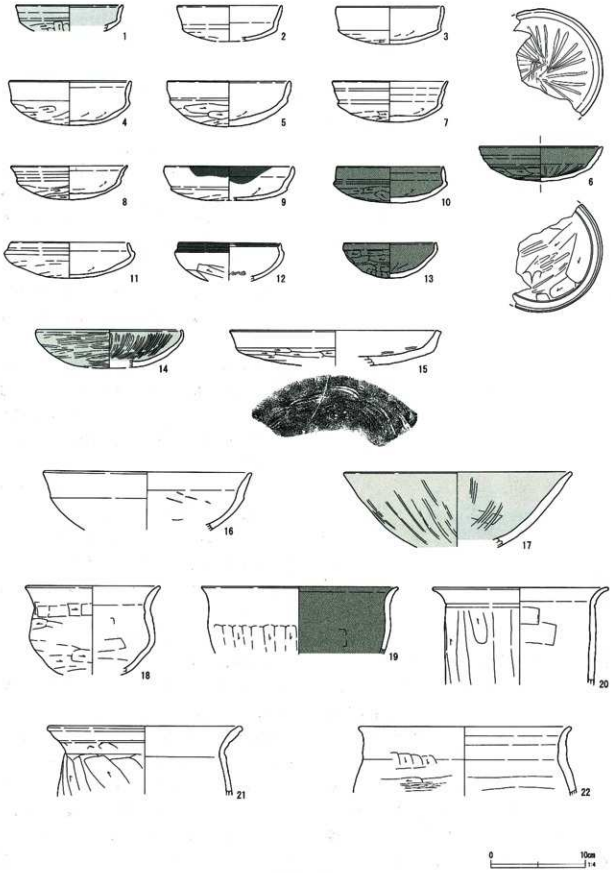
調査区東部、F－7・8グリッドに位置する。第222・263号住居跡、第31号井戸跡と重複し、新旧関係は、第31号井戸跡よりも古く、その他の住居跡よりも新しい。北東コーナーは調査区域外および未検出である。

平面形は台形で、規模は東西軸5.34m、南北軸4.82m、確認面からの深さ0.36mである。

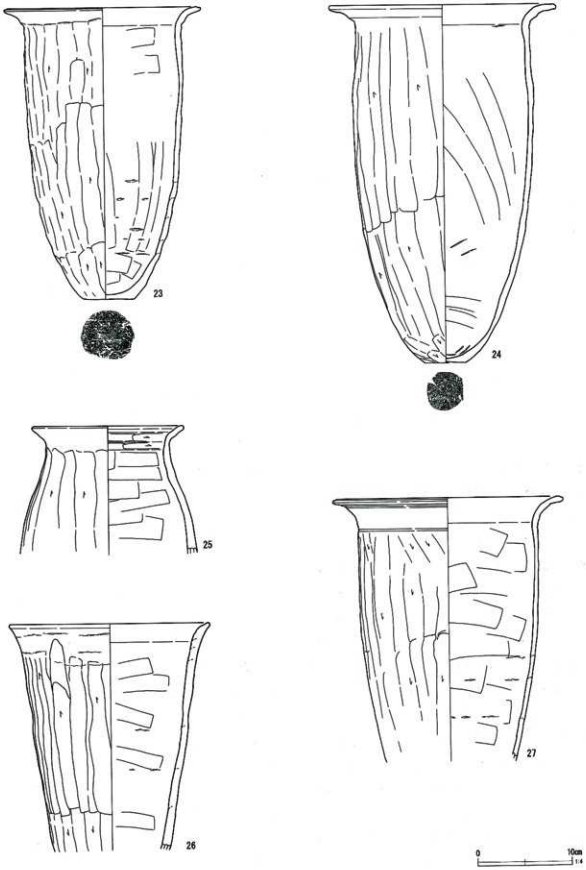
カマドは東壁中央に設けられ、方位はN－105°－Wで、住居跡本体に対してやや南に振れている。袖部は両側が確認され、壁からの残存規模は左壁70㎝、右袖72㎝、構築土には黄灰色粘質土（16層）が用いられていた。燃焼部は壁内に収まり、煙道部とは15～20㎝ほどの明瞭な段差が設けられる。底面は床面よりわずかに低い位置にあり、規模は奥行き50㎝、幅27㎝である

煙道部底面はやや凹凸をもちながら、外側へ向かって5°の角度で上昇し、壁外へ136㎝延びる。

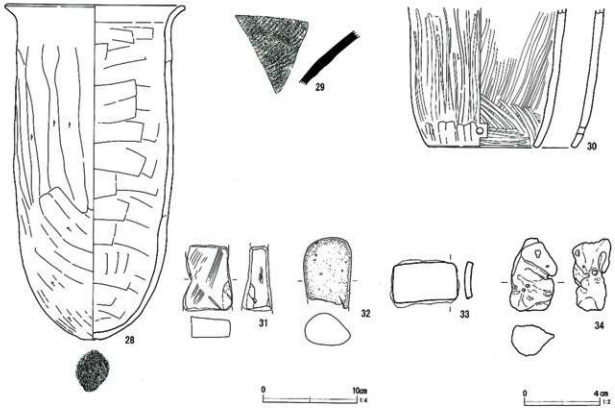
遺物は、カマド燃焼部で1の土師器坏が出土したほか、カマド前面の覆土下層で2の土師器鉢が出土した。2は口縁部が外反せず、頸部と胴部の境界の見られない土器で、内外面には粘土紐輪積み痕を残している。このほか、床面および覆土から土師器坏



第106図　第139号住居跡出土遺物（1）



第107図　第139号住居跡出土遺物（２）



第108図　第139号住居跡出土遺物（3）

・甕の破片が少量出土した。

出土遺物から時期は6世紀第Ⅳ四半期に位置づけられる。

第144号住居跡（第116・117図）

調査区北東側、E－6グリッドに位置し、流路跡第二次堆積層に掘られている。第16号土坑と重複し、新旧関係は第16号土坑より古い。第16号土坑が覆土中に掘り込まれているが、床面への影響は見られない。住居跡北側は調査区域外におよんでおり、カマドの大部分と北東コーナーが未検出である。

平面形は東西に長い長方形で、主軸方向はN－3°－Wである。規模は東西軸4.3m、南北軸3.22mである。確認面からの深さ0.66mである。粒径の大きい褐色砂質土中に掘り込まれていることから、各所で壁の崩落が進行しており、南側と東側ではその傾向が著しい。B－B′付近では壁が確認面まで立ち上がらず、覆土が住居跡外へと続いている。床面は、カマド近辺のみで、しまりの強い黄褐色粘質土による貼り床が検出された。覆土は黄褐色粘質土ブロックや炭化物ブロックを含む褐色砂質土が厚く堆積する。

カマドは先述のように、その大半が調査区域外におよんでおり、検出されたのは燃焼部および左右の袖部の一部である。カマドは北壁ほぼ中央に設けられる。袖部は両側が残っていたが、確認できたのはともに先端部のみである。袖部はしまりの強い黄褐色粘質土（13層）が用いられ、床面からの残存高は、左袖15cm、右袖が10cmであった。燃焼部底面は床面よりわずかに低い位置にあるが、明確な掘り込みは見られない。燃焼部幅は32cmで、底面は床面より5cmほど低く、灰が厚く集積する。燃焼部からカマド前面の床面では灰や炭化物、焼土ブロックの堆積が見られた。

カマド以外の施設としては、北壁のカマド近辺を除く住居跡全体に壁溝が確認されている。幅は9～22cmで、床面からの深さ12cmである。

第40表　第139号住居跡出土遺物観察表（第106・107・108図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	重量	残存(%)	タイプ	胎土	焼成	色調	出土位置・備考	図版
1	土師器	坏	(11.4)	2.8	－	27.6	15	埼南		良好	赤		
2	土師器	坏	(11.0)	3.8	－	35.3	20	埼北		普通	橙		
3	土師器	坏	(11.2)	4.0	－	60.8	45	群東		普通	橙		
4	土師器	坏	6.4	4.7	－	126.6	55	群東		普通	灰黄褐	掘り方　外面黒斑	164－3
5	土師器	坏	13.0	4.8	－	244.4	95	群東	針	普通	赤	カマド燃焼部　内面赤彩か	164－4
6	土師器	坏	(13.0)	3.7	－	86.5	40	埼北	針	良好	黒褐		
7	土師器	坏	12.2	4.3	－	105.1	75	埼北		良好	灰白		164－5
8	土師器	坏	(12.4)	3.5	－	48.5	25	群東	雲	普通	にぶい黄橙		
9	土師器	坏	(13.6)	3.6	－	56.6	35	栃南		普通	灰白	漆付着	164－6
10	土師器	坏	11.4	3.8	－	165.8	95	埼北	針	良好	黒	カマド前面	164－7
11	土師器	坏	(12.4)	3.8	－	90.8	45	栃南	針	普通	灰白		164－8
12	土師器	坏	(10.8)	4.0	－	29.6	10	佐野	雲	普通	灰黄	漆付着	
13	土師器	坏	10.0	3.7	－	80.4	85	群東		良好	黒		164－9
14	土師器	坏	(15.4)	4.0	－	63.3	25	栃南	針	普通	赤		
15	土師器	盤	(23.2)	3.8	－	181.8	30			普通	橙		164－10
16	土師器	坏	(19.8)	6.1	－	53.7	5	埼北	雲	普通	にぶい橙		
17	土師器	高坏	(24.2)	7.9	－	367.3	15	茨西		普通	赤	掘り方	
18	土師器	甕	(14.0)	9.3	－	189.8	35	群東		普通	橙	掘り方	
19	土師器	鉢か	(21.0)	7.1	－	113.2	10	茨西	雲、針	良好	灰黄		
20	土師器	甕	(18.2)	10.3	－	222.9	15	埼北	針	普通	灰黄	カマド燃焼部	
21	土師器	甕	(20.8)	7.3	－	114.2	10	埼北	角	普通	浅黄橙		
22	土師器	甕	(22.0)	7.3	－	210.2	5	茨西	雲、角	良好	灰黄	掘り方	
23	土師器	甕	20.0	30.6	6.5	825.0	50	埼北		普通	浅黄	カマド燃焼部	206－4
24	土師器	甕	23.6	37.6	4.3	1817.0	70	埼北		普通	にぶい黄橙	カマド燃焼部	207－1
25	土師器	甑か	15.6	13.5	－	497.4	20	群東	針	普通	橙	掘り方	
26	土師器	甕	20.9	24.0	－	1733.2	80	群東	角、針	普通	橙	カマド右袖構築材	207－2
27	土師器	甕	23.5	27.7	－	1473.3	50	埼北	雲	普通	浅黄	カマド左袖構築材	207－3
28	土師器	甕	19.1	35.1	2.8	1891.0	90	栃南	雲	普通	明黄褐	カマド焚口架構材か	207－4
29	須恵器	甕	－	5.8	－	48.6	5	茨西	針	普通	灰黄		
30	土師器	甑	－	14.8	(11.0)	984.4	45	茨西	雲、角	普通	にぶい黄橙	対角線上に穿孔2ヶ所	
31	石製品	砥石	長6.9幅5.2厚2.2重102.2								浅黄	砂岩製	235－1
32	石製品	編物石か	長7.2幅5.0厚3.4重183.0					埼玉				凝灰岩製	
33	鉄製品	不明	長(3.4)幅(2.0)厚(0.3)重13.7									板状	237－2
34	瓦製品		長3.8幅2.4厚1.6重11.2								赤橙	掘り方、12孔、被熱	238－1

遺物は、覆土から土師器坏、土玉などが出土した。1は住居跡南東で床面から10cmほど浮いた位置で出土している。土玉は覆土から2点出土している。

出土遺物から、時期は7世紀第Ⅳ四半期に位置づけられる。

第145号住居跡（第118図）

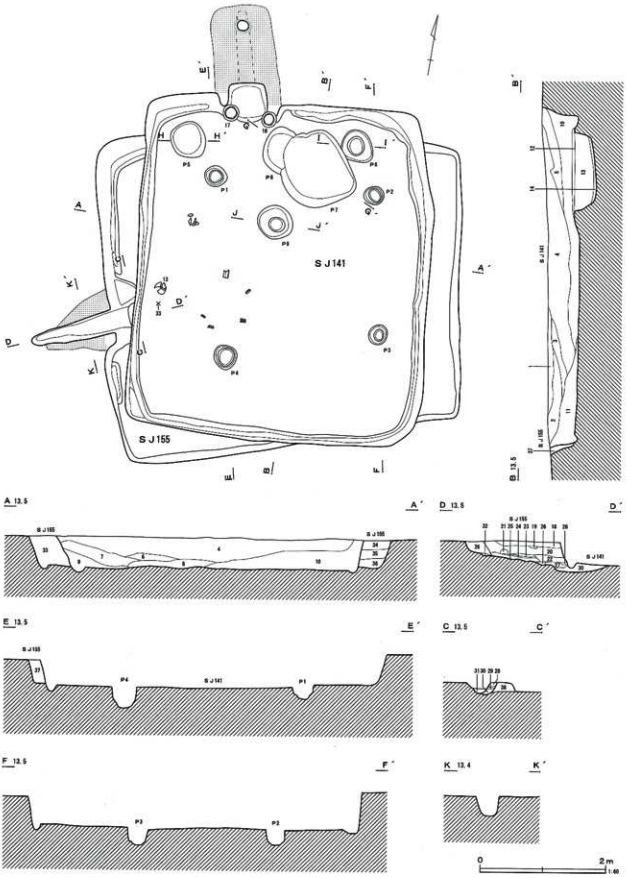
調査区東端、F・G－8・9グリッドに位置する。第129・142・148・217号住居跡と重複し、新旧関係はいずれの住居跡よりも古い。住居跡北半と南東コーナーは調査区域外におよんでいるため平面形は不明である。主軸方向はN－24°－Eと推定される。規模は残存している東西軸で6.35m、確認面からの深さは最深部で0.14mである。

カマドおよびその他の施設は確認されていない。

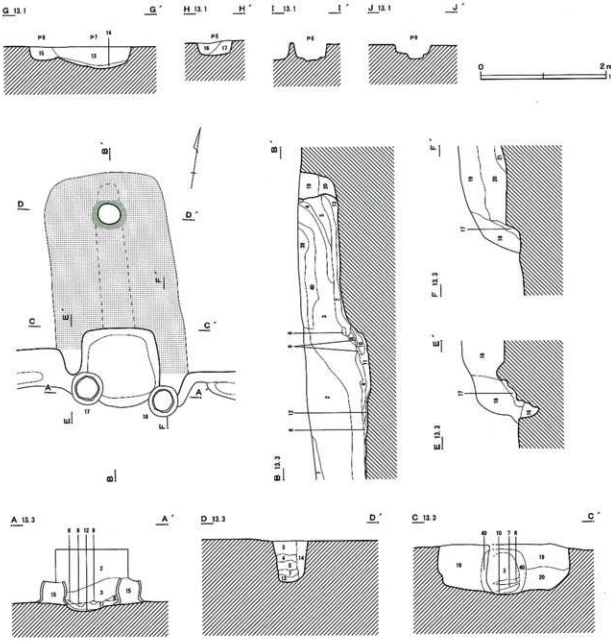
出土遺物はなく、時期は不明であるが他遺構との重複関係からは6世紀第Ⅱ四半期以前と思われる。

第146号住居跡（第119・120図）

調査区南東側、H－6グリッドに位置する。第121・122・131・139・249・260号住居跡と重複し、新旧関係は第131・139号住居跡よりも古く、その他の



第109図　第141・155号住居跡



S J141
1 褐色土　砂質　黄褐色粘質土ブロック多量
　　炭化物粒子微量
2 褐色土　砂質
3 暗褐色土　砂質　黄褐色粘質土ブロック少量
　　焼土ブロックやや多量　炭化物多量
4 褐色土　砂質　黄褐色粘質土ブロック少量
　　焼土ブロック少量　炭化物多量
5 褐色土　砂質　褐色粘質土ブロック少量
6 暗灰色土　砂質　焼土ブロック少量
7 黒色土　炭化物集積層　焼土ブロック少量
8 暗灰色土　黄褐色粘質土ブロック多量
　　炭化物少量
9 褐色土　砂質　炭化物ブロックやや多量
10 暗褐色土　砂質　褐色粘質土ブロック少量
11 灰褐色土　砂質　炭化物微量
12 黄褐色土　粘土ブロック層（貼り床）
13 灰褐色土　砂層　粘性弱
14 暗褐色土　砂層　粘性強
15 暗褐色土　砂層　粘質土ブロック少量
　　粘性強
16 暗褐色土　砂層　粘性弱
17 明褐色土　砂層　粘性強

S J155
18 黄褐色土　炭化物微量　粘性やや強
19 暗赤褐色土　粘性やや強（焼土粒天井）
20 暗黄褐色土　砂質　焼土粒子微量
21 暗赤褐色土　砂質（天井崩落土）　煙道部
22 暗黄褐色土　砂質　焼土粒子多量　炭化物少量
23 暗黄褐色土　砂質　焼土粒子微量
24 灰色土　炭化積層
25 灰褐色土　砂質　炭化物少量
26 明黄褐色土　焼土粒子・炭化物少量
　　粘性やや強
27 明黄褐色土　粘土質
28 黄褐色土　砂質
29 灰色土　炭集積層
30 灰褐色土　砂質　焼土粒子微量　炭化物少量
31 暗褐色土　砂質　焼土ブロック・
　　炭化物ブロックやや多量
32 灰褐色土　砂質　下位に厚く炭堆積
33 褐色土　砂質　炭化物ブロックやや多量
34 褐色土　砂質（細砂）
35 褐色土　砂質（粗砂）
36 褐色土　砂質土と黄褐色粘土の混層
37 灰褐色土　砂質　炭化物微量
38 黄灰色土　粘質土ブロック層　カマド袖
39 黄褐色土　粘質土（カマド張り方）
40 赤色土　カマド張り方（被熱面）

0　1m
1:30

第110図　第141号住居跡カマド